

健康科学部

健康システム学科

専門教育科目
教職に関する科目

教育目標

I 教育目標・理念

健康システム学科は、健康を身体的側面にとどまらず、精神的側面、さらには社会的側面にも広げて、「心の健康」、「身体の健康」、「健康な社会」等を探究し、健康に関する広い知識を体得した人材を育成します。また、すべてのライフステージを対象に健康を創り出し、それを維持・増進するための支援ができる知識・態度・能力を身につけることを目指します。

II 分野別教育目標と指導体系

本学科では、運動・体育、養護・保健・心理の二つの分野を主な柱として、卒業には「基礎・教養科目」「学科専門科目」「卒業研究」の中の必修科目と選択科目を履修し、それぞれ卒業に必要な要件を満たすこととなります。

(1) 運動・体育系（スポーツインストラクター、トレーナーを含む）

運動・体育系の内容の学修を目指す学生は、I群の運動・体育に関連する科目を主として履修します。ただし専門基礎科目群や養護・保健に関する科目群の科目を履修し、健康を科学的かつ総合的に理解する事が必要になります。さらに保健体育の教諭を目指す学生は教職科目（卒業要件単位外）を履修する必要があります。

(2) 養護・保健・心理系

養護教諭・中学校・高等学校の保健教諭の免許を目指す学生は、II群の養護・保健に関連する科目を主として履修します。ただし、専門基礎科目群や運動・体育系の科目群にも関連の科目があり、また、健康科学を総合的に学び深めるために、科目群ごとに決められた卒業必要単位に関わらずに履修し、修得することが重要です。免許取得には、教職科目（卒業要件単位外）を履修する必要があります。

平成 22 年度 (2010 年度) 入学者

卒業要件単位数

科目区分		卒業必要単位	内必修単位と科目数	
基礎・教養科目		30 単位	10 単位	5 科目
専門教育科目	専門基礎科目群	8 単位	8 単位	4 科目
	I 群（運動・体育に関連する科目）	6 単位	—	—
	II 群（養護・保健に関連する科目）	6 単位	—	—
	卒業研究	6 単位	6 単位	2 科目
その他上記の科目区分のいずれかから		68 単位	—	—
合計		124 単位	24 単位	11 科目

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成22年度（2010年度）入学者対象

（ ）は兼任、[]は兼任講師

授業 科目の 区分	授業科目の名称	授業 方法	単位数		運動 実践 指導者	教員免許関係			学年配当 (数字は週当たり授業時間)								平成22年度の 担当者	
						養護	保健 体育	保健	1年		2年		3年		4年			
									I	II	I	II	I	II	I	II		
専	基礎ゼミⅠ	演習	2						2								平本 幸治他	
	基礎ゼミⅡ	演習	2						2								平本 幸治	
	基礎ゼミⅡ	演習	2						2								河野 稔	
	基礎ゼミⅡ	演習	2						2								加藤 和代	
	基礎ゼミⅡ	演習	2						2								樽本 つぐみ	
	基礎ゼミⅡ	演習	2						2								矢野 琢也	
門	健康科学序論	講義	2						2								多田 章夫	
	健康科学	講義	2		◇					2								
	情報科学	講義	2						2								河野 稔	
	基礎生物学	講義	2						2								(本多 久夫)	
	解剖学	講義	2		◇	○			□	2							[押本 剛]	
	生理学	講義	2			○	△		□	2							多田 章夫	
	微生物学	講義	2			○			□			2						
	生化学 (分子生物学を含む)	講義	2								2							
	分子生物学演習	演習	2									2						
	栄養学	講義	2			○			□	2								須見 登志子
	食品学	講義	2			○				2								[島田 邦夫]
	栄養指導論	演習	2									2						
基	衛生学	講義	2			○	△		□	2							[島田 邦夫]	
	公衆衛生学	講義	2				△		□			2						
	医学概論	講義	2			○							2					
	心理学研究法	講義	2								2							
	心理測定法	演習	2									2						
	心理学基礎実験	実験	2											4				
	心理学応用実験	実験	2												4			
	認知心理学	講義	2								2							
	健康心理学	講義	2		◇						2							
	臨床健康心理学演習	演習	2									2						
	生涯発達心理学	講義	2										2					
	臨床心理学	講義	2										2					
育	教育心理学	講義	2			○	△		□			2						
	発達心理学	講義	2					▲	■			2						
	ストレス科学論	講義	2											2				
	人間関係論	講義	2											2				
	外書購読Ⅰ	講義	2										2					
	外書購読Ⅱ	講義	2										2					
	教育特論Ⅰ	講義	2										2					
	教育特論Ⅱ	講義	2											2				
	教育特論Ⅲ	講義	2												2			
	地域活動演習Ⅰ	演習	2											2				
	地域活動演習Ⅱ	演習	2												2			

◇は健康運動実践指導者養成科目

○は養護教諭免許必修科目、●は養護教諭免許選択科目

△は保健体育免許必修科目、▲は保健体育免許選択科目

□は保健免許必修科目、■は保健免許選択科目

※ 「スポーツ実践Ⅰ」、「スポーツ実践Ⅱ」、「健康・体力づくり実践Ⅰ」、「健康・体力づくり実践Ⅱ」、
「専門施設実習」は、定期授業の他に学外実習を行う。

※ 「レクリエーション (野外活動を含む)」は、4時間のうち3時間を学外実習にあてる。

※ 健康運動実践指導者養成講座科目として、表中の科目以外に集中講義として「運動障害と予防」と「救急処置」を2年
「運動の基礎」の中で「発育・発達と老化」を履修する。

※ 認定心理士養成科目として、表中の科目以外に3年Ⅱ期に「行動分析論」と「社会心理学」を履修する。

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成22年度（2010年度）入学者対象

（ ）は兼任、[]は兼任講師

授業科目区分	授業科目の名称	授業方法	単位数		運動実践指導者	教員免許関係			学年配当 (数字は週当たり授業時間)								平成22年度の担当者	
			必修	選択		養護	保健体育	保健	1年		2年		3年		4年			
									I	II	I	II	I	II	I	II		
専門に 関する 科目 (運動 ・ 体育 に 関 連 す る 科 目)	体育原理	講義		2			△		2									徳田 泰伸
	運動の基礎	講義		2	◇		△		2									樽本 つぐみ
	運動生理学	講義		2	◇		△	□			2							
	運動生理学演習	演習		2							2							
	運動栄養学	講義		2	◇		△			2								
	子ども運動学	講義		2				△		2								三宅 一郎
	子ども運動学演習	演習		2				▲		2								
	スポーツ医学概論	講義		2							2							
	スポーツ心理学	講義		2				▲			2							
	障害者スポーツ論	講義		2											2			
	スポーツ史	講義		2										2				
	スポーツ科学Ⅰ	演習		2									2					
	スポーツ科学Ⅱ	演習		2										2				
	トレーニング科学Ⅰ	演習		2	◇						2							
	トレーニング科学Ⅱ	演習		2								2						
	体力測定と評価	講義		2	◇			▲		2								徳田 泰伸
	スポーツ実践Ⅰ	演習		3				△		3								三宅 一郎・徳田 泰伸・樽本 つぐみ
	スポーツ実践Ⅱ	演習		3				△		3								三宅 一郎・徳田 泰伸・樽本 つぐみ
	健康・体力づくり実践Ⅰ	演習		3				△			3							
	健康・体力づくり実践Ⅱ	演習		3	◇			▲				3						
	スポーツ指導法Ⅰ	演習		2				△					2					
スポーツ指導法Ⅱ	演習		2				△						2					
健康・体力づくり指導法Ⅰ	演習		2	◇								2						
健康・体力づくり指導法Ⅱ	演習		2	◇									2					
運動処方論	講義		2										2					
運動処方演習	演習		2											2				
レクリエーション (野外活動を含む)	実習		2				△							4				
育 科 目 (群 ・ 養 護 ・ 保 健 に 関 連 す る 科 目)	Ⅱ 病理学概論	講義		2								2						
	薬理学	講義		2			○						2					
	養護概説Ⅰ	講義		2			○			2								加藤 和代
	養護概説Ⅱ	講義		2			●				2							大平 曜子
	学校保健Ⅰ (小児保健・学校安全を含む)	講義		2			●	△	□		2							[山本 良穂]
	学校保健Ⅱ	講義		2			○	△	□			2						
	学校保健Ⅲ	講義		2			○	△	□			2						
	精神保健	講義		2			○	△	□			2						
	健康行動論	講義		2				△	□			2						
	健康統計学	講義		2				●	■				2					
	健康相談活動の理論と実践	講義		2				○						2				
	看護学概論	講義		2				○				2						大平 曜子
	看護学Ⅰ	演習		3				○				3						
	看護学Ⅱ	講義		2				○					2					
	看護学Ⅲ	演習		3				○					3					
	看護学Ⅳ	演習		2				○						2				
臨床基礎実習	実習		1				○				2							
臨床看護実習	実習		2				○						4					
救急看護 (救急処置を含む)	演習		3				○	△	□				3					
卒業研究	卒業研究Ⅰ	演習		3											3			
	卒業研究Ⅱ	演習		3												3		

※ 学年配当欄において○囲みで表示している科目については、○囲みで表示されている学年・学期のいずれかにおいて登録、履修できる科目である。

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成22年度（2010年度）入学者対象

（ ）は兼任、[]は兼任講師

授業科目の区分	授業科目の名称	授業方法	単位数		運動実践指導者	教員免許関係			学年配当 (数字は週当たり授業時間)								平成22年度の担当者	
						養護	保健体育	保健	1年		2年		3年		4年			
									I	II	I	II	I	II	I	II		
教職に関する科目	教職概論	講義	2			○	△	□	2									廣岡 義之
	教育原理	講義	2			○	△	□	2									廣岡 義之
	教育史	講義	2			●	▲	■					2					
	教育制度論	講義	2			○	△	□	2									廣岡 義之
	教育課程論	講義	2			○	△	□		2								
	保健・保健体育科教育法Ⅰ (保健教育内容研究)	講義	2					△	□		2							
	保健・保健体育科教育法Ⅱ (保健教育法研究)	講義	2					△	□			2						
	保健科教育法Ⅰ (保健科教育教材研究)	講義	2						□			2						
	保健科教育法Ⅱ (保健科教育法演習)	講義	2						□				2					
	保健体育科教育法Ⅰ (保健体育科教育研究)	講義	2						△			2						
	保健体育科教育法Ⅱ (保健体育科教育法研究)	講義	2						△				2					
	道德教育論	講義	2				○	△	□		2							
	特別活動論	講義	2				○	△	□			2						
	教育方法・技術論	講義	2				○	△	□			2						
	教育方法論	講義	2				●						2					
	生徒指導論 (進路指導を含む)	講義	2				○	△	□		2							
	教育相談 (カウンセリングを含む)	講義	2				○	△	□	2								(琴浦 志津)
	教育実践演習 (中・高)	演習	2						△	□							2	
教育実践演習 (養護)	演習	2				○										2		
中学校教育実習 (事前事後指導を含む)	実習	5						△	□						5			
高等学校教育実習 (事前事後指導を含む)	実習	3													3			
養護実習 (事前事後指導を含む)	実習	5				○									5			

◇は健康運動実践指導者養成科目

○は養護教諭免許必修科目、●は養護教諭免許選択科目

△は保健体育免許必修科目、▲は保健体育免許選択科目

□は保健免許必修科目、■は保健免許選択科目

※ 教職に関する科目を修得しても、卒業要件単位には含まれない。

※ 教育職員免許状を取得するためには、上記科目のほか、教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目として、日本国憲法 (2単位)、体育 (2単位)、外国語コミュニケーション (2単位)、情報機器の操作 (2単位) について、指定の科目を修得すること。

《専門基礎科目群》

科目名	基礎ゼミ I				
担当者名	平本 幸治・河野 稔・加藤 和代・樽本 つぐみ・矢野 琢也				
授業方法	演習	単位・必選	2・必	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

これまでの学習方法とは異なり、大学ではより主体的な問題解決能力、思考力、表現力等が求められます。「基礎ゼミ I」は知的活動への動機づけを高め、科学的研究のための主体的学習のオリエンテーション機能を果たします。均等に配当された学生（8～10名程度）を一人の教員が担当し、学習の教材は、大学教養の範囲を超えない共通基礎領域の課題とし、担当教員の専門性を通して学習へのモチベーションを高めます。今後、大学での学習活動が円滑に進められるように、ゼミナール形式の授業の利点を活かし、学生と担当教員がコミュニケーションを取り合い、相互に尊重し合い、高め合う効果も期待されます。

《授業の到達目標》

①情報収集（ノートテキングを含む）、②文章表現、レポート・論文・レジュメの書き方、③口頭での報告・プレゼンテーション、④文献検索（図書館の利用方法）、⑤論議・ディベート等、専門領域の枠を超えて、大学での学習方法の基礎的知識と学習のスキルの習得を目標とします。

《テキスト》

各担当教員が指示します。

《参考文献》

適宜紹介します。

《成績評価の方法》

参加意欲・授業態度を重視します。授業実施回数の3分の1以上を欠席すると単位認定の資格を失います。レポートの提出等（学習成果の発表）（60%）、授業時の提出物・参加意欲・学習態度等（40%）

《授業時間外学習》

自らの学習課題を明確にし、授業に主体的に臨めるように、その課題を克服するように努力して下さい。

《備考》

授業計画は目安です。担当教員によって進行が異なる場合があります。図書館を利用する授業は時間が変更される場合があります。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション ゼミの進め方、メンバーの紹介等
第 2 週	学習活動における基本的知識と学習のスキル
第 3 週	文献検索、資料収集 図書館の利用方法、検索の方法
第 4 週	学習活動の基礎的知識 ① 問題意識から研究課題へ
第 5 週	学習活動の基礎的知識 ② 情報収集
第 6 週	学習活動の基礎的スキル ①
第 7 週	学習活動の基礎的スキル ②
第 8 週	演習課題への取り組み ①
第 9 週	演習課題への取り組み ②
第 10 週	演習課題への取り組み ③
第 11 週	演習課題への取り組み ④
第 12 週	学習成果の表現方法
第 13 週	成果の発表 ① 文書や口頭
第 14 週	成果の発表 ② 文書や口頭
第 15 週	学習のまとめ

《専門基礎科目群》

科目名	基礎ゼミⅡ				
担当者名	平本 幸治				
授業方法	演習	単位・必選	2・必	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

最新の健康科学や自然科学に関する基本的な論説文を用いて英語による情報を収集し、知識として活用する練習を行います。テキストを着実に読み進み、内容、語義、文法事項、慣用句、発音等を確認します。CD を利用して音声面の練成を行います。小テストにより基本的な知識が定着するように努めます。

《授業の到達目標》

将来の研究や職場で遭遇する英語による情報を理解でき、健康や科学に関するコミュニケーションに必要な実用的な英語を身に付けることを目標とします。

《テキスト》

必要に応じてプリントを配布します。

《参考文献》**《成績評価の方法》**

期末レポート（50%）、授業中に実施する小テスト（50%）

《授業時間外学習》

授業でプリントを配布しますので次回の学習範囲の単語や慣用句などの意味を調べ、精読しておいて下さい。

《備考》**《授業計画》**

週	授 業 計 画
第 1 週	1 Water and Health
第 2 週	2 Life Expectancy Limits 及び 前回の復習
第 3 週	3 Dyslexia 及び 前回の復習
第 4 週	4 CPR 及び 前回の復習
第 5 週	5 Age and Memory 及び 前回の復習
第 6 週	6 Dental Care Advances 及び 前回の復習
第 7 週	7 Ears 及び 前回の復習
第 8 週	8 Smoking 及び 前回の復習
第 9 週	9 Hospitals 及び 前回の復習
第 10 週	10 Chicken 及び 前回の復習
第 11 週	11 Tea 及び 前回の復習
第 12 週	12 Coffee 及び 前回の復習
第 13 週	13 Wildlife 及び 前回の復習
第 14 週	14 Environment 及び 前回の復習
第 15 週	前回の復習 及び 学習のまとめ

《専門基礎科目群》

科目名	基礎ゼミⅡ				
担当者名	河野 稔				
授業方法	演習	単位・必選	2・必	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

「ゼミ」という授業形態は、少人数の参加者がコミュニケーションをとりながらお互いに学び合う、大学での学習の基礎になるものです。この授業では、「基礎ゼミⅠ」で学習した大学での学習スキルを元に、さまざまな文献・資料を調査し、その内容を文書などでまとめて発表し、その発表をもとに他の受講生との議論や意見交換を通じて、より高度な学習スキルの習得を目指します。

扱うテーマは、「情報倫理」です。情報化社会において必要不可欠である、コンピュータやインターネットの利用について、私たちの生活に役立つ側面とトラブルや犯罪などの問題となる側面について着目し、技術的な知識をだけでなく倫理的・法規的な知識も深め、問題点の指摘や解決方法を考えていきます。

《授業の到達目標》

- 大きなテーマからトピックを絞り込んでトピックを調査できる。
- 文献や調査結果からプレゼンテーションやレポートとしてまとめることができる。
- 発表や意見交換を通じて、テーマに関する問題点を指摘したり、新しい課題を発見できる。
- 情報倫理に関するトピックについて、幅広い視点から考察することができる。

《テキスト》

テキストは使用しません。必要に応じて、プリントを資料として配布します。

《参考文献》

- ・『インターネットの光と影 Ver.4』情報教育学研究会・情報倫理研究グループ編（北大路書房）2010年
 - ・『インターネット社会を生きるための情報倫理 2010』情報教育学研究会・情報倫理研究グループ編（実教出版）2009年
- その他の文献や資料は、必要に応じて紹介します。

《成績評価の方法》

- ・発表内容（40%）、発表にもとづくレポート（40%）、ディスカッションでの参加態度（20%）で評価します。
- ・欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の場合は単位を与えません。

《授業時間外学習》

○予習について

数名を指定して、毎回の授業で情報倫理に関するトピックについて、文献や資料を調査して、その結果と自分の意見をまとめたものを発表してもらいます。指定された以外の受講生は質問を考えてもらいます。

○復習について

毎回の授業での発表の後に、発表内容についての感想やトピックについての意見を、レポート形式の文書にまとめて、次回の授業で提出してもらいます。

《備考》

近年、インターネットを利用した悪質な犯罪や重大なトラブルが多発しています。しかし、その原因となっているのがごく一部の人間であることを、しっかり見定めなければなりません。情報社会の中でコンピュータやインターネットをより良く利用するために、身につけるべき知識や方策を授業全体をとおして学習していきます。学生の皆さんの積極的な参加を期待します。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション：ゼミの進め方について
第 2 週	情報倫理全般について(1)／関連情報や文献の調査方法
第 3 週	情報倫理全般について(2)／レポートの書き方
第 4 週	情報倫理全般について(3)／発表の仕方、質問や意見交換の仕方
第 5 週	発表とレポート：「インターネットと情報社会」
第 6 週	発表とレポート：「インターネットと個人情報」
第 7 週	発表とレポート：「インターネットと知的財産権」
第 8 週	発表とレポート：「インターネットと生活」
第 9 週	発表とレポート：「インターネットとビジネス」
第 10 週	発表とレポート：「インターネットと教育」
第 11 週	発表とレポート：「インターネットとコミュニケーション」
第 12 週	発表とレポート：「インターネットと犯罪」
第 13 週	発表とレポート：「インターネットとセキュリティ」
第 14 週	発表とレポート：「健全な情報社会を目指して」
第 15 週	発表全体とレポート全体のまとめ／ゼミ活動のふり返り

《専門基礎科目群》

科目名	基礎ゼミⅡ				
担当者名	加藤 和代				
授業方法	演習	単位・必選	2・必	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

深刻化しているいじめ・不登校・虐待などのメンタルヘルスの問題、喫煙・飲酒・薬物乱用、性の問題行動など身近な健康問題をテーマに調べていくことで、心と体の健康への関心を高めるとともに適切な行動化への意欲を高めることをねらいとします。授業では各自が興味ある課題を、書籍、新聞、Webサイトなどの資料を活用し、現状や課題、提言をレポートにまとめます。また現状や課題そして提言を相手にわかりやすく伝えるプレゼンテーションの方法、意見交換の仕方なども身につけることもねらいとするため、積極的な参加態度が求められます。

《授業の到達目標》

- 資料検索の方法ならびに適切な資料を丁寧に読みとることができる。
- 調査・発表・意見交換により、健康課題への認識を深め、健康をより科学的にとらえることができる。
- それぞれの健康課題のテーマから「自らの健康上の問題や課題」を明らかにし改善することができる。

《テキスト》

資料を配布する

《参考文献》

学校保健の動向平成21年度版（財団法人日本学校医保健会） その他随時紹介する。

《成績評価の方法》

参加態度・発表（50%）、レポート（50%）で総合的に評価する。

《授業時間外学習》

示されたテーマについて、文献・資料をもとに自分の意見や提案をまとめ、次回の意見交換の場に活かす。

《備考》

発表時の質疑・意見、指導講評をもとに修正した最終レポートを提出する。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション ゼミの進め方
第2週	レポート作成について
第3週	発表の仕方（プレゼンテーション）意見交換の仕方
第4週	健康課題の基礎知識（1） たばこ人形実験など
第5週	発表・意見交換（健康課題「喫煙」テーマ例 やめられないのは意思が弱いからか？）
第6週	健康課題の基礎知識（2）
第7週	発表・意見交換（健康課題「いじめ」テーマ例 いじめられる側も悪い？）
第8週	健康課題の基礎知識（3）
第9週	発表・意見交換（健康課題「虐待」テーマ例 虐待はなぜエスカレートしていくのか？）
第10週	健康課題の基礎知識（4） アルコールパッチテスト等の体験
第11週	発表・意見交換（健康課題「飲酒」テーマ例 アルコール中毒者が増えるのはなぜか？）
第12週	健康課題の基礎知識（5） あなたの性感染症知識をテストする
第13週	発表・意見交換（健康課題「性感染症」テーマ例 クラミジアは怖くない？）
第14週	健康課題解決のために学校では、地域では、国での取組み
第15週	まとめ

《専門基礎科目群》

科目名	基礎ゼミⅡ				
担当者名	樽本 つぐみ				
授業方法	演習	単位・必選	2・必	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

近年の健康志向の高まりによりジョギングやマラソンは人気のスポーツであるが、学校体育では苦手なスポーツの代表でもある。そこで、長距離を走るための生理的特性を理解するとともに、トレーニングを行うことによってその効果を自分の身体で体得し、長距離走の必要性を理解し、発表し、表現する(加古川マラソン大会出場)ことが目標である。

本講義は、卒業必修科目であり、基礎ゼミⅠで学んだ内容をより深めていくことが必要です。

《授業の到達目標》

長距離走に必要なテーマを挙げ、それぞれについて情報を収集し、話し合い、トレーニング計画を立て、トレーニングを行う。その成果をマラソン大会において発揮する。本講義で学んだことを自らの生活に振り返ることで、競技力(パフォーマンス)の向上や生活習慣病の改善ができるようになる。

《テキスト》

テキストは使用しません。必要に応じて資料を配付します。

《参考文献》

「長距離走者の生理科学」平木場浩二(杏林書院)

「スポーツトレーニング理論」伊藤マモル(日本文芸社)

《成績評価の方法》

「評価の方法」・・・毎時間のレポート、発表、大会の様子

「評価の割合」・・・レポート(40%)、発表(30%)、トレーニング方法と結果との関係(20%)

ただし、授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の時は評価対象外とします。

《授業時間外学習》

授業で学んだこと、調べたことをもとに12/23に行われる加古川マラソン大会に出場するとともに、大会を支えているボランティア活動を体験する。そこで、走る側と支える側の両面から、マラソンというものについて学習する。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション
第2週	長距離を走るための身体の構造を理解する
第3週	トレーニング計画を作成する
第4週	ペースランニングについて
第5週	長距離を走るための栄養・水分補給
第6週	スピードトレーニングについて
第7週	長距離を走るための補強・筋力トレーニング
第8週	インターバルトレーニングについて
第9週	長距離を走るための心理・疲労回復
第10週	ウェア・靴・防寒など環境への適応方法
第11週	大会に向けてのシミュレーションについて
第12週	長距離を走るためのピーキング
第13週	加古川マラソン大会出場
第14週	大会結果およびボランティア活動の報告と発表
第15週	長距離走についてのまとめ

《専門基礎科目群》

科目名	基礎ゼミⅡ				
担当者名	矢野 琢也				
授業方法	演習	単位・必選	2・必	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

- ・ 指導者として必要な「聞く、理解する、ポイントを見つける、まとめる、書く、発言する」の作業を徹底して行います。ほぼ毎回レポート課題あり。
- ・ 新聞、雑誌、TV、インターネット等あらゆる情報源からスポーツに関するトピックスを選出し、そのニュースを生理学等の知識を交えながら解説します。また出席者同士で討議も行います。
- ・ 本ゼミのルールとして基本的に『「わかりません」「意見はありません』』という回答は認めません。考える作業を常時行うのが本ゼミでの授業ですので、理解してください。

《授業の到達目標》

- ・ 基礎ゼミⅠで学んだことをベースにコーチングやトレーニング関係の情報等を教材にして行います。
- ・ 指導者として必要な能力である「聞く、理解する、ポイントを見つける、まとめる、書く、発言する」が出来ることを目的とし、この習得を徹底的に行います（第1目標）
- ・ コーチングに関する情報を中心に議論し、必要に応じて運動生理学や解剖学、社会学等の基礎知識にふれることで、指導者としての基礎知識の習得ならびに学ぶことの大切さを知ることを目標とします。（第2目標）

《テキスト》

特に指定しません。授業では必要に応じて資料を配布します。

《参考文献》

「ストレングス&コンディショニングⅠ」大修館書店、「ストレングストレーニング&コンディショニング」ブックハウス HD、「競技力向上のトレーニング戦略」大修館書店、「トレーニングの科学的基礎」ブックハウス HD、「入門運動生理学第3版」杏林書院、「スポーツ医科学」杏林書院、「図解スポーツトレーニングの基礎理論」西東社

《成績評価の方法》

ほぼ毎回のレポートと授業における発表で評価します（100%）。レポートは期日厳守です。原則遅れは受け取りません。無断欠席回数が4回以上の者は単位認定をしません。

《授業時間外学習》

- ・ 新聞を読む、関連するニュース番組を見る、実際にスポーツ観戦をする・スポーツをする等の積極的な行動を求めます。課題がほぼ毎回出るので、それをまずは行うことで基本的な能力を身につけて下さい。

《備考》

トレーニング指導者を目指す人の為の授業を行います。授業は楽しくかつ丁寧に行いますが、厳しくも行います。よってやる気のある人を求めます。真剣に学びたい人が、より多くのことを学べるよう積極的に授業を展開してゆきます。みなさんの積極的な姿勢を望みます。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション。受講希望者は必ず出席し、授業方針を理解すること。
第 2 週	指導者としてのあるべき姿について討論する。
第 3 週	コンディショニングとは何か？を考える。
第 4 週	トレーニング計画について考える。
第 5 週	スポーツ障害、特にオーバーユースに関して考える。
第 6 週	成長期のトレーニングについて考える。
第 7 週	オリンピックやW杯からトレーニングを考える。
第 8 週	筋組成（遅筋線維・速筋線維）の特性を理解する。
第 9 週	パワーに関する基礎知識を習得する。
第 10 週	筋持久力に関する基礎知識を習得する。
第 11 週	全身持久力に関する基礎知識を習得する。
第 12 週	エネルギー補給に関する基礎知識を習得する。
第 13 週	女性、高齢者に対するトレーニング効果について考える。
第 14 週	ディ・トレーニングに関する基礎知識を習得する。
第 15 週	総まとめ（討論&レポート）*必ず出席すること

《専門基礎科目群》

科目名	健康科学序論				
担当者名	多田 章夫				
授業方法	講義	単位・必選	2・必	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

健康と疾病は連続性を持っている。普段は当たり前のように考えがちな「健康状態」は、実は壮大かつ精巧な生体メカニズムによって維持されている。健康科学序論の授業においては、健康状態およびその維持についてのメカニズムを理解することで「健康であること」の大切さを再認識し、疾病予防や健康づくりに役立てる。

《授業の到達目標》

- 1 生体が健康を維持するためのメカニズム（恒常性の維持、調節機構等）を理解する
- 2 生体の健康維持機能の破綻によって疾患が発生するメカニズムを理解する

《テキスト》

指定しない。

《参考文献》

各単元毎に必要なに応じて紹介する。

《成績評価の方法》

- 1 定期試験 90%、小テスト 10%の割合で評価する
- 2 30分以上の遅刻は欠席扱いとし、出席率の低い者（授業欠席回数が授業回数の30%以上の場合）は定期試験の受験資格を失う

《授業時間外学習》

- 1 次回の授業範囲を予習し、概要を把握すること
- 2 毎回授業後、ノートを整理し、重要なポイントを理解すること
- 3 日頃から、健康状態について関心を持つよう心掛けること

《備考》

講義中は、他人の迷惑にならないよう最低限のマナーを守ること

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	健康の定義
第 2 週	個体の調節機構
第 3 週	生体リズム
第 4 週	睡眠
第 5 週	感覚
第 6 週	記憶
第 7 週	排泄
第 8 週	小テスト
第 9 週	組織の再生
第 10 週	加齢による身体的機能の低下
第 11 週	ストレス
第 12 週	食物摂取とエネルギー消費
第 13 週	生体防御（外界からの侵入者との戦い）
第 14 週	生体防御（内なる敵癌細胞との戦い）
第 15 週	血圧の調節

《専門基礎科目群》

科目名	情報科学				
担当者名	河野 稔				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

「コンピュータ演習」で学習した成果（情報リテラシー）を元に、これからの情報社会に適応できる能力（情報フルエンシー）を身につけることを目標とします。具体的には、コンピュータとネットワークを道具として使いこなすための、実践的な知識や技能を身につけることを目指します。また、コンピュータやネットワークに関する最新のトピックについても解説します。

毎回の授業では、講義と実習の両方を行い、講義については次の回到理解度を確認するための小テストを実施します。

- ・講義：コンピュータやネットワークの基礎に関する基礎的な知識を学習する
- ・実習：「文書作成」「表計算」「プレゼンテーション」について、実践的な活用を実習する
(手順などの詳細な説明はしないで、自学自習による問題解決を目指す)

《授業の到達目標》

- 情報システムの仕組みやその活用方法などの基礎的な内容を説明できる。
- ソフトウェアやシステムについての操作・手順を理解し、大学での学習活動に活用できる。
- コンピュータやネットワークの最新のトピックを理解し、情報社会の一員として自分から活用できる。

《テキスト》

- ・毎回の授業の最初に、講義で説明するプリントを配布します。
- ・実習の説明は、eラーニングのシステムや専用のWebサイトで公開します。

《参考文献》

- ・『キーワードで理解する最新情報リテラシー 第2版』日経BPソフトプレス編（日経BPソフトプレス）2008年
 - ・『基礎からわかる情報リテラシー』奥村晴彦（技術評論社）2007年
 - ・『情報リテラシー教科書 インターネット・Word・Excel・PowerPoint』矢野文彦監修（オーム社）2009年
- その他の文献や資料は、適宜紹介します。

《成績評価の方法》

- ・毎回の授業で実施する小テスト（30%）と課題などの提出物（70%）で評価します。
- ・欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の場合は単位を与えません。

《授業時間外学習》

- 予習について
 - ・次回の講義で説明するトピックについて説明用のスライドを公開しておくので読んでおくこと。
- 復習について
 - ・講義で説明したトピックについて、次回の授業で小テストを実施するので、内容を理解しておくこと。
 - ・実習では、テーマごとの最後の授業でまとめ課題を実施するので、操作・手順を練習しておくこと。

《備考》

「コンピュータ演習」での学習成果を基礎としていますが、パソコンやインターネットを自分の道具として使いこなすために、「習うより慣れる」ことを心掛けてください。とくに、キーボード操作が速くなることとソフトウェアやシステムの機能を予測しながら利用することに注意するようにすれば、より良く使いこなせるようになるでしょう。

他の受講生と協調しながら実習や課題に取り組み、積極的に授業に参加することを期待します。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション/eラーニングの利用
第 2 週	講義：コンピュータのしくみ、コンピュータの部品 / 実習：ファイルの操作
第 3 週	講義：OSのしくみ、さまざまなOS / 実習：文書作成(1)
第 4 週	講義：文字コード、フォント / 実習：文書作成(2)
第 5 週	講義：コンピュータの歴史、2進法 / 実習：文書作成(3)
第 6 週	講義：音声・画像・動画ファイル / 実習：文書作成(4)
第 7 週	講義：表計算ソフト、データベース / 実習：表計算(1)
第 8 週	講義：ネットワークのしくみ、ブロードバンド / 実習：表計算(2)
第 9 週	講義：Web ページ、Web サーバ / 実習：表計算(3)
第 10 週	講義：電子メール、迷惑メール / 実習：表計算(4)
第 11 週	講義：情報システム、身近なコンピュータ / 実習：表計算(5)
第 12 週	講義：ネットコミュニケーション、Wiki / 実習：プレゼンテーション(1)
第 13 週	講義：身体への影響、ユニバーサルデザイン / 実習：プレゼンテーション(2)
第 14 週	講義：知的財産権、メディアリテラシー / 実習：プレゼンテーション(3)
第 15 週	実習：プレゼンテーション(4) / 学習のふり返り

《専門基礎科目群》

科目名	基礎生物学				
担当者名	本多 久夫				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

概要の全体は下の<<授業計画>>に示す。ポイントとなることを幾つか挙げる。

- ◆身体の構造はとても複雑で多くの学生が学ぶのを敬遠する。しかし「身体全体は袋できていて、基本は袋である」ことを常に頭に入れておくと、身体の構造が明解に把握できるようになる。
- ◆身体は、袋はもちろん他のすべてのものも細胞と細胞が合成した物質からできている。細胞によってすべてが説明できるはずである。常に細胞を意識する思考を身につける。
- ◆細胞の性質や能力は遺伝子がきめている。現在は遺伝子の時代だと言われているが、遺伝子を過大評価でなく正当に評価するには、細胞の働きを知る必要がある。
- ◆筋肉や骨は、袋の細胞と性質が違う。これらの組織はリハビリやトレーニングなどで大きくなったり、小さくなったりする。
- ◆生物の一番の特徴は自分と似た子をつくること（自己増殖）である。ここに設計図（遺伝子の集まり）が働いているところが重要。自己増殖に先立ち、子をつくるための設計図が複製され、この設計図に基づいて子ができる。

《授業の到達目標》

健康システム学科の学生は健康に関わる何らかの仕事をするようになる。そこでは身体の仕組みや構造についての知識が必須である。専門的仕事のための知識は身体を構成している細胞から分子にまでひろがり、学習するのが大変である。しかし基礎生物学を学んで、ヒトは生物の一員であることを自覚しヒトについて学んだ知識を生物全体のなかで位置づけるとよい。別々の知識がお互いに関連し、学習がはかどり学んだ事柄の記憶が長持ちする。

《テキスト》

なし。

ノートをつくること。図表を主とした資料を項目毎に配布する。これを切り抜き貼りつけながら手書きのノートをつくること。

《参考文献》

『シートからの身体づくり』 本多久夫著(中公新書・中央公論社) この本は図書館にある。

『細胞の分子生物学』 アルバーツ他著(ニュートンプレス社)。

『パッテン発生学』 カールソン著[白井敏雄監訳](西村書店)。

《成績評価の方法》

ペーパーテスト(8/10)、レポート提出(2/10)。全回出席が原則。

《授業時間外学習》

授業中にうつつむいてノートばかりとらないこと。いつも話している者の顔を見て聴くように。ノートにはメモとして手早く、スペースを十分に空けながら書き、授業がおわってから、配布したプリントを切り抜きノートに貼り付け、補足を書き入れ自分のオリジナルのノートをつくること。

《備考》

授業には出てくること。この講義内容をまとめた手軽な教科書はない。

授業をおもしろく聴く方法は、授業に白紙の状態では出て来ないことである。かねがね疑問に思うこと、問いたいこと、自分の考えなどを用意して授業に臨むこと。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	I. 身体は閉じた袋からできている 身体の外と内の区別は徹底している
第 2 週	上皮シートの変形による器官の形成(消化管・神経管・眼) もう一つの上皮シート系(血管系)
第 3 週	2つのシート系の接近(肺・腎臓・肝臓)
第 4 週	II. 細胞(Cell)は途切れのない細胞膜で完全に包まれている
第 5 週	細胞分裂(自分と同じものをつくる) 細胞分化は遺伝子発現の変化による
第 6 週	シグナル伝達・リセプター・なだれ現象 細胞の動き、細胞死
第 7 週	III. 組織(Tissue)は細胞の集まりである 上皮組織-袋を構成する細胞から成る 結合組織-細胞外マトリックスをもつ組織
第 8 週	筋肉組織の働き
第 9 週	血管系の形成
第 10 週	IV. 細胞間の通信による調節および恒常性 内分泌系(ホルモン)
第 11 週	パラクライン系(サイトカイン) 制御(ポジティブフィードバック・ネガティブフィードバック)
第 12 週	V. 脳・神経系 神経繊維は細胞である
第 13 週	神経伝達、神経系ネットワーク
第 14 週	VI. 免疫系 病原体からの感染の防御 T細胞・B細胞(抗体を産生する)
第 15 週	自他の区別・未知の物に結合する仕組み

《専門基礎科目群》

科目名	解剖学				
担当者名	押本 剛				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

解剖学というと、人体各部の名称を覚えることになりがちであるが、人体の構造（解剖）と機能、さらに身近な疾病も関連付けて実践的な授業を行う。

《授業の到達目標》

基本的な人体の解剖を学び、将来の職業に役立てる。

《テキスト》

基礎からわかる解剖学：ナツメ社
竹田津 文俊 著

《参考文献》

ACLS トレーニングマニュアル：日本医師会
監修：日本救急医療財団、編著：心配蘇生法委員会

早わかり急変ノート：照林社
尾野敏明、菅原美樹、道又元裕編

使える機能解剖学：MC メディカ出版
井原秀俊編

看護技術のなぜ？ガイドブック（改訂・増補2版）：医学芸術社

まんが 医学の歴史：医学書院
茨木保

《成績評価の方法》

講義中に行う小テスト（40%）、レポート（20%）、体表解剖の実技試験（40%）等にて評価。
なお、出席点そのものは評価に含めないが、授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

テキストの指定箇所を読んでおくこと

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	解剖学総論
第 2 週	循環(p1-30)
第 3 週	心臓1(p31-56)
第 4 週	心臓2(p31-56)
第 5 週	呼吸器(p57-78)
第 6 週	消化器1(p79-108)
第 7 週	消化器2(p79-108)
第 8 週	肝臓・胆嚢・膵臓(p109-122)
第 9 週	泌尿器(p123-140)
第10週	内分泌(p140-158)
第11週	神経系1(p159-200)
第12週	神経系2(p159-200)
第13週	筋骨格1(p201-225)
第14週	筋骨格2(p201-225)
第15週	総括

《専門基礎科目群》

科目名	生理学				
担当者名	多田 章夫				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

生理学は、生命維持に必要な人体の仕組み、あるいは、身体運動を含む生命活動を維持している人体の基本的な機能を追及する学問領域である。これらの仕組みと機能について体系的な知識を習得するとともに、運動、呼吸、循環などの生命維持に不可欠な機能の統合的な制御を学習する。

《授業の到達目標》

- 1 神経興奮メカニズム、中枢神経による運動制御機構を説明できる
- 2 呼吸、循環、消化・吸収、体温調節、内分泌など生体のホメオスタシスの維持に必須の機能を説明できる

《テキスト》

「人体生理学ノート」松根幹朗、岡田隆史 金芳堂

《参考文献》

各単元毎に必要なに応じて紹介する。

《成績評価の方法》

- 1 定期試験 90%、レポート 10%の割合で評価する
- 2 30分以上の遅刻は欠席扱いとし、出席率の低い者（授業欠席回数が授業回数の30%以上の場合）は定期試験の受験資格を失う

《授業時間外学習》

- 1 次回の授業範囲を予習し概要を把握しておくこと
- 2 毎回授業後、ノートを整理し重要なポイントを理解すること
- 3 人体の生理現象を身近な問題として捉えるよう日頃から心がける

《備考》

講義中は、他人の迷惑にならないよう最低限のマナーを守ること。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	生命現象
第 2 週	細胞膜の興奮
第 3 週	骨格筋の収縮
第 4 週	神経の伝達
第 5 週	末梢神経
第 6 週	中枢神経
第 7 週	運動
第 8 週	血液
第 9 週	呼吸
第 10 週	心臓
第 11 週	循環
第 12 週	消化
第 13 週	代謝
第 14 週	体液
第 15 週	内分泌

《専門基礎科目群》

科目名	栄養学				
担当者名	須見 登志子				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・2期

《授業のねらい及び概要》

健康の保持増進に寄与できる。・望ましい食生活の内容を理解する。

《授業の到達目標》

栄養素の消化吸収や体内での機能を知り、健康を維持するための栄養について何をどれだけ摂取すればよいのか、栄養素と食品の関係を食生活を通して学ぶ。そして各年代（ライフステージ）の身体変化や社会環境に対応した栄養や食事のあり方について学び、また疾病時の食事療法についても理解する。

以上の如き内容で栄養学の基本的なことを習得する。

《テキスト》

『コンパクト栄養学』脊山洋右、廣野治子編集 「南江堂」 2010年

授業中にプリント配布することがありますが遅刻・欠席者への再配布を特には行いません。

《参考文献》

五訂増補食品成分表 文部科学省 科学技術・学術審議会資源調査分科会

日本人の食事摂取基準（2010年版） 厚生労働省策定 第一出版

その他必要に応じて紹介する。

《成績評価の方法》

出席率(20%)、レポート+小テスト+定期試験(80%)などにより評価する。ほかに受講態度による評価を加えることがあります。30分以上の遅刻は、欠席として扱う。遅刻3回で欠席1回として扱う。受験資格についてはキャンパスガイドによる。

《授業時間外学習》

授業の復習や予習しておく。広範囲にわたるし、専門用語が出てくるので、特に復習をして理解しておくこと。

必要に応じて参考文献について授業中に示すことがあるので、目を通しておくとよい。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	栄養とは : 概論
第 2 週	消化と吸収 : 人体の構造と機能
第 3 週	消化と吸収 : 食物摂取と消化吸収
第 4 週	栄養素とその代謝および機能について : 炭水化物,脂肪,たんぱく質
第 5 週	栄養素とその代謝および機能について : ビタミン,ミネラル, 食物繊維, 水分
第 6 週	日本人の食事摂取基準について
第 7 週	食生活と食事と食品
第 8 週	ライフステージと栄養 : 成長期 : 乳幼児
第 9 週	〃 成長期 : 学童・思春期
第 10 週	〃 成人期から更年期を含む高齢期
第 11 週	〃 成人期 : 妊娠授乳期
第 12 週	栄養状態の評価
第 13 週	治療食について
第 14 週	治療食の実際 ①消化器疾患
第 15 週	〃 ②生活習慣病

《専門基礎科目群》

科目名	食品学				
担当者名	島田 邦夫				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

学業や運動を行うのには何が必要か？そー！エネルギーが必要。私たちはエネルギーの源を食品に求めている。生命を維持し、活動していくためには、各種の食品から栄養素をバランスよく摂取することが必要である。本科目では食品に含まれる主要な成分の化学的性質と特徴について講述する。また、加工・貯蔵などによる変化および成分間の反応、食品の安全と衛生に関する問題などについての知識を身につけ、あわせて豊かな食品を育むための背景となる地球環境や社会について考え、さらに国際的な食料事情についても理解を深めることを目標とする。

《授業の到達目標》

食品の品質、安全性等の基本的な知識を総合的に理解する。
食品学の基礎知識、分析力、コミュニケーション能力を身につける

《テキスト》

『イラスト食品学総論』種村安子・江藤義春・道家晶子・仁王隆子・西岡茂子・尾藤宗弘・山田徳広 共著 (東京教学社)

《参考文献》

『カラーチャート 食品成分表 5訂増補』石井克枝 監修 (教育図書)
『原色食品図鑑 新訂』菅原竜幸・井上四郎 編著 (建帛社)

《成績評価の方法》

- ・受講態度、学習意欲 20% (小試験により評価)
- ・出席率 70%以上をクリアした者を成績評価の対象とする。
- ・定期試験 80%

《授業時間外学習》

- ・授業内容を再確認、不明な点は次回授業時に質問する。または自分で調べ、整理してまとめる。

《備考》

食品がもつ多様な性質を理解し、食生活をエンジョイしよう。積極的な受講態度を望む。質問大歓迎。
本科目履修上の留意点：化学的知識が必要であるため、生物学や化学(教養科目)、特に有機化学の基礎を良く学習しておくことが必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	「食品学」を学ぶ意義 (ガイダンス)、ヒトと食物史、食べることはヒトを含め動物の本能的な行為である。
第 2 週	食品とその働き：食品から食物へ (米は食品、ご飯は食物)、食品の成分、食品の働き 《プロジェクター使用》
第 3 週	食品の分類、食品成分表
第 4 週	A. 食品中の一般成分：1) 栄養成分；① 炭水化物の化学的性質と特徴、② 脂質の化学的性質と特徴
第 5 週	B. 食品中の一般成分：1) 栄養成分；③ タンパク質の化学的性質と特徴、④ ビタミンの化学的性質と特徴
第 6 週	C. 食品中の一般成分：1) 栄養成分；⑤ ミネラルの化学的性質と特徴
第 7 週	D. 食品中の一般成分：2) 嗜好成分；①色素成分の化学的性質と特徴、②香気成分の化学的性質と特徴
第 8 週	E. 食品中の一般成分：2) 嗜好成分；③呈味成分の化学的性質と特徴 F. 食品中の一般成分：3) 機能性成分；化学的性質と特徴
第 9 週	食品の理化学的特性：食品のテクスチャー (舌触り)、レオロジー 食品の美味しさを評価する方法：官能検査、その他
第 10 週	食品の貯蔵と加工：① 食品の変質とその要因、② 食品の貯蔵・加工法
第 11 週	食品の安全と衛生 I：① 自然毒食中毒 (動物・植物性)、② カビ毒、③ 細菌・ウイルス性食中毒、
第 12 週	食品の安全と衛生 II：④ 化学性食中毒、⑤ 寄生虫、⑥ 食品成分の理化学的変質と食障害 消費期限や賞味期限はどうして決めるの？
第 13 週	食品の関連法規：食品安全基本法、食品衛生法、製造物責任(PL)法、健康増進法、感染症法など
第 14 週	食品衛生行政：食品の安全はどのように保たれているのか？ 総合衛生管理製造過程 (HACCP) とは・・・？
第 15 週	食品の規格と表示、食生活と健康

《専門基礎科目群》

科目名	衛生学				
担当者名	島田 邦夫				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

衛生とは「生命」を「衛(まもる)」ことから健康をまもること、転じて健康の増進を意味する。19世紀の住環境の悪化などにより生まれた言葉、健康の神“ハイジーン”に基づいている。私達の健康のパロメータは、定期便となっている“うんち”である。“うんち”を見ればその人の健康状態がわかる。また日本人の中には、潔癖の人がいて、他人が座った洋便器にはペタンとお尻をつけて座れないという人がいる。そのために抗菌性物質を配合した素材や滅菌シートが使用されたりしている。水は生物にとって必要なもの、空気は当たり前で意識することがない。我々人にとっては重要である。車は人が移動する用具として便利である。化石燃料にかわるバイオ燃料。エコカーの出現。これら生活環境の変遷を科学的な観点から理解を深める。

《授業の到達目標》

- ①ゴミの分別排出の理由が理解でき、説明できる。
- ②酸性雨や地球温暖化現象、温室効果ガスなど諸問題を通じ、地球環境を考える力を養い、それらの防止対策を提言できる。
- ③大気汚染と花粉症、生活習慣病、大災害発生時における外傷後ストレス障害、感染症等を通じ健康保持増進対策を理解説明できる。

《テキスト》

『生活環境論 改訂第3版』、岩槻紀夫 編集 (南江堂)

《参考文献》

『衛生行政大要 改訂第22版』下田智久 編集 (日本公衆衛生協会)
『新簡明衛生公衆衛生』稲葉裕、野崎貞彦 著 (南山堂)

《成績評価の方法》

- ・受講態度、学習意欲 20% (小試験により評価)
- ・出席率 70%以上をクリアした者を成績評価の対象とする。
- ・定期試験 80%

《授業時間外学習》

- ・授業内容を再確認、不明な点は次回授業時に質問する。または自分で調べ、整理してまとめる。

《備考》

人は快適な生活を営む反面地球温暖化という地球を痛めつける行為をしてしまった。最近の大きな竜巻の発生とか局地型洪水など異常気象は、このあらわれではないかと考えられている。日々の出来事に目を向け、皆で私達が住む地球環境をよく考えましょう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション： 衛生学で何を学ぶの・・・？ 「生活と環境」、「飛散花粉と花粉症」
第 2 週	地球の環境： 生物の星地球、生物相の変遷、大気圏・水圏の環境 《プロジェクター使用》
第 3 週	生物と環境： 生態系、生態系の物質循環、生態系におけるエネルギーの流れ
第 4 週	生物と人間： “ダニと生活環境 (プロジェクター使用)”、生命の共通性、バイオテクノロジーの発展
第 5 週	公害と環境汚染： 産業の発達と公害・環境汚染、大気・水質汚染、化学物質による汚染
第 6 週	都市化の進展と環境： 環境の都市化、ゴミ・廃棄物とリサイクル、交通公害、近隣騒音
第 7 週	地球規模の環境問題： グローバル・ウォミング (地球温暖化)、オゾン層の破壊、酸性雨、森林の減少と砂漠化、地球環境の保全
第 8 週	資源開発と環境保全： 人口増加と食糧問題、エネルギー資源問題、種の絶滅と野生生物保護、持続可能な開発
第 9 週	快適環境と人間の生活： “住居環境とカビ (プロジェクター使用)”、快適な環境とは、地球環境問題と人間の生活、住環境と生活問題
第 10 週	環境保全のための法制度： 環境基本法、公害規制の諸法律と条例、環境影響評価法、リサイクルの法制度
第 11 週	技術と社会： 技術の役割、生産系と環境、人間と環境、テクノストレスとテクノ依存症、パソコンの視覚表示端末装置 (VDT) 作業の健康問題
第 12 週	疾病予防と健康管理： 生活習慣病、シックハウス (シックカー) 症候群、感染症予防法、検疫法、予防接種法、海外旅行と衛生
第 13 週	アスリートの衛生：運動性貧血、高山病と運動選手の高地トレーニング、エコノミークラス症候群、サーカディアン・リズムと時差ボケ、熱中症
第 14 週	社会と健康：学校保健と安全 (養護教諭と衛生教育、学校感染症)、産業保健 (働く人の健康)、精神保健 (精神現象と精神障害、トラウマ、児童虐待、モラルハラースメント、)
第 15 週	災害と健康：地震・津波・竜巻・洪水など自然災害と精神障害、感染症

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	体育原理				
担当者名	徳田 泰伸				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

体育原理という言葉は、Principle または Foundation に由来するものである。Principle には原理、原則。Foundation には、基礎、土台、根拠、出発点などの意味がある。体育原理は、体育はどのような原理・原則に基づいて考えられ、実践されなければならないか、正しい体育のあり方を学習する。

《授業の到達目標》

体育原理という講義を通じて体育（教育）の目標内容・方法の一貫性を原理として学んでいき、現代の健康スポーツに関する問題点を考察し説明ができる。

《テキスト》

資料配布および授業において紹介する。

《参考文献》

授業において適宜紹介する。

《成績評価の方法》

小テスト、授業内課題の提出、レポート課題
 小テスト（20%）、各分野の学習後に課すレポート課題（60%）、平常点（20%）
 授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

《授業時間外学習》

毎時間授業内容の復習と予習を必要とする。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション 15週の授業内容について説明する
第 2 週	身体の哲学的考察 身体の構造的把握 社会的身体
第 3 週	身体と体育 現代教育における身体的問題
第 4 週	体育の定義 体育という語の由来 体育とは身体活動の意義 体育の分野
第 5 週	体育の分野別課題 幼児期の体育 少年期の体育 青年期の体育 壮年期の体育 老年期の体育
第 6 週	体育の必要性（化学的原理の根拠） 社会学的側面 運動生活的側面（生物学的）
第 7 週	体育の成立 体育の成立事情 体育の成立事例 体育の成立の発展 体育の成立条件 体育の指導者 体育の可能と限界
第 8 週	体育の目標 発達の目標 生活的目標 民主的人間
第 9 週	学校体育の内容 学校における教育活動 学校体育の内容
第 10 週	体育の内容と学習活動 体育内容の編成（カリキュラム）
第 11 週	体育の方法 教育方法の原理 生理学的原理 トレーニングの生理学的原理 具体的トレーニング法
第 12 週	心理学的原理 社会的な原理 内容に即した方法原理 体育の実践形態
第 13 週	学習の指導段階
第 14 週	スポーツの大衆化 子供の運動遊び
第 15 週	学習のまとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	運動の基礎				
担当者名	樽本 つぐみ				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

運動とは、1つには「運動不足」や学校体育における「運動領域」といった、生物学的・教育学的目的を達成するために何かを反復的に行う身体活動のことである。2つには、学習指導要領に見られる「体づくり運動」「器械運動」「陸上競技」「球技」など体育における学習活動のある特定の領域やスポーツ種目が運動と表現されている。これら運動の役割について理解することを目標とします。本講義は、保健体育免許必修科目であり、健康運動実践指導者養成科目でもある。また2年生以上で履修するスポーツ関連科目の基礎的な内容であるため、しっかりと身に付けることが必要です。

《授業の到達目標》

運動を行うことにより、身体諸器官（心拍数や血圧など）がどのように変化するのか、慢性的に身体活動を行うと生体はどのように適応するのか、また運動と健康との係わりについて学びます。本講義で学んだことを自らの生活に振り返ることで、競技力（パフォーマンス）の向上や生活習慣病の改善ができるようになる。

《テキスト》

テキストは使用しません。必要に応じて資料を配付します。

《参考文献》

「運動生理学 20 講 第 2 版」勝田 茂（朝倉書店）
「トレーニング・メソッド」石井 直方（ベースボール・マガジン社）
「スポーツトレーニング理論」伊藤マモル（日本文芸社）

《成績評価の方法》

「評価の方法」・・・毎時間行う小テスト、中間テスト、定期試験
「評価の割合」・・・定期試験（50%）、中間テスト（30%）、小テスト（20%）
ただし、授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の時は評価対象外とします。

《授業時間外学習》

前回の授業内容について小テストを行うため、しっかりと復習しておくこと。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション
第 2 週	運動と骨格筋 (1)
第 3 週	運動と骨格筋 (2)
第 4 週	運動と呼吸循環
第 5 週	運動と栄養・水分補給
第 6 週	運動と骨の代謝
第 7 週	運動と発育・発達
第 8 週	トレーニング (1)
第 9 週	トレーニング (2)
第 10 週	スポーツ記録の向上と限界
第 11 週	オーバートレーニング
第 12 週	運動と寿命
第 13 週	加齢と運動
第 14 週	運動と生活習慣病
第 15 週	運動処方

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	子ども運動学				
担当者名	三宅 一郎				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

講義科目である為理論が中心になるが、子どもの理解を深める意味で附属幼稚園の子どもを観察をしたり子ども達と接する機会を持つ。

この授業を通して得た知識を、2年生Ⅰ期開講の子ども運動学演習に有効に活用されることを期待する。

《授業の到達目標》

幼児の運動遊び指導者(幼児体育指導者)並びに小学生児童の体育指導者としての能力を養うことを目標とする。その為に、子どもの発育発達特徴を理解し幼児期・児童期における運動の正しい実践方法の知識を身につける。様々な運動の考え方や実践方法を理解する事によって、幼児期・児童期に適した運動実践の在り方を学ぶ。さらに保育所・幼稚園での保育全般や小学校での学習内容を理解し、運動遊び・小学校体育の実践方法も併せて学ぶ。

《テキスト》

特になし。必要に応じて資料を配付する。

《参考文献》

「運動発達の科学」～幼児の運動発達を考える～三宅一郎（大阪教育図書）

「幼児の運動発達学」小林寛道(ミネルヴァ書房)

「幼児の有酸素性能力の発達」吉澤茂弘著(杏林書院)

“Motor Development and Movement Experiences for Young Children”DAVID L.GALLAHUE,John Wiley&Sons,ink

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。

ただし授業回数の1/3以上欠席した場合単位は与えない。

毎時間の授業のまとめ、感想、質問等をまとめたノート提出する（50%）

随時課題に対するレポート（30%）

学期末に理解度を確認するテスト（20%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

下記授業計画における次時の授業内容を参考文献等であらかじめ確認しておくことでより理解が深まる。

<復習方法>

学んだ内容を配付資料等により再確認にノートにまとめる。疑問点等があればノートの感想欄に記載すること（後日必ず返答する）。これらの活動を通して効果的な理解が得られると考える。

《備考》

幼児の運動遊び指導者(幼児体育指導者)および小学校体育指導者として必要な知識を身につけて欲しい。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション
第 2 週	からだの発育
第 3 週	体力の発達
第 4 週	運動機能の発達(その1)
第 5 週	運動機能の発達(その2)
第 6 週	心拍数からみた幼児・児童の運動生理学
第 7 週	呼吸循環機能の発達
第 8 週	動作の発達(その1)
第 9 週	動作の発達(その2)
第10週	体力測定・運動能力測定
第11週	運動指導の考え方
第12週	移動系運動の考え方と指導方法
第13週	操作系運動の考え方と指導方法
第14週	非移動系(平衡系)運動の考え方と指導方法
第15週	まとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	体育測定と評価				
担当者名	徳田 泰伸				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

文部科学省は、国民の体力・運動能力の現状を明らかにするとともに、体育・スポーツの指導と行政上の基礎資料を得ることを目的として、毎年「体力・運動能力調査」が行われている。そこで、新体力テストの測定方法を熟知し、測定を行う。またその他の測定法についても学び、それぞれの基準値と総合的に判断し、運動を処方できる正しいデータの測定および評価ができることを学びます。

《授業の到達目標》

体力には健康関連体力と競技能力関連の体力がある。体力を評価するには、単純に平均値を上回っているから健康である、また競技能力が高いとは限らない。個人の活動状況や危険因子の有無、既往歴など総合的に判断しなければならない。そのために現在の体力を正確に測定し、測定したデータを運動処方やトレーニング等に活用させるための基本的な評価方法を学ぶことができる。

《テキスト》

特に指定はしません。資料等は必要に応じて配付します。

《参考文献》

「運動処方の指針 第7版」南光堂、「健康運動実践指導者用テキスト」健康・体力づくり事業財団、「体力テストの方法と活用」財団法人日本体育協会

《成績評価の方法》

小テスト、授業内課題の提出物、レポート課題
 小テスト（20%）、各分野の学習後に課すレポート課題（60%）、平常点（20%）
 授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

《授業時間外学習》

授業で学んだ測定を実際に学外で実施してみる
 年齢差、性差を踏まえ取り組んでみる

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション 15週の授業内容について説明する
第 2 週	文部科学省の体力・運動能力調査について（握力・上体起こし）
第 3 週	文部科学省の体力・運動能力調査について（長座体前屈・反復横とび）
第 4 週	文部科学省の体力・運動能力調査について（立ち幅とび・ハンドボール投げ）
第 5 週	文部科学省の体力・運動能力調査について（50メートル走・20メートルシャトルラン又は持久走）
第 6 週	体組成について（1）
第 7 週	体組成について（2）
第 8 週	心肺機能について（1）
第 9 週	心肺機能について（2）
第10週	筋の適正について（1）
第11週	筋の適正について（2）
第12週	柔軟性について（1）
第13週	柔軟性について（2）
第14週	測定データの処理
第15週	学習のまとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	スポーツ実践I				
担当者名	三宅 一郎・徳田 泰伸・樽本 つぐみ				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

授業計画に示す内容のスポーツ種目や学校体育種目を実施する。方法として、個人・グループ毎に実施種目のルール確認と正しい実践方法の理解。実施種目は、個人・グループ毎に授業計画に示す全種目を経験する。各自がこの授業を通して体得したものが、II期開講のスポーツ実践IIに有効に活用されることを期待する。

随時体力測定を実施し自己の体力レベルを把握する機会を持ち、体力の維持増進に努めること。

さらに、学校施設内で実施不可能な種目（水泳等）については定期時間外に集中講義を実施する。

《授業の到達目標》

主として運動実践を通して体育指導者としての能力を養うことを目標とする。その為に、スポーツ・体育における様々な種目の正しい実践方法を身につける。具体的には、様々なスポーツのルールの理解及び審判方法を体得すると共に、学校体育における実施種目の実践を通して段階的な指導方法を学ぶ。また、スポーツ・運動実践時の障害や事故を未然に防ぐ為に、有効な準備運動や整理運動を知る。以上に示したスポーツ・体育指導者として必要と思われる内容を実施する。

《テキスト》

特になし。必要に応じて資料を配付する。

《参考文献》

『運動適応の科学～トレーニングの科学的アプローチ～』竹宮隆・石河利寛著（杏林書院）

『体力を考える～その定義・測定と応用～』宮下充正著（杏林書院）

『選手とコーチのトレーニングマニュアル』ブルーノ・ポーレット著

『中学校学習指導要領解説（体育編）』

『高等学校学習指導要領解説（体育編）』

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。

ただし授業回数の1/3以上欠席した場合単位は与えない。

毎時間の授業のまとめ、感想、質問等をまとめたノート提出する（50%）

随時課題に対するレポート（30%）

学期末に理解度を確認するテスト（20%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

下記授業計画における次時の授業内容を参考文献等であらかじめ確認しておくことでより理解が深まる。

<復習方法>

学んだ内容を配付資料等により再確認にノートにまとめる。疑問点等があればノートの感想欄に記載すること（後日必ず返答する）。これらの活動を通して効果的な理解が得られると考える。

《備考》

健康システム学科の学生として、スポーツ・学校体育の理論と実践を積極的に体得しよう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション
第 2 週	体づくり運動の考え方と実践（1）
第 3 週	体づくり運動の考え方と実践（2）
第 4 週	器械運動：マット運動における特性の理解と実践（1）
第 5 週	器械運動：マット運動における特性の理解と実践（2）
第 6 週	球技：バスケットボールにおける特性・ルールの理解と実践（1）
第 7 週	球技：バスケットボールにおける特性・ルールの理解と実践（2）
第 8 週	球技：バレーボールにおける特性・ルールの理解と実践（1）
第 9 週	球技：バレーボールにおける特性・ルールの理解と実践（2）
第10週	陸上競技：短距離における種目特性の理解と実践
第11週	陸上競技：リレーにおける種目特性の理解と実践
第12週	陸上競技：走り幅跳びにおける種目特性の理解と実践
第13週	格技：剣道における特性の理解と実践（1）
第14週	格技：剣道における特性の理解と実践（2）
第15週	まとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	スポーツ実践II				
担当者名	三宅 一郎・徳田 泰伸・樽本 つぐみ				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	1年・II期

《授業のねらい及び概要》

授業計画に示す内容のスポーツ種目や学校体育種目を実施する。方法として、個人・グループ毎に実施種目のルール確認と正しい実践方法の理解。実施種目は、個人・グループ毎に授業計画に示す全種目を経験する。各自がこの授業を通して体得したものが、次年度以降の授業に有効に活用されることを期待する。

随時体力測定を実施し自己の体力レベルを把握する機会を持ち、体力の維持増進に努めること。

さらに、学校施設内で実施不可能な種目（水泳等）については定期時間外に集中講義を実施する。

《授業の到達目標》

スポーツ実践Iと同様に主として運動実践を通して体育指導者としての能力を養うことを目標とする。その為に、スポーツ・体育における様々な種目の正しい実践方法を身につける。具体的には、様々なスポーツのルールの理解及び審判方法を体得すると共に、学校体育における実施種目の実戦を通して段階的な指導方法を学ぶ。また、スポーツ・運動実践時の障害や事故を未然に防ぐ為に、有効な準備運動や整理運動を知る。以上に示したスポーツ・体育指導者として必要と思われる内容を実施する。

《テキスト》

特になし。必要に応じて資料を配付する。

《参考文献》

『運動適応の科学～トレーニングの科学的アプローチ～』竹宮隆・石河利寛著(杏林書院)

『体力を考える～その定義・測定と応用～』宮下充正著(杏林書院)

『選手とコーチのトレーニングマニュアル』ブルーノ・ポーレット著

『中学校学習指導要領解説（体育編）』

『高等学校学習指導要領解説（体育編）』

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。

ただし授業回数の1/3以上欠席した場合単位は与えない。

毎時間の授業のまとめ、感想、質問等をまとめたノート提出する（50%）

随時課題に対するレポート（30%）

学期末に理解度を確認するテスト（20%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

下記授業計画における次時の授業内容を参考文献等であらかじめ確認しておくことでより理解が深まる。

<復習方法>

学んだ内容を配付資料等により再確認にノートにまとめる。疑問点等があればノートの感想欄に記載すること（後日必ず返答する）。これらの活動を通して効果的な理解が得られると考える。

《備考》

健康システム学科の学生として、スポーツ・学校体育の理論と実践を積極的に体得しよう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション
第 2 週	器械運動：跳び箱運動における特性の理解と実践（1）器械運動：跳び箱運動における特性の理解と実践（2）
第 3 週	器械運動：跳び箱運動における特性の理解と実践（2）
第 4 週	器械運動：鉄棒運動における特性の理解と実践（1）
第 5 週	器械運動：鉄棒運動における特性の理解と実践（2）
第 6 週	球技：バドミントンにおける特性・ルールの理解と実践（1）
第 7 週	球技：バドミントンにおける特性・ルールの理解と実践（2）
第 8 週	陸上競技：走り高跳びにおける種目特性の理解と実践
第 9 週	陸上競技：砲丸投げにおける種目特性の理解と実践
第 10 週	陸上競技：長距離走における種目特性の理解と実践
第 11 週	球技：サッカーにおける特性・ルールの理解と実践（1）
第 12 週	球技：サッカーにおける特性・ルールの理解と実践（2）
第 13 週	格技：柔道における特性の理解と実践（1）
第 14 週	格技：柔道における特性の理解と実践（2）
第 15 週	まとめ

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	養護概説Ⅰ				
担当者名	加藤 和代				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅰ期

《授業のねらい及び概要》

養護教諭の役割は、子どもたちの心とからだの健康課題が社会情勢の変遷とともに変化してきているように、その時代、時代で求められるものが変わってきました。この授業では「学校教育とは」を問いながら、これまで各自が児童生徒側からとらえてきた「養護教諭像」や「保健室のイメージ」を教師性と専門性の視点から再構築することをめざします。また日々の情報の中から、教育課題や児童生徒の健康に関する課題に関心を持ち、一人ひとりがその解決策を考えることで健康観、教育観、豊かな児童生徒観を育てることができるよう、グループワークを取り入れ授業理解を図ります。

《授業の到達目標》

- 学校教育の視点に立って、養護教諭の職務、保健室の機能について概観を説明することができる。
- 子どもを取り巻く健康課題に関心を持ち、実態把握や対応策を主体的に考えることができる。
- 授業を通して再構築した教師としての養護教諭像を具体的に表現できる。

《テキスト》

新養護概説第5版 采女智津江編集代表 少年写真新聞社

《参考文献》

「新版・養護教諭執務のてびき」第6版 植田誠治監修 石川県養護教育研究会編 東山書房
 「児童生徒の健康診断マニュアル」改訂版 財団法人日本学校保健会
 「養護教諭の専門性と保健室の機能を生かした保健室経営の進め方」財団法人日本学校保健会

《成績評価の方法》

授業参加態度（20%）、課題レポート（30%）、定期試験（50%）で総合的に評価する。
 授業欠席回数が授業実施回数 $\frac{1}{3}$ 以上の者は定期試験を受けることができません。

《授業時間外学習》

毎時間、授業のはじめに小テストを実施します。前回のポイントを整理して理解しておいてください。

《備考》

免許選択科目です。養護教諭免許の取得を目指す人の積極的受講を望みます。
 免許取得、教員採用試験への関心意欲を、互いに高めあってほしい。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	ガイダンス、講義の進め方、学習方法について
第2週	学校教育と学校保健、学校保健と養護教諭
第3週	養護教諭制度の変遷、養護教諭に関する法律等、養成教育
第4週	養護教諭の専門性、その職務
第5週	学校保健関係職員の役割とその職務内容
第6週	子どもの発育発達、子どもの現代的な健康課題とその対応
第7週	保健室の役割とその機能
第8週	保健管理（1） 健康実態の把握（健康診断）
第9週	保健管理（2） 健康実態の把握（健康観察、保健調査）
第10週	保健管理（3） 健康課題への支援（健康相談）
第11週	保健管理（4） 健康課題への支援（メンタルヘルス）
第12週	保健教育（1） 教科保健（保健学習）
第13週	保健教育（2） 保健指導
第14週	特別支援教育と養護教諭
第15週	組織活動及び家庭・地域社会との連携

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	養護概説Ⅱ				
担当者名	大平 曜子				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

養護概説Ⅰで学んだ内容をさらに発展させ、養護教諭の役割と活動に対する認識を深め、実践の学問としての位置づけを明確にします。授業では、養護教諭の職務遂行・展開の中で、研究すること、評価することの大切さを学ぶため、実践を交えながら体験的に学びます。また、保健室経営と組織活動について、専門性の基盤となる人間観や科学性を再確認しつつ、その役割を確認していきます。受講者は、養護教諭の仕事の全体像を明らかにするとともに、専門性についての意味と役割を明確にし、教育者としての養護教諭について理解を深めることができます。

《授業の到達目標》

- 養護教諭の役割と活動に対する理解を深め、自らの描く養護教諭像を表現できる。
- 課題研究に取り組み、その成果をプレゼンテーションすることができる。
- 科学的根拠を持って理解するようつとめ、レポートにまとめることができる。

《テキスト》

『新学校保健実務必携』（第一法規）
『新養護概説』 采女智津江編 少年写真新聞社

《参考文献》

「新版・養護教諭執務のてびき」 第6版 植田誠治監修 石川県養護教育研究会編 東山書房
その他、適宜紹介する

《成績評価の方法》

課題研究の発表（40%）、レポート課題（40%）、小テスト（20%）とし、100点満点で60点以上を合格とする。授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えないものとする。

《授業時間外学習》

現代の健康問題や教育問題の情報を得るため、新聞に目を通し、情報を整理する。
関連の図書にできるだけ目を通す。
プレゼンテーションの方法に関する文献にあたり、方法を事前に考える。
科学的なレポートの書き方について、文献等で学習し、レポート作成に利用する。

《備考》

養護教諭免許の取得を目指す人の積極的受講を望みます。グループワークでは、各人が積極的に参加し、ディスカッション等を通じて相互に学び合い、学習を深めてください。

《授業計画》

週	授 業 計 画	
第1週	オリエンテーション 授業の進め方について	
第2週	養護教諭の活動の展開（1） 課題	
第3週	養護教諭の活動の展開（2） 方法	
第4週	養護教諭の活動の展開（3） 展開	
第5週	養護教諭の活動の展開（4） 実践	
第6週	具体的テーマについての実践的研究について	確認のための小テスト第1回
第7週	具体的テーマについての実践的研究について	
第8週	養護教諭の職務（1）	保健組織活動
第9週	養護教諭の職務（2）	保健教育活動
第10週	養護教諭の職務（3）	環境管理
第11週	養護教諭の職務の評価について	確認のための小テスト第2回
第12週	具体的展開の評価活動	
第13週	研究のまとめ（抄録の作成）	
第14週	研究のまとめ（プレゼンテーション）	
第15週	授業のまとめ	

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	学校保健Ⅰ（小児保健・学校安全を含む）				
担当者名	山本 良穂				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

学校保健は、児童・生徒の生涯にわたる健康と安全の基礎を培う観点から、学校教育の基盤ともなる分野です。

この授業では学校における児童・生徒の心身の健康問題について考え、また、事例を通して、日々の健康生活を確かなものにしていくための方策や、具現化するための方法、管理項目や指導内容などの基礎知識を習得し、学校保健の中心的実践者である養護教諭や保健体育科教員に必要とされる指導者としてのリテラシーを育てることを目的とします。

《授業の到達目標》

- 1.学校保健の概要について理解できる。
- 2.教育基本法、学校教育法、学校保健安全法などの基本的法規に規定されている、学校及び教員の担っている児童生徒の健康に関する役割を理解できる。
- 3.保健学習と保健指導の内容について理解できる。
- 4.児童・生徒の問題行動（不登校・いじめ・飲酒・喫煙など）の要因を挙げて、対応を述べることができる。
- 5.最新の学校保健・安全に関する教育時事問題について理解を深めるよう、調べ学習ができる。

《テキスト》

教員養成系大学保健協議会編『学校保健ハンドブック』第5次改訂（ぎょうせい）

《参考文献》

- 『学校保健実務必携』（第一法規）
- 中村肇監修『子育て支援のための小児保健学』（日本小児医事出版社）
- 日本学校保健会編 各種マニュアル

《成績評価の方法》

《授業の到達目標》の1.2.3.4.については定期試験や小テストの成果で、5.は提出したレポート課題の内容で、4.は発表の内容でも評価をする。

評価の割合は、試験60%、レポート20%、発表20%とし、100点満点換算で60点以上を合格とする。

授業欠席回数が授業回数の3分の1以上欠席した者は単位は認定しない。

《授業時間外学習》

- ・ 次回の授業範囲を予習し、重要と思う箇所をチェックし、疑問点をまとめておくこと。
- ・ ノートや配布したプリント類は、分かりやすく整理しておくこと。
- ・ 授業中に紹介した関連図書は、できるだけ目を通しておくこと。
- ・ 参考文献やインターネット検索などにより、多くの関連資料にふれる機会をつくること。

《備考》

この授業は、養護教諭免許、保健体育科教員免許を取得し、将来教職をめざす人のために必要な科目であることを念頭に置き、自分が教壇に立ったときの対応を考えながら授業に参加してください。

内容は、主として「学校保健安全法」を柱に進めていくことになります。本来ならば実習や演習形式を多く取り入れた内容にすべきですが、学習内容の範囲の広さから考えると、速い速度で授業を進めることになります。

授業を欠席した人は、その時間の内容や連絡事項（宿題や次時の準備など）について、出席者から確認し、自分で学習と準備をしてください。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション・学校保健の概要（健康の考え方・学校保健の意義・目的）
第 2 週	学校保健の内容（学校保健の構成、学校保健と法規、学校保健関係職員と組織）
第 3 週	心身の発達と健康（小児の概念と保健統計、小児の特徴、小児期の区分）
第 4 週	心身の発達と健康（形態の発育と心の発達）
第 5 週	健康診断（健康診断の意義と位置付け、児童・生徒の健康診断の性格、定期健康診断の実施時期と検査項目）
第 6 週	学校で多く見られる疾病や異常と対策（学校保健統計上の健康問題、学校で多く見られる感染症）
第 7 週	精神の健康（児童・生徒の精神的健康に関わる問題の実態、精神的健康の維持と促進）
第 8 週	保健学習（保健学習の課題、保健学習の指導と評価）と保健指導（保健指導の機会、保健指導の特性）
第 9 週	学校安全（学校安全の意義と考え方、児童生徒の事故災害の現状）
第10週	安全管理（安全管理の目的と内容、事故災害発生時の措置）
第11週	安全教育（学校における安全教育の考え方、学校における安全教育の目標・内容）
第12週	学校環境衛生（学校環境の位置づけと考え方、学校環境衛生の重要性和課題）
第13週	喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育（健康への影響とその防止教育）
第14週	障害のある児童・生徒とその指導（特別支援教育の概念と健康上の支援）
第15週	学校保健の今後の課題（まとめ）

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	看護学概論				
担当者名	大平 曜子				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

看護の理念を確認しつつ、看護の概念、看護の対象、看護技術論、看護機能と役割、看護の歴史、看護過程等について学びます。養護教諭の専門性との関わりの中で看護の在り方を学びますが、続く「看護学Ⅰ～Ⅳ」及び「救急看護」の内容を意識しつつ、若干の看護技術に触れながら、実践に繋がる看護の基本を習得します。受講者は、看護学を通じて、幅広い人間理解と科学的思考力を養うことができ、健康生活に関する理解を深めることができます。授業では、看護における知識や技術の正確な理解は言うまでもありませんが、それ以上に、看護の「人間と健康に対するまなざし」を理解し、人間に対応する時の「こころ」と「態度」を養っていくことが求められます。

《授業の到達目標》

- 看護の概念を理解し、説明できる。
- 健康レベルからみた看護について説明ができる。
- 看護行為の基本を理解し、実践することができる。
- 看護過程を理解し、系統的・論理的に展開することができる。

《テキスト》

『最新看護学』中桐・天野・岡田 編著（東山書房）

《参考文献》

『養護教諭のための看護学』藤井寿美子、山口昭子、佐藤紀久榮編（大修館書店）
その他、適宜紹介する

《成績評価の方法》

課題レポート（20%）、演習の報告（20%）、定期試験（60%）とし、100点満点で60点以上を合格とする。
授業実施回数の3分の1以上欠席した者は最終試験の受験資格はない。

《授業時間外学習》

テキストに目を通し、重要な箇所にはマーカーを入れ、疑問点をまとめるなど、予習・復習をおこなう。
適宜紹介した文献にはできるだけ目を通しておく。
レポートは、文献を利用して科学的に論述できるよう、日常から、レポートの書き方を学んでおく。

《備考》

目的意識を持ち、向上心を持って、主体的に授業に臨んでいただきたい。
養護教諭を目指す受講者は、養護教諭のための看護学であることを意識し、学ぶ意味を考えて受講する。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション（授業の進め方、看護学の構成について）
第 2 週	看護と健康 1. 看護とは、 2. 健康とは
第 3 週	看護と健康 3. 看護の対象（疾病の成り立ちと回復）
第 4 週	看護と健康 4. 看護過程について 5. 看護職と養護教諭
第 5 週	看護の歴史 現在の看護学の背景
第 6 週	総合保健医療 1. 保健活動 2. プライマリヘルスケア 3. 継続看護
第 7 週	看護の基礎 養護教諭の職務と看護の機能、看護技術論、看護倫理と養護倫理
第 8 週	看護技術の基礎 コミュニケーション、観察、記録、安全・安楽
第 9 週	看護過程 1. 症例にみる看護過程について 2. 看護過程の構成要素
第 10 週	看護過程 3. アセスメント 4. 看護診断
第 11 週	看護過程 5. 看護計画の実際
第 12 週	看護の実践 1. 病気の経過に伴う看護
第 13 週	看護の実践 2. 治療処置に伴う看護
第 14 週	養護教諭にとっての看護 実践と課題について
第 15 週	学習のまとめ

《教職に関する科目》

科目名	教職概論				
担当者名	廣岡 義之				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

教職の歴史や意義とはどのようなものか、これからの教員に求められる資質・能力とは何か、教員の仕事とはどのようなものか、教員の身分保障と地位はどのようなものか、求められる教師の資質能力について、教育職員免許状の授与と取得の条件とはなにか、教師の研修、服務とはどのようなものか、等について解説し、その理解をねらいとする。

《授業の到達目標》

教員の資質向上が焦眉の課題である状況のなかで、教育実習をおこなう教職課程履修者は、その責任が以前にも増して重くなったことをよく認識して、教育実習に積極的に取り組むことが求められよう。その意味で本講義は将来、教職の道をめざす履修者にとって、教師になるための基礎的・基本的態度と知識を学ぶことを目指す。

《テキスト》

『新しい教職概論・教育原理』 広岡義之編著（関西学院大学出版会）2008年

《参考文献》

必要に応じて講義の際に適宜紹介する。

《成績評価の方法》

講義中の発表・態度 50%、講義中の小試験 50%。
授業欠席回数が授業実施回数の 1/3 以上の者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

教科書等の指定箇所を熟読し、内容を把握しておくこと。

《備考》

この講義は、将来教職に就きたい人、教員免許状を取得したい人、あるいは教育問題に強い関心を持つ人達のためにあるので、その人達の学習の妨げになる「私語」や「遅刻」はしないこと。また特に自ら進んで講義内容に関心を持ち、関連事項を積極的に勉強する姿勢が必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	本講義のオリエンテーション
第 2 週	教職の意義と歴史について
第 3 週	教職員組織について
第 4 週	教師の職務と学校の運営について
第 5 週	現場教師（小・中・高等学校）の実際について
第 6 週	大学における教職への動機づけ
第 7 週	教師の養成と免許について
第 8 週	教師の採用・研修・身分保障について
第 9 週	教育職員免許上の授与と取得の条件
第 10 週	求められる教師の資質能力について
第 11 週	生涯学習社会と「開かれた学校」への方向転換
第 12 週	「学ぶ力」の育成と教師の資質能力
第 13 週	教育荒廃と教師の役割
第 14 週	教師の悩みと不安
第 15 週	本講義のまとめと重要箇所の復習

《教職に関する科目》

科目名	教育原理				
担当者名	廣岡 義之				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

本講義では、人間形成の意義と課題を伝統的教育学と実存主義教育との対比を通して教育原理的側面から論じてゆきたい。そのうえで、多くの教育問題が発生する今日的課題として、様々な教育思想家の主張を援用しつつ、学校生活を含めた人間関係の深化、生きる意味を探究する援助者としての教師論などにも言及したい。また社会で求められる教育的課題という観点から、平和教育、高齢者教育、家庭教育、環境教育、言語教育等の領域について教育人間学的手法で論じてゆくことにする。

《授業の到達目標》

教育の基礎・基本である原理的内容の理解が、この授業の目標である。つまり、教育の概念や教育観を学ぶことを通じて、今日の学校教育の課題や問題について考え、分析することができるようにすることを目指す。

《テキスト》

- 『新しい教育学概論』 広岡 義之著（創言社）2007年

《参考文献》

必要があれば講義の際に紹介する。

《成績評価の方法》

講義中の発表・態度 50%、講義中の小試験 50%。
授業欠席回数が授業実施回数の 1/3 以上の者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

教科書等の指定箇所を熟読し、内容を把握しておくこと。

《備考》

この講義は、将来教職に就きたい人、教員免許状を取得したい人、あるいは教育問題に強い関心を持つ人達のためにあるので、その人達の学習の妨げになる「私語」や「遅刻」はしないこと。また特に自ら進んで講義内容に関心を持ち、関連事項を積極的に勉強する姿勢が必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	本講義のオリエンテーション
第 2 週	人間形成の意義と課題
第 3 週	伝統的な教育学と実存的教育学の関連性
第 4 週	ソクラテスにおける「助産術」の教育学的意義と課題
第 5 週	プラトンにおける「洞窟の譬喩」の教育学的意義と課題
第 6 週	ブーバーにおける「われーなんじ」論の教育学的意義と課題
第 7 週	フランクルの人間形成論の教育学的意義と課題
第 8 週	「人生の意味」を充足するための教育的意義と課題
第 9 週	実存的空虚の時代の教育的意義と課題
第 10 週	言語教育の教育学的意義と課題
第 11 週	家庭教育の教育学的意義と課題
第 12 週	高齢者教育の教育学的意義と課題
第 13 週	環境教育の教育学的意義と課題
第 14 週	平和教育の教育学的意義と課題
第 15 週	主体的な生き方・あり方教育の意義と課題

《教職に関する科目》

科目名	教育制度論				
担当者名	廣岡 義之				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

「テキスト」欄に挙げてある『教育の制度と歴史』の中から重要と思われる項目を中心に、考察を加えて行く。学校の歴史、教育制度の概念、現行の学校教育制度、学校制度（学校体系）の枠組み、学校教育の機能と性格、社会変化と学校教育などにみられる主要原理と課題を分析・検討する。

《授業の到達目標》

わが国の教育の将来的な改革・再編成の方向を本質的に理解するためには、教育制度の歴史的 position についての認識が必要となる。そこで受講生は、教育制度を鳥瞰することにより、なに故必然的に現代のこうした日本の教育形態や制度が形成されるに至ったのかについて主体的に考えることができるようになる。

《テキスト》

1. 『教育の制度と歴史』 広岡 義之編著 (ミネルヴァ書房) 2007年
2. 『教育用語集』(仮題) 広岡 義之編著 (ミネルヴァ書房) 2010年

《参考文献》

必要があれば講義の際に紹介する。

《成績評価の方法》

講義中の発表・態度 50%、講義中の小試験 50%。
授業欠席回数が授業実施回数の 1/3 以上の者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

教科書等の指定箇所を熟読し、内容を把握しておくこと。

《備考》

この講義は、将来教職に就きたい人、教員免許状を取得したい人、あるいは教育問題に強い関心を持つ人達のためであるので、その人達の学習の妨げになる「私語」や「遅刻」はしないこと。また特に自ら進んで講義内容に関心を持ち、関連事項を積極的に勉強する姿勢が必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	本講義のオリエンテーション
第 2 週	西洋古代・中世の教育制度と教育の歴史
第 3 週	ルネサンス・宗教改革の教育制度と教育の歴史
第 4 週	17・18 世紀の教育制度と教育の歴史
第 5 週	西洋近代公教育制度の発達
第 6 週	19・20 世紀の教育制度と教育の歴史
第 7 週	西洋「新教育運動」の展開と現代教育制度の動向
第 8 週	日本古代・中世の教育制度と教育の歴史
第 9 週	日本近世・近代の教育制度と教育の歴史
第 10 週	国民教育の確立
第 11 週	日本近代教育制度の拡充と教育運動
第 12 週	戦時体制下の教育制度と教育
第 13 週	戦後日本の教育改革および教育制度改革
第 14 週	現代日本教育制度と教育行政
第 15 週	現代日本の教育改革

《教職に関する科目》

科目名	教育相談（カウンセリングを含む。）				
担当者名	琴浦 志津				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらいおよび概要》

学校教育の重大問題として、学力低下とこころの教育をめぐる問題があげられる。これらの背景には、現代を生きる子どもたちのこころの発達ゆがみがあると考えられるが、これらに対して、教師はどのようなことができるだろうか？

人と人との関係を考えていくうえでのヒントは、悩むひとたちと治療者との関係の中で見出された事例の積み重ねによって理論化された、臨床心理学の理論の中に多くあるといっても過言ではない。そこでこの授業では、教師が子どもたちと関係性を構築していくためのスキルとして、カウンセリングの基礎を体験しながら学ぶことをめざす。そして後半は各年代の子どもたちの事例を取り上げるが、各自が子どもたちの問題について自分なりの対処法を見出していけるよう、自分の耳で聴き、感じたことを大切にしていける方法についても学んでほしい。

《授業の到達目標》

1. カウンセリングの基礎を学び、ひとの話を集中して聴くことができるようになること。
2. 自分自身のこころに焦点をあてて、そこに耳を傾けられるようになること。
3. 近年の学校現場での様々な問題に、自分なりの視点をもてるようになること。

《テキスト》

必要な資料は、適宜配布する。

《参考文献》

1. 「スクールカウンセラーがすすめる 112 冊の本」 滝口俊子・田中慶江編 創元社（1400 円＋税）
2. 「特別支援教育のための 100 冊」 特別教育支援プロジェクトチーム 創元社（1800 円）

《成績評価の方法》

授業への取組み 30% レポート 20% 授業内容の理解 50%

《授業時間外学習》

こころについて学ぶための本のリスト（上記の参考文献にとりあげられている 112 冊＋100 冊）を配布する。半期の間にできるだけ多くの本を手にとり読んでいただきたい。そしてこの中から自分の興味のある本を一冊えらんで、手書きで原稿用紙又はレポート用紙 5 枚の感想文を提出してください。

《備考》

《授業計画》

週	授業計画
第1週	オリエンテーション：教育相談とは何か
第2週	カウンセリングの基礎理論
第3週	聴くということ
第4週	自分でできるカウンセリング
第5週	カウンセリング実習①
第6週	カウンセリング実習②
第7週	前半のまとめ
第8週	学校現場で出会う子どもたちの発達の問題①
第9週	学校現場で出会う子どもたちの発達の問題②
第10週	事例研究：乳幼児の事例
第11週	事例研究：小学生の事例
第12週	事例研究：中学・高校生の事例
第13週	家庭との連携のあり方
第14週	地域機関との連携のあり方
第15週	今後に生かす教育相談

平成 21 年度 (2009 年度) 入学者

卒業要件単位数

科目区分		卒業必要単位	内必修単位と科目数	
基礎・教養科目		30 単位	10 単位	5 科目
専門教育科目	専門基礎科目群	8 単位	8 単位	4 科目
	I 群（運動・体育に関連する科目）	6 単位	—	—
	II 群（養護・保健に関連する科目）	6 単位	—	—
	卒業研究	6 単位	6 単位	2 科目
その他上記の科目区分のいずれかから		68 単位	—	—
合 計		124 単位	24 単位	11 科目

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成21年度(2009年度)入学者対象
()は兼任、[]は兼任講師

授業科目区分	授業科目の名称	授業方法	単位数		運動実践指導者	教員免許関係			学年配当(数字は週当たり授業時間)								平成22年度の担当者														
			必修	選択		養護	保健体育	保健	1年		2年		3年		4年																
									I	II	I	II	I	II	I	II															
専門	基礎ゼミⅠ	演習	2						2																						
	基礎ゼミⅡ	演習	2							2																					
	健康科学序論	講義	2								2																				
	健康科学	講義	2		◇							2																			多田 章夫
	情報科学	講義	2								2																				
	基礎生物学	講義	2								2																				
	解剖学	講義	2		◇	○			□	2																					
	生理学	講義	2			○		△	□	2																					
	微生物学	講義	2			○			□				2																	[島田 邦夫]	
	生化学(分子生物学を含む)	講義	2									2																			不開講
	分子生物学演習	演習	2										2																		不開講
	栄養学	講義	2				○			□	2																				
	食品学	講義	2				○				2																				
	栄養指導論	講義	2										2																		福本 恭子
	衛生学	講義	2				○		△	□	2																				[島田 邦夫]
	公衆衛生学	講義	2						△	□			2																		[島田 邦夫]
	医学概論	講義	2				○								2																
	ライフステージと健康	講義	2													2															
	心理学研究法	講義	2										2																		(琴浦 志津)
	心理測定法	演習	2										2																		(北島 律之)
	心理学基礎実験	実験	2																	4											
	心理学応用実験	実験	2																		4										
	認知心理学	講義	2										2																		(北島 律之)
	健康心理学	講義	2			◇							2																		大平 曜子
	臨床健康心理学演習	演習	2											2																	[古賀 愛人]
	生涯発達心理学	講義	2																	2											
	臨床心理学(含カウンセリング)	講義	2																		2										
	教育心理学	講義	2				○		△	□						2															大平 曜子
発達心理学	講義	2							▲	■					2															山田 佳代子	
ストレス科学論	講義	2																		2											
人間関係論	講義	2																			2										
教育特論Ⅰ	講義	2																				2									
教育特論Ⅱ	講義	2																					2								
教育特論Ⅲ	講義	2																						2							

- ◇は健康運動実践指導者養成科目
- は養護教諭免許必修科目、●は養護教諭免許選択科目
- △は保健体育免許必修科目、▲は保健体育免許選択科目
- は保健免許必修科目、■は保健免許選択科目
- ※ 「スポーツ実践Ⅰ」、「スポーツ実践Ⅱ」、「健康・体力づくり実践Ⅰ」、「健康・体力づくり実践Ⅱ」、「専門施設実習」は、定期授業の他に学外実習を行う。
- ※ 「レクリエーション(野外活動を含む)」は、4時間のうち3時間を学外実習にあてる。
- ※ 健康運動実践指導者養成講座科目として、表中の科目以外に集中講義として「運動障害と予防」と「救急処置」を2年「運動の基礎」の中で「発育・発達と老化」を履修する。
- ※ 認定心理士養成科目として、表中の科目以外に3年Ⅱ期に「行動分析論」と「社会心理学」を履修する。

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成21年度（2009年度）入学者対象

（ ）は兼任、[]は兼任講師

授業科目の区分	授業科目の名称	授業方法	単位数		運動実践指導者	教員免許関係			学年配当(数字は週当り授業時間)								平成22年度の担当者	
			必修	選択		養護	保健体育	保健	1年		2年		3年		4年			
									I	II	I	II	I	II	I	II		
教職に関する科目	教職概論	講義		2		○	△	□	2									
	教育原理	講義		2		○	△	□	2									
	教育史	講義		2		●	▲	■						2				
	教育制度論	講義		2		○	△	□		2								
	教育課程論	講義		2		○	△	□			2							廣岡 義之
	保健・保健体育科教育法Ⅰ（保健教育内容研究）	講義		2				△	□		2							[荒木 勉]
	保健・保健体育科教育法Ⅱ（保健教育法研究）	講義		2				△	□			2						
	保健科教育法Ⅰ（保健科教育教材研究）	講義		2					□			2						[荒木 勉]
	保健科教育法Ⅱ（保健科教育法演習）	講義		2					□				2					
	保健体育科教育法Ⅰ（保健体育科教育研究）	講義		2					△			2						[後藤 幸弘]
	保健体育科教育法Ⅱ（保健体育科教育法研究）	講義		2					△				2					
	道徳教育論	講義		2		○	△	□			2							廣岡 義之
	特別活動論	講義		2		○	△	□				2						[上寺 常和]
	教育方法・技術論	講義		2		○	△	□				2						(平井 尊士)
	教育方法論	講義		2		●							2					
	生徒指導論（進路指導を含む）	講義		2		○	△	□			2							廣岡 義之
	教育相談（カウンセリングを含む）	講義		2		○	△	□		2								
	総合演習	演習		2		○	△	□					2					
中学校教育実習（事前事後指導を含む）	実習		5												5			
高等学校教育実習（事前事後指導を含む）	実習		3												3			
養護実習（事前事後指導を含む）	実習		5		○										5			

◇は健康運動実践指導者養成科目

○は養護教諭免許必修科目、●は養護教諭免許選択科目

△は保健体育免許必修科目、▲は保健体育免許選択科目

□は保健免許必修科目、■は保健免許選択科目

※ 教職に関する科目を修得しても、卒業要件単位には含まれない。

※ 教育職員免許状を取得するためには、上記科目のほか、教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目として、日本国憲法（2単位）、体育（2単位）、外国語コミュニケーション（2単位）、情報機器の操作（2単位）について、指定の科目を修得すること。

《専門基礎科目群》

科目名	健康科学				
担当者名	多田 章夫				
授業方法	講義	単位・必選	2・必	開講年次・開講期	2年・1期

《授業のねらい及び概要》

健康、病気、体力の概念を明らかにし、疾病構造の変化とその理由について学ぶ。生活習慣病の定義やその発症に関わる危険因子を理解し、その予防に有効な栄養や運動のあり方を学ぶ。特に運動療法を実施するに当たり、医学的診断の意義や重要性、検査項目やその基準値について知る。さらに、高齢化社会の現状を理解し、健康管理の重要性や健康の維持・増進の方策を学修する。そして健康教育の必要性も知る。

《授業の到達目標》

健康の維持・増進の意義や方策を説明できる。
 運動・栄養・休養の必要性について説明できる。
 各年代（発育発達、老化）に対応した健康づくりの考え方を類別できる。

《テキスト》

未定。決まり次第、連絡します。

《参考文献》

- 『大学生のための健康科学』 西山逸成著（医歯薬出版（株））
- 『健康増進のための運動ガイド』 小林修平著（第一出版（株））
- 『健康科学の視点に立った生活習慣病の一次予防』 細谷憲政監修・川久保清他著（第一出版（株））
- 『健康・栄養管理学』 辻悦子編著（化学同人（株））
- 『健康づくりのための運動基準 2006』『健康づくりのための運動指針 2006』

《成績評価の方法》

定期試験の結果を中心とし、レポート、必要に応じて行う小テスト、出席状況や平常時の受講態度等を総合的に評価する（定期試験 80%、レポート・小試験 20%を原則）。授業欠席回数が授業実施回数の 1/3 以上のときは、試験の受験資格を失う。遅刻 2 回は欠席 1 回とする。定期試験の出題範囲は知らせるが、小テスト等の予告はしない。

《授業時間外学習》

講義に関連した資料を配布しますので、各自で予習をしておくこと。レポート課題を出しますので、その課題を完成させること。

《備考》

講義には出席して聴講することこそ、理解につながる。予習はもちろん、その日のうちの復習も必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	[健康の概念] 健康とは何か、定義や判定、健康阻害要因、健康の要因について言及する。
第 2 週	[健康の現状] 各種の資料から、国民の健康状態や疾病の現状につき学び、諸外国と比較しながら問題点を考える。
第 3 週	[健康の維持と増進] 我々の健康を維持・増進するための方策（栄養・運動・休養）を知る。
第 4 週	[健康づくりのための施策] 日本人の食事摂取基準、健康づくりのための運動基準、健康づくりのための食生活指針・運動指針・休養指針・睡眠指針、食事バランスガイド・エクササイズガイドについて学ぶ。
第 5 週	[健康づくりに果たす運動の役割] 年齢・対象別身体活動指針を基に各ライフステージにおける運動（身体活動）の意義や役割を学ぶ。
第 6 週	[幼児期・少年期の健康づくり] 発育・発達の著しい乳児期から少年期における身体機能の変化と健康づくりの方策を考える。
第 7 週	[青年期の健康づくり] 第 2 次性徴の発現など特に自我の確立を特徴とする青年期における健康づくりの方策を考える。飲酒や喫煙、薬物中毒の問題点も学ぶ。
第 8 週	[女性（母性）と健康] 女性の特徴である母性の理解と健康とのかかわりを考える。
第 9 週	[成人の健康づくり] 成人期における健康づくりの方策を考える。
第 10 週	[高齢者の健康づくり] 老化の意味を学び、老年期・高齢者における健康づくりの方策を考える。骨粗しょう症についても学ぶ。
第 11 週	[生活習慣病とは] 生活習慣病の定義やその発症に関わる危険因子を理解する。
第 12 週	[生活習慣病と栄養のかかわり] 生活習慣病予防のための栄養素摂取や食生活のあり方を学ぶ。
第 13 週	[生活習慣病と運動のかかわり] 生活習慣病予防のための運動のあり方を学ぶ。さらに運動療法の実施にあたって必要な医学的検査の内容につき詳述する。
第 14 週	[健康施策と健康教育] 平成 12 年から実施されている「健康日本 21」の策定の目的・目標を理解し、兵庫県での「健康ひょうご 21」の取り組みを学ぶ。さらに、健康教育の重要性を学ぶ。
第 15 週	[まとめ] テスト

《専門基礎科目群》

科目名	微生物学				
担当者名	島田 邦夫				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

勉学やスポーツに勤しみ、レクリエーションを楽しむためには、「健康」でないといけない。「健康」は生命の根源といえる。衛生的で安全だと思われていた日本で、はしかやノロウイルス感染症が流行し、「新型インフルエンザ」や「結核」など感染症の脅威に曝されている。「安全神話」は感染症に対する油断を生み、私達は病原体の格好の餌食になっている。病原体のまきかえしに備え、病原体を知り、私達ヒトは、いかにそのような目に見えない小さな生き物、微生物から身を守ったらよいのか？地球温暖化により日本になんか感染症が北上中・・・！また、性行為により新たな病原体が性感染症として登場している。一時の快楽が取り返しのつかない事態になりかねない。本科目により病原微生物が疾病とヒトとどのように関わっているか理解する。

《授業の到達目標》

- ①微生物の分類と種類を理解説明できる。
- ②環境と微生物の関わりを説明できる。
- ③主要な病原微生物によって引き起こされる感染症の病態と特徴を理解説明できる。
- ④主な感染症の予防対策を提言できる。
- ⑤法律（感染症予防法、学校保健安全法、検疫法、予防接種法）に基づく感染症を理解できる。

《テキスト》

「コンパクトシリーズ『コンパクト微生物学 改訂第3版』、小熊恵二、堀田博 編集 （南江堂）

《参考文献》

『Koneman's Color Atlas and Textbook of Diagnostic Microbiology, 6th Ed.』 W. Winn, Jr., S. Allen, W. Janda, E. Koneman, G. Procop, P. Schreckenberger, G. Woods （Lippincott Williams & Wilkins, N.Y.）

《成績評価の方法》

- ・受講態度、学習意欲 20%（小試験により評価）
- ・出席率 70%以上をクリアした者を成績評価の対象とする。
- ・定期試験 80%

《授業時間外学習》

- ・授業内容を再確認、不明な点は次回授業時に質問する。または自分で調べ、整理してまとめる。

《備考》

微生物学を通じ、自分の健康管理に関する知識と器量を身につけるように心がける。話題になる感染症について、日頃から関心を高めておく。わからないところは、納得のいくまで質問するように心がける「聞くは一時の恥、聞かざるは一生の恥」。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション：「微生物」とは・・・？「微生物学」で何を学ぶのか？
第 2 週	微生物学の歴史、微生物の分類 《プロジェクター使用》
第 3 週	細菌Ⅰ： 形態と分類、培養・増殖、変異と遺伝
第 4 週	細菌Ⅱ： 感染と発症、感染と免疫
第 5 週	細菌Ⅲ： 主要な細菌の性状と病原性、診断、治療
第 6 週	ウイルスⅠ： 形態・構造と分類、増殖と培養、遺伝と変異
第 7 週	ウイルスⅡ： 主要なウイルスの感染と病原性、診断と治療
第 8 週	真菌（カビ、酵母）Ⅰ： 形態と増殖、分類、主要な真菌の病原性
第 9 週	真菌（カビ、酵母）Ⅱ： 検査法、治療と予防、疾患
第 10 週	原虫と寄生虫Ⅰ： 原虫の特徴・分類
第 11 週	原虫と寄生虫Ⅱ： 主要な原虫症・寄生虫症
第 12 週	滅菌と消毒： 滅菌法、消毒法
第 13 週	感染症の予防と対策： 感染症法、ワクチン、予防対策（バイオハザード対策を含む）
第 14 週	臓器感染症Ⅰ： 皮膚、呼吸器、消化器
第 15 週	臓器感染症Ⅱ： 泌尿生殖器、神経、血液・リンパおよび全身感染症、その他の感染症

《専門基礎科目群》

科目名	栄養指導論				
担当者名	福本 恭子				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

健康づくりをすすめる上で基本的な栄養指導の知識と実践方法を解説する。

《授業の到達目標》

- ・ 自分自身の食生活を見直し、自己管理能力を高める。
- ・ 栄養指導の基本的知識と実践方法を理解する。

《テキスト》

なし。必要に応じて資料等を配布する。

《参考文献》

『日本人の食事摂取基準<2010年版>』第一出版
 『「食事バランスガイド」を活用した栄養教育・食育実践マニュアル』日本栄養士会 吉池信男（第一出版）
 『イラスト栄養教育・栄養指導論』東京教学社
 その他、必要に応じて授業中に紹介する。

《成績評価の方法》

授業態度 30%、確認小テスト 30%、レポート 40%の割合で評価する。

《授業時間外学習》

配布する資料を整理し、理解しておくこと。

《備考》

学生の意欲的・積極的姿勢を期待する。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	栄養指導の目的と必要性
第 2 週	食生活の変遷①
第 3 週	食生活の変遷②
第 4 週	栄養指導の基礎知識①（栄養素について）
第 5 週	栄養指導の基礎知識②（食品について）
第 6 週	栄養指導の基礎知識③（食事摂取基準）
第 7 週	栄養指導の基礎知識④（食事バランスガイド）
第 8 週	栄養指導の基礎知識⑤（食生活指針、健康日本 21）
第 9 週	栄養指導の方法①（情報の収集）
第 10 週	栄養指導の方法②（ライフステージ別）
第 11 週	栄養指導の方法③（病院、福祉、学校）
第 12 週	栄養指導マネジメント①
第 13 週	栄養指導マネジメント②
第 14 週	栄養指導マネジメント③
第 15 週	まとめ

《専門基礎科目群》

科目名	公衆衛生学				
担当者名	島田 邦夫				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

「長生きしたい」、「病気になるたくない」ということは誰しもが願っていること、健康は我々人間にとって第一の財産である。人口の都市集中、公害の発生、花粉症、生活習慣病や精神障害の増加、新型インフルエンザの流行など、個人の健康を脅かす様々な問題が発生している。これらは、個人の手や少数の手では、とても解決できない。全ての人がお互いにお互いの健康を守る立場に立って最善を尽くす努力が必要である。これが公衆衛生である。地球温暖化は人類の暴走の結果であり、人類滅亡への警鐘でもある。かけがえのない我々が住む青い惑星地球環境を考え、人類の営みを考える。あなたに忍び寄り超微小テロリストたち、集団の健康状況を認識しつつ、健康を守る原理と制度を総合的に理解する。

《授業の到達目標》

- ① 社会保障の理念とそこで求められる様々な使命・倫理を基礎知識として集積、考える力をつける。
- ② 生活習慣病や感染症への予防・対応に対する取り組みを理解・説明できる。
- ③ 食品保健と栄養、学校保健・安全管理の内容など、近年特に重要な問題を整理把握できる。
- ④ 健康増進（ヘルス・プロモーション）に対応した法制度および地域保健活動の内容を理解・説明できる。

《テキスト》

『わかりやすい公衆衛生学』（第3版）、清水忠彦、佐藤 拓代 編集（ヌーヴェルヒロカワ出版、東京）

《参考文献》

『衛生行政大要 改訂第22版』下田智久 編集（日本公衆衛生協会）

《成績評価の方法》

- ・ 受講態度、学習意欲 20%（小試験により評価）
- ・ 出席率 70%以上をクリアした者を成績評価の対象とする。
- ・ 定期試験 80%

《授業時間外学習》

- ・ 授業内容を再確認、不明な点は次回授業時に質問する。または自分で調べ、整理してまとめる。

《備考》

「人間社会」を取り扱うため、非常に広範囲の知識が要求される。チリやハイチ、阪神・淡路大震災、佐用町の洪水など災害時にみられる人間模様を考える。電気や水道、ガスなどライフ・ラインが途絶えたらどうする・・・？公衆衛生の重要性が認識できるはずである。関連事項の新聞の切り抜きなどをファイル・整理する習慣を身につけるよう心がける。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	プロローグ： 「公衆衛生学」で何を学ぶの？ 公衆衛生の概念、発展史
第 2 週	「公衆衛生学」をよりよく理解するために・・・！地球環境を考える 《プロジェクター使用》
第 3 週	健康と環境、疫学的方法
第 4 週	健康の指標
第 5 週	感染症とその予防
第 6 週	食品保健と栄養
第 7 週	生活環境の保全
第 8 週	医療の制度：医療保険、老人保健法、介護保険など
第 9 週	地域保健活動（ヘルスサービスの構造）
第 10 週	母子保健
第 11 週	学校保健
第 12 週	生活習慣病・難病
第 13 週	健康教育とヘルスプロモーション
第 14 週	精神保健福祉
第 15 週	産業保健：これからの公衆衛生：エピローグ、まとめ

《専門基礎科目群》

科目名	心理学研究法				
担当者名	琴浦 志津				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

心理学の研究方法は、データ収集の型によって、実験・調査・実践に分類される。中でも現場で役立つ「実践型研究」は臨床心理学の分野で多く用いられている研究方法である。ここでは、その中の「質的研究」と「事例研究」の方法について学び、最終的には自分に身近な題材から「ひとのこころ」について考え、学ぶ力をつけてほしい。

《授業の到達目標》

「こころ」を理解するための題材は、「心理学の教科書」にあるわけではなく、私たちの身近なところに数多く存在する。「心理学的視点」を身につけ、自分という素材ををとおして、発見し、感じたことが、まとめられるようになることを目標とする。したがって前半の授業は講義形式、後半は各自の決めたテーマについての発表（グループ発表でも可）と、発表者以外の学生は発表についての 要点のまとめと感想を毎回提出する。

《テキスト》

テキストは使用しない。前半の授業で必要な資料・題材は配布するので、各自で毎回ファイリングしておくこと。

《参考文献》**《成績評価の方法》**

授業への取り組み 30% 発表 20% 毎回提出するレポート 50%

《授業時間外学習》

各自のテーマを決めるための時間は、授業時間内にも設けたい。そして、テーマにそった題材探しや、発表の準備などは授業時間外に各自（またはグループで）必要である。第1週の授業以降、すぐに題材探しを始めてほしい。

《備考》**《授業計画》**

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション 「こころの研究とは」
第 2 週	こころの研究の基礎・・・観察－記述
第 3 週	こころを実践的に研究するとは？
第 4 週	こころの研究の主な方法①・・・質的研究の方法とは
第 5 週	こころの研究の主な方法②・・・事例研究とは
第 6 週	事例研究の方法を学ぶ
第 7 週	テーマを決める
第 8 週	テーマに取り組む
第 9 週	発表
第 10 週	発表
第 11 週	発表
第 12 週	発表
第 13 週	発表
第 14 週	発表
第 15 週	全体を通してのレポートを作成する

《専門基礎科目群》

科目名	心理測定法				
担当者名	北島 律之				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

心理学は科学的な性質を強くもっており、新たな知見を見出すためには、仮説を構築し実際に検証することが重要です。そのためには体系的なデータの取得方法や解析方法を心得ていなければなりません。本科目では、科学的に「ものをいう」ための基本的な作法について勉強します。テキストに従い、「研究に対する考え方の基礎」「実験法」「測定法」「分析法」などについて順序だてて説明するとともに、別途配布するプリントにて内容を整理し、基本事項の理解が促されるようにします。また、受講生自身が計算問題やコンピュータを用いた統計解析にも挑み、最後は自らが計画した簡単な実験を行って分析を試みます。

《授業の到達目標》

- 心理学の研究について、どのような方法論があるか類別できる。
- 研究における手順や留意点を説明することができる。
- 結果の解析に基本的な統計手法を用いることができる。

《テキスト》

『心理学の研究法 実験法・測定法・統計法【改訂版】 加藤司 北樹出版

《参考文献》

『心理測定法への招待』 市川伸一編著 サイエンス社
 『はじめての心理統計法』 鶴沼秀行・長谷川桐 東京図書

《成績評価の方法》

ペーパーテスト 80% レポート・小テストなど 10% 受講態度 10%

《授業時間外学習》

・予習の方法

下の授業計画はテキストに準拠しています。該当する箇所を前もって読んでおくようにしてください。この段階では必ずしも内容を理解できている必要はありません。こういったテーマを学ぶか、前もって意識することが大切です。

・復習の方法

授業中に整理するプリントの内容を中心に復習してください。まずは用語の意味を理解し覚えてください。次に具体的な手法などを順を追って振り返ってください。

《備考》

- ・本科目は、「心理学基礎実験」を受講するために前もって修得しておくことが必要です。
- ・心理学が科学的な性質を強くもつため、研究で得られた数値を解析する必要があります。特に授業の後半では、比較的容易ではありませんが、実際に計算を行ったりコンピュータを用いたりします。そのあたりを十分心得て受講してください。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	「心理学における研究の基礎①」 科学的な心理学の成立までを概観
第 2 週	「心理学における研究の基礎②」 基本用語や心理学を支える幾つかの考え方
第 3 週	「実験法①」 独立変数や従属変数を考慮した実験計画
第 4 週	「実験法②」 実験結果を歪める剰余変数
第 5 週	「さまざまな研究法」 実験法以外の研究法：観察法、質問紙法
第 6 週	「心理学的測定法①」 刺激と心の関係を数量的にとらえる精神物理学
第 7 週	「心理学的測定法②」 被験者の意見や態度などを調べる評定法、性格などを調べる検査法
第 8 週	「データ分析の基礎①」 測定尺度、記述統計の基礎
第 9 週	「データ分析の基礎②」 推測統計の基礎
第 10 週	「変数間の差の検定①」 t 検定の説明と練習
第 11 週	「変数間の差の検定②」 「変数間の関係」 分散分析および相関
第 12 週	「フリーソフトウェア JavaScript・STAR の利用」 分散分析、相関係数の算出など、コンピュータによる実習
第 13 週	「学生による簡単な実験①」 研究計画
第 14 週	「学生による簡単な実験②」 実験と分析
第 15 週	実験の発表、授業の振り返り

《専門基礎科目群》

科目名	認知心理学				
担当者名	北島 律之				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・1期

《授業のねらい及び概要》

認知心理学は心理学の中で人間の知的機能全般についての基盤となる部分を担います。情報の入力(感覚)、最低限の意味の成立(知覚)、情報の処理(狭義の認知)をテーマとし、人の心の基礎過程について実験とモデルを両輪として理解します。それにより、人間の様々な心理・社会的な活動をより深く考察できるようになります。「感覚」では、視覚の特性について生理的なデータも交えて解説します。「知覚」では、対象の体制化や錯視現象などについてデモを行いながら解説します。そして「認知」では、記憶や問題解決など多くのトピックスについて、映像教材などを用いながら解説します。別途配布するプリント「認知心理学講義ノート」はテキストの役割をもつとともに、受講者が内容を整理するため活用できます。

《授業の到達目標》

- 「認知心理学」の心理学における位置づけを説明できる。
- 感覚、知覚、認知の各過程を理解し類別することができる。
- 実験やモデルといった科学的な視点で心をとらえることができる。
- 心理的または社会的事象のいくつかについて、認知心理学の知識を基に主体的に考えることができる。

《テキスト》

プリント(認知心理学講義ノート)を配布

《参考文献》

「知性と感性の心理 認知心理学入門」 行場次郎, 箱田裕治(編) 福村出版
 「グラフィック 認知心理学」 森敏昭・井上毅・松井孝雄 サイエンス社

《成績評価の方法》

ペーパーテスト 80% レポート・小テストなど 10% 受講態度 10%

《授業時間外学習》

- ・予習の方法
特に予習は必要としない。
- ・復習の方法
復習には力を入れてください。授業中に整理するプリントの内容を中心に復習してください。まず、各用語の意味を理解し覚えてください。次に、図や表、様々なデータを参照しつつ、実験やモデルが示すことを理解するように努めてください。

《備考》

本科目は、「心理学基礎実験」を受講するために前もって修得しておく必要があります。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	「認知心理学って何？」 認知心理学の概要を説明。
第 2 週	「眼からの情報は脳へどう伝わるかⅠ(視覚の基礎過程)」 網膜の役割。光信号から電気信号への変換。
第 3 週	「眼からの情報は脳へどう伝わるかⅡ(エッジと形)」 エッジの強調から形を知るまでの流れ。
第 4 週	「感覚の黄金法則(感覚についての3つの法則)」 ウェーバーの法則、フェヒナーの法則、スティーブンスのべき法則。
第 5 週	「おかしいのは世界か？自分か？(体制化と錯視)」 錯視のデモやその見えの仕組み。いくつかの対象がまとまって見える性質。
第 6 週	「わたしたちの世界(三次元知覚)」 三次元に世界を知覚するために必要な要素。大きさの恒常性。
第 7 週	「見えていても見えていない(注意)」 網膜に投影されることと「見える」こととの違い。注意の空間的および時間的性質。
第 8 週	「自分が自分であるために(記憶)」 記憶の分類。短期記憶から長期記憶へのシフト。ワーキングメモリ。
第 9 週	「いつも言葉で考える(言語)」 言葉と脳。文の理解にかかわる処理。
第 10 週	「人に会うとはじめに見るところ(顔の認知)」 顔を認識する能力。人種と顔。感情と顔。
第 11 週	「一難去ってまた一難(問題解決)」 洞察と情報処理による問題解決。
第 12 週	「使いやすいのはどんなもの(デザインとアフォーダンス)」 情報デザイン。感性デザイン。エコロジカル(生態学的)デザイン。
第 13 週	「どっちを選ぶ？(意思決定)」 期待効用。ヒューリスティックス。
第 14 週	「認知心理学の現代的トピックス」 進化心理学的アプローチ、計算論的アプローチなど。
第 15 週	「これまで何を学んだか(まとめ)」 実験とモデルによる心の理解。

《専門基礎科目群》

科目名	健康心理学				
担当者名	大平 曜子				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・1期

《授業のねらい及び概要》

健康心理学は人間の健康を主として習慣に着目して科学的にとらえようとする学問です。その学問領域は広く、人間の生きるという目標に関わる全てが対象になります。取り上げるテーマも健康に関するものであればあらゆることが該当します。心理学としては異色の「身体的な健康」と「精神的な健康」とを根元的な結びつきの中で捉えようとしていることと、障害や疾病の状態ではなく健康を中心とした課題としているところに特徴があると言えるでしょう。授業では、心理的要因がいかに関身健康に影響を及ぼすかを学び、自他の健康へのアプローチに関する理解を深め、運動指導や生活習慣の改善・行動変容への実践的活動に結びつく態度・能力の育成などを目指します。受講者は、健康に関する心理学的理論や知識を理解した上で、健康への認知行動的アプローチに基づいた理論と実際を学んでいきます。

講座では生活習慣病などをテーマとして、グループワークも取り入れながら授業理解を図ります。

《授業の到達目標》

- 健康心理学の領域を理解し、説明できる。
- 健康心理学の基礎となる心理学の概念を理解し、代表的な理論について説明できる
- 健康習慣や健康行動について理解した、その指導ができる。
- 健康なパーソナリティについて、考えを述べることができる

《テキスト》

野口京子著『新版 健康心理学』金子書房

《参考文献》

島井哲志編『現代心理学シリーズ 健康心理学』培風館
他、授業の中で、適宜紹介

《成績評価の方法》

レポート課題（20%）、課題研究の発表（20%）定期試験（60%）とし、100点満点で60点以上を合格とする。授業実施回数の3分の1以上欠席した者は最終試験の受験資格はない。

《授業時間外学習》

健康生活を实践し、健康習慣について考える。
テキストを通読し、健康心理学の領域を理解する。
課題のレポート作成には、必ず文献に目を通す。
難しいところは復習より克服し、次週の授業に臨む。

《備考》

グループワークでは自主的、意欲的な参加を望みます。レポート等の提出期限を過ぎたものは基本的に評価しません。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション 健康心理学の歴史と他学問領域との関係
第 2 週	健康心理学の基礎理論（1） 精神分析、学習理論、行動理論、
第 3 週	健康心理学の基礎理論（2） 発達理論、認知理論、人間主義理論、
第 4 週	健康行動の理解 健康行動とは 予防と治療とリハビリ
第 5 週	パーソナリティと健康行動 健康なパーソナリティ
第 6 週	パーソナリティと健康行動 疾病とパーソナリティ
第 7 週	生活習慣と健康 健康な生活習慣 生活習慣病の予防と健康行動
第 8 週	健康への認知行動的アプローチ(1) 認知の行動の関わり、認知行動療法、
第 9 週	健康への認知行動的アプローチ(2) 社会的要因と個人的要因 健康関連行動について
第10週	ヘルスケアシステム 健康心理アセスメント
第11週	健康におけるソーシャルサポートの働き ソーシャルサポートの測定
第12週	健康心理カウンセリング 基礎理論 理性感情行動療法、交流分析、自律訓練法、
第13週	健康教育活動 禁煙、薬物防止、食行動の変容などについて
第14週	行動変容や習慣改善への試み（集団力学・グループダイナミクス、個人指導）
第15週	授業のまとめ

《専門基礎科目群》

科目名	臨床健康心理学演習				
担当者名	古賀 愛人				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

カウンセリング、心理療法、医療面接、就職試験面接等の対人面接場面においては、面接の種類、内容、立場等の違いに関わらず、いかなる面接においても必要とされる基本的面接技法がある。本科目では、基本的面接技法の基礎を学び、将来の生活における面接場面や対人関係に役立つ手法の獲得を目指す。

前半では、様々な心理療法やカウンセリングに共通して必要とされる基本的面接技法をプログラム形式のテキストを使って演習形式で学習し、後半では、VTR、ロールプレイ等により、面接の実際を学習する。

《授業の到達目標》

- 面接技法における基本的技法とは何かを説明できる。
- 面接場面において守るべき基本的重要な事項が説明できる。
- 基本的面接技法を獲得し、実践できる。
- これらの基本的技方を面接等の対人場面において実践できる。

《テキスト》

プリントを授業中に配布する。

《参考文献》

授業にて随時紹介する。

《成績評価の方法》

演習形式にて授業をおこなうため、事業中の意見発表等の授業への参加度（20%）、3課題のレポート（30%）、筆記試験（50%）による総合評価。

《授業時間外学習》

プログラム形式のテキストを用いるため、事前に予習し、問題を解いておくことが重要である。

《備考》**《授業計画》**

週	授 業 計 画
第 1 週	基本的面接技法とは（1）
第 2 週	基本的面接技法とは（2）
第 3 週	基本的関わり行動（1）
第 4 週	基本的関わり行動（2）
第 5 週	効果的質問（1）
第 6 週	効果的質問（3）
第 7 週	感情の反映（1）
第 8 週	感情の反映（2）
第 9 週	意味の反映
第 10 週	面接において必要な重要事項（1）
第 11 週	面接において必要な重要事項（2）
第 12 週	面接実習（1）
第 13 週	面接実習（2）
第 14 週	面接自習（3）
第 15 週	まとめと補足

《専門基礎科目群》

科目名	教育心理学				
担当者名	大平 曜子				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

教育心理学は一般心理学の応用部門であり、また教育科学の一分野です。教育が生きた人間を扱う実践的な営みであることから、教育心理学も対象である子どもたちの人間形成に関わる科学として、独自の理論と方法を提示しなければなりません。受講者には、子どもの立場と教師の立場を考えながら、しかし、教室だけでなく、社会で応用できる教育心理学を理解し、人間科学的視点を養っていただきたい。

授業では、広範な領域の中から「発達」と「学習」に重点を置き、パーソナリティと適応、測定と評価や学級集団、教師の心理なども含めて、教育実践に役立つ心理学とは何かを考えていきます。また、事例により実感を持って理解するとともに、教育者としての立場や役割、教育の楽しさに気づくこともねらいの一つです。

《授業の到達目標》

- 教育に関する心理学的事実や法則を説明できる。
- 教育心理学を自らの学習や教職希望者としての態度の形成に役立てる。
- 教育効果の検証ができる。

《テキスト》

配布プリントを使用する

《参考文献》

「絶対役立つ教育心理学」藤田哲也編著 ミネルヴァ書房
その他、適宜紹介する

《成績評価の方法》

課題レポートの提出（40%）、定期試験（60%）とし、100点満点で、60点以上を合格とする。
授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者は最終試験の受験資格はない。

《授業時間外学習》

プリントに基づいて授業内容を振り返り、ノートの整理や専門用語の確認をおこなう。
課題レポートは、適宜紹介する参考文献等を活用して作成する。

《備考》

目的意識を持ち、主体的に授業に臨むこと。プリントやノートに書き込みをし、自分のノートをつくること。
受講者は、毎時間の終了時に「本時の振り返り」を記入し、学習内容を明確にします。
教師を目指す者は、ふさわしい授業態度と取り組みの姿勢を期待します。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション（授業の進め方について、教育心理学を学ぶ意味について）
第 2 週	教育心理学の課題（教育心理学の定義、心理学との関係、教育心理学の意義と役割、方法について）
第 3 週	発達の基礎理論（1）発達原理 発達の学説
第 4 週	発達の基礎理論（2）発達の様相 成熟と発達 発達課題
第 5 週	学習の基礎理論（1）学習成立の過程と学習理論
第 6 週	学習の基礎理論（2）学習の方法 学習成立の過程
第 7 週	学習の基礎理論（3）記憶と学習 動機とやる気
第 8 週	授業理論と最適化（1）授業理論（2）授業の最適化
第 9 週	知能とは、学力とは、何か
第 10 週	測定と評価（1）評価の意義と役割（2）学力評価、知能測定
第 11 週	測定と評価（3）評価の実際
第 12 週	パーソナリティ理論、適応障害
第 13 週	集団の機能と構造、人間関係、集団による学習指導
第 14 週	教師の役割
第 15 週	学習のまとめ

《専門基礎科目群》

科目名	発達心理学				
担当者名	山田 佳代子				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

発達とは、人間が受精してから死に至るまでの変化過程のことである。ただし、その変化は、例えば、赤ちゃんが歩けるようになったなどのような進歩的発達だけではなく、退化的発達もある。これは、壮年期以降は、心身の発達は少しずつ衰えていく傾向を示すが、自己の専門性は向上していく。このように、発達心理学は、一生涯の変化を取り扱う。本講義では、各発達段階の基本的事項を押さえ、関心をもてるように最近の話題を取り入れながら、発達心理学の概要をできるだけ分かりやすく説明していく。

《授業の到達目標》

発達心理学の基礎的知識の習得を目指す。そして、発達の各段階を独立してみていくのではなく、発達という枠組みの中で、関連性を見出していくことを目標にする。

《テキスト》

発達心理学 山本利和編 培風館

《参考文献》

適宜、指示する。

《成績評価の方法》

試験(90%)と平常点(出席点など)(10%)で評価する。

《授業時間外学習》

配付プリントがある時には、ファイルなどして整理し、管理すること。次回の予習のために、指定した範囲で教科書を読んでおくこと。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	発達心理学とは？ 発達心理学の概要の説明□
第 2 週	発達の意味を考える
第 3 週	発達の理論 代表的な理論の説明など
第 4 週	胎児期から誕生まで 胎児期の発達などについて
第 5 週	乳児期 新生児期も含め、心身の発達などについて
第 6 週	幼児期前期 幼児期前期(3歳くらいまで)の発達について
第 7 週	幼児期後期 幼児期後期(6歳くらいまで)の発達について
第 8 週	学童期 身体・知的・社会性の発達などについて
第 9 週	種々の発達検査 発達検査の概要について
第 10 週	青年期① 青年期の発達についての概要について
第 11 週	青年期② アイデンティティ、青年期における発達課題について
第 12 週	成人期 成人の認知能力・人格発達・家庭・労働などについて
第 13 週	中年期・老年期① 生理的能力の変化・知的能力の変化・パーソナリティの変化などについて
第 14 週	中年期・老年期② 生理的能力の変化・知的能力の変化・パーソナリティの変化などについて
第 15 週	まとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	運動生理学				
担当者名	木下 幸文				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

本講義では、日常活動における身体運動が人体機能にどのような応答をするのか、また継続して身体活動を行った場合にはどのような適応を示すのかについて、その生理学的な機序を学習する。

講義で学習する主な点は、

- (1) 運動と健康との関係について
- (2) 人が運動する場合の生理・生化学的機構について
- (3) 運動による人体機能の応答・適応について
- (4) 運動処方 of 意義と方法等について

であり、これらについて詳細に講述する。

さらに、運動に関する生理学的な知識に加え、人が動かなければならないことと生命現象の因果関係について理解を深める。

《授業の到達目標》

現在の高齢化社会において、生活習慣病の予防をはかる健康増進対策は社会的にも学問的にも大きく望まれるところである。生活習慣病はいずれも食事や運動との関連が強く、生活習慣の改善により予防することが可能である。近年の疫学的研究でも、「運動不足」自体が心血管死や総死亡率の独立危険因子であることが示されており、習慣的な運動の持つ医学的意義も極めて大きいものと考えられている。しかし、疾病の発症に身体運動が深く関与していることが明らかにされているが、我が国における人々の身体活動量は次第に低下しつつある。健康の維持・増進には栄養・運動・休養が不可欠な要因であり、相互的な関係を考慮した健康づくりに対する実践・指導が強く望まれている。この講義は、身体活動にともなう人体の生理機能の変化や機序についての知識を身につけ、運動することにおいて大切な基礎的知識を理解できる。

《テキスト》

『現代栄養科学シリーズ 18 運動生理学』池上晴夫著（朝倉書店）2003年

《参考文献》

- 「新運動生理学（上巻）」宮村実晴編（真興交易（株）医書出版部）2001年
- 「新運動生理学（下巻）」宮村実晴編（真興交易（株）医書出版部）2001年
- 「身体活動と不活動の健康影響」郡司篤晃、川久保清、鈴木洋児編（第一出版）1998年
- 「運動生理学」 Astrand, PO and Rodahl, K.（大修館書店）1990年

《成績評価の方法》

定期試験の結果（80%）を中心とし、毎講義ごとに行う確認テストと平常点（20%）を参考にして評価する。ただし講義の出席率が3分の2以下の者は単位を取得する事が出来ません。

《授業時間外学習》

テキストの指定箇所を事前に読んでおくこと。また、毎講義ごとに前回講義の復習を兼ねて確認テストをしますので、各自で学習しておくこと。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	現代社会での健康の維持・増進における運動の位置づけ
第 2 週	健康と運動（健康と体力、運動の効果）
第 3 週	運動適応のメカニズム（1）エネルギー発生の仕組み
第 4 週	運動適応のメカニズム（2）有酸素能力と無酸素性作業閾値
第 5 週	運動適応のメカニズム（3）運動と呼吸
第 6 週	運動適応のメカニズム（4）運動と循環
第 7 週	運動適応のメカニズム（5）運動と筋・骨格系
第 8 週	運動適応のメカニズム（6）運動と神経系
第 9 週	運動適応のメカニズム（7）運動と自律神経・内分泌系
第 10 週	運動適応のメカニズム（8）運動と体温調節
第 11 週	運動適応のメカニズム（9）運動と環境
第 12 週	運動適応のメカニズム（10）運動と発育発達
第 13 週	運動適応のメカニズム（11）運動強度・量の表し方
第 14 週	健康のための運動処方
第 15 週	まとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	運動生理学演習				
担当者名	木下 幸文				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

身体運動時の生理反応の基礎と本質を演習を通じて学習していくとともに、運動中の生理現象を詳細に記録や観察し、測定時に得られたデータを解析することによって身体の生理学的な適応反応の意義を理解できるようにする。

主なテーマとして、

- (1) 呼吸循環機能に及ぼす身体活動の影響
- (2) 筋力・筋持久力に及ぼす身体活動の影響
- (3) 運動負荷試験の実際と解釈
について、評価していく。

《授業の到達目標》

運動生理学演習では、運動生理学の講義で学んだ知識の再確認を行うとともに、運動生理学の研究に用いられる基礎的な測定方法を習得するとともに、演習を通じて、身体活動時にみられる人体機能の複雑で巧妙な適応機能を説明できる。

《テキスト》

テキストは指定しない。演習では、必要に応じてプリントを配布する。

《参考文献》

「スポーツ選手と指導者のための体力・運動能力測定法」西園秀嗣著（大修館書店）2004年
 「改訂最大酸素摂取量の科学」山地啓司著（杏林書院）2001年
 「運動処方方の指針-運動負荷試験と運動プログラム-」アメリカスポーツ医学会編（南江堂）2001年
 「トレーニング科学ハンドブック」トレーニング科学研究会編（朝倉書店）1996年
 その他、適宜紹介していく。

《成績評価の方法》

演習中のレポート課題（60%）と平常点（40%）により評価する。ただし、演習への出席率が全体の90%以下の場合は、単位を取得することはできません。

《授業時間外学習》

演習で得られた記録を整理しながら、レポート作成のための資料を収集しておくこと。また、参考図書などを参考に生理機能の仕組みについて理解しておくこと。

《備考》

身体活動を評価するための実験を行いますので、演習にふさわしい服装で参加すること。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション（演習の進め方と評価方法について）
第 2 週	心肺運動負荷試験(1) 有酸素性作業能力の測定方法について
第 3 週	心肺運動負荷試験(2) 間接法と直説法について
第 4 週	運動中の呼吸循環機能の評価 換気亢進のメカニズム
第 5 週	運動中の呼吸循環機能の評価 心拍数の変化
第 6 週	運動中の呼吸循環機能の評価 血圧調節について
第 7 週	運動中の呼吸循環機能の評価 酸素負債と酸素借 1
第 8 週	運動中の呼吸循環機能の評価 酸素負債と酸素借 2
第 9 週	運動中の体温調節機構について 運動と熱放散反応
第 10 週	無酸素性作業域値の測定 血液中の乳酸濃度と換気量の変化
第 11 週	運動時の筋活動機能の評価 筋電図の測定 1
第 12 週	運動時の筋活動機能の評価 筋電図の測定 2
第 13 週	運動時の体温調節機構の評価 1
第 14 週	運動時の体温調節機構の評価 2
第 15 週	総括

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	運動栄養学				
担当者名	木下 幸文				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

高齢化社会の発展とともに生活習慣病が増加している。この高齢化社会をいかに健康で生き抜くかという方策を探ることが重要である。厚生労働省は21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）の中で、健康増進と生活習慣病の一次予防のために栄養・食生活の改善とならび、身体活動・運動の増加を目標に掲げている。我々の健康を維持・増進させるためには、栄養・運動・休養の三要素が必要で、特に栄養は毎日の生活の基礎である食事や食生活のあり方につながるだけに重要であり、健康やスポーツに携わる者にとり基本的な栄養知識は必須である。そこで、健康と栄養や運動の関わりを中心に、栄養学の基礎と運動時のエネルギーや栄養素摂取のあり方と問題点につき述べる。

《授業の到達目標》

健康を考える上で、栄養と運動は車の両輪のようなものである。生活習慣病の数々は、運動と栄養のバランスの乱れに起因している。また、スポーツを行うにあたり、パフォーマンスを高めるための土台となる栄養素の働きについて理解できるようになることが重要である。本講義を通じて、栄養学の基本的な内容を説明でき、運動・身体活動時のエネルギーや栄養素摂取のあり方についての基礎的な知識を説明できる。

《テキスト》

「スポーツと健康の栄養学」（第2版）下村吉治著（NAP）2006年
また必要に応じて関連した資料も配付する。

《参考文献》

「実践的スポーツ栄養学」鈴木正成著（文光堂）2006年
「身体運動・栄養・健康の生命科学Q&A 栄養と運動」伏木亨他著（杏林書院）2001年
「栄養学各論」廣田才之・辻悦子他著（共立出版）2000年
「スポーツ指導者のためのスポーツ栄養学」小林修平監訳（南江堂）1995年

《成績評価の方法》

定期試験の結果（80%）を中心とし、毎講義ごとに行う確認テストと平常点（20%）を参考にして評価する。ただし講義の出席率が3分の2以下の者は単位を取得する事が出来ません。

《授業時間外学習》

テキストの指定箇所を事前に読んでおくとともに、「栄養学」で学んだ内容について理解しておくこと。また、毎講義ごとに前回講義の復習を兼ねて確認テストをしますので、各自で学習しておくこと。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	健康の概念と栄養 運動との関わり
第2週	栄養学の基礎(1) 炭水化物・脂質・蛋白質の働き
第3週	栄養学の基礎(2) ビタミン・無機質の働き
第4週	栄養学の基礎(3) エネルギー産出と筋運動時のエネルギー
第5週	栄養学の基礎(4) 生活活動とエネルギー消費
第6週	運動時の栄養補給(1) 糖質の代謝（スタミナと炭水化物ローディング）
第7週	運動時の栄養補給(2) 脂質の代謝
第8週	運動時の栄養補給(3) 蛋白質の代謝
第9週	運動時の栄養補給(4) ビタミン・無機質の代謝
第10週	運動と栄養素の消化・吸収
第11週	活性酸素と運動・栄養 抗酸化剤（サプリメント）の効果
第12週	トレーニング期と試合期の食事
第13週	栄養・食事アセスメント（1）栄養状態の判定と評価
第14週	栄養・食事アセスメント（2）その方法と実際
第15週	日本人の食事摂取基準（栄養所要量）と栄養素摂取量の現状

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	子ども運動学演習				
担当者名	三宅 一郎				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・1期

《授業のねらい及び概要》

演習科目である為理論と実践を結びつけながら進める。幼児の理解を深め実践能力をより高める意味で附属加古川幼稚園の子どもを観察をしたり幼児と接する機会を持つ。

今までの学校体育で経験した内容やスポーツ実践での考え方の枠を外してより柔軟的に運動を捕らえ、幅広く運動遊びや学校体育指導に役立つ内容を実施する。

《授業の到達目標》

幼児の運動遊び指導者(幼児体育指導者)並びに小学生児童の体育指導者としての能力を養うことを目標とする。その為に、子どもの発育発達特徴を理解し幼児期・児童期における運動の正しい実践方法の知識を身につける。様々な運動の考え方や実践方法を理解する事によって、幼児期・児童期に適した運動実践の在り方を学ぶ。さらに保育所・幼稚園での保育全般や小学校での学習内容を理解し、運動遊び・小学校体育の実践方法も併せて学ぶ。

《テキスト》

特になし。必要に応じて資料を配付する。

《参考文献》

「運動発達の科学」～幼児の運動発達を考える～三宅一郎（大阪教育図書）

「幼児の運動発達学」小林寛道(ミネルヴァ書房)

「幼児の有酸素性能力の発達」吉澤茂弘著(杏林書院)

“Motor Development and Movement Experiences for Young Children”DAVID L.GALLAHUE,John Wiley&Sons,ink

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。

毎時間の授業のまとめ、感想、質問等をまとめたノートを提出する（50%）

随時課題に対するレポート（30%）

学期末に理解度を確認するテスト（20%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

下記授業計画における次時の授業内容を参考文献等であらかじめ確認しておくことでより理解が深まる。

<復習方法>

学んだ内容を配付資料等により再確認にノートにまとめる。疑問点等があればノートの感想欄に記載すること（後日必ず返答する）。これらの活動を通して効果的な理解が得られると考える。

《備考》

幼児の運動遊び指導者(幼児体育指導者)および小学校体育指導者として必要な知識を身につけて欲しい。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション
第 2 週	移動系運動を中心とした運動（1）
第 3 週	移動系運動を中心とした運動（2）
第 4 週	操作系運動を中心とした運動（1）
第 5 週	操作系運動を中心とした運動（2）
第 6 週	操作系運動を中心とした運動（3）
第 7 週	非移動運動を中心とした運動（1）
第 8 週	非移動運動を中心とした運動（2）
第 9 週	対人ゲーム
第10週	集団ゲーム（1）
第11週	集団ゲーム（2）
第12週	小学校における体育指導の考え方と実践方法（1）
第13週	小学校における体育指導の考え方と実践方法（2）
第14週	小学校における体育指導の考え方と実践方法（3）
第15週	まとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	スポーツ医学概論				
担当者名	木下 幸文				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

身体活動量が多い者や、運動をよく行っている者は、総死亡率、虚血性心疾患、高血圧、糖尿病や肥満などの罹患率や死亡率が低いことが認められている。これまで蓄積された多くの知見は、習慣的な運動、特に中等度の有酸素運動を中心とした運動プログラムが生活習慣病の病態改善に寄与するとともに、心臓血管系疾患の発症リスクを軽減することを示唆してきた。運動の指導に携わる人は対象者に運動を負荷した場合に身体がどのような影響を受けるか、またどのようなメカニズムによって効果が得られるのかという本質を理解しておかなければならない。本講義では、これまで報告されている邦文・欧文原著論文の講読を通して、生活習慣病に関連する医学的基礎知識から予防や治療につながるような運動の効果について講述する。

《授業の到達目標》

生活習慣を改善することにより、疾病の発症や進行が予防できる疾患と定義されている生活習慣病は、「一次予防」すなわち健康を維持・促進して疾患の発症を予防することを目標としている。運動は疾患の発症を予防するだけでなく、生活習慣病に対する運動療法としても注目を集めている。本講義を通じて、主に生活習慣病に対する治療や予防に効果的な運動を類別できる。

《テキスト》

配付したプリントを使用します。

《参考文献》

- 『スポーツ指導者のためのスポーツ医学』小出清一、福林徹、河野一郎編（南江堂）2000年
 『スポーツ医学』日本体力医学会学術委員会監修（朝倉書店）2000年
 『健康日本21』（21世紀における国民健康づくり運動について）財団法人 健康・体力づくり事業財団 2000年
 『フィットネスシリーズ4 健康・スポーツの医学—内科』青木高、太田壽樹監修（建帛社）1999年

《成績評価の方法》

授業中に行う発表や討論等、発表に必要な資料作成の成果（80%）と平常点（20%）を合わせて総合的に評価する。ただし講義の出席率が3分の2以下の者は単位を取得する事が出来ません。

《授業時間外学習》

講義中に行う発表に関する資料について、専門用語や内容について学習しておくこと。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	健康の定義と健康づくりのあり方
第2週	健康づくりのための運動所要量と運動指針
第3週	生活習慣病の運動療法(1) 糖尿病に対する運動の意義(1) 運動とインスリン感受性について
第4週	生活習慣病の運動療法(2) 糖尿病に対する運動の意義(2) 運動と糖輸送蛋白について
第5週	生活習慣病の運動療法(3) 高血圧症に対する運動の意義(1) 運動による降圧の機序について
第6週	生活習慣病の運動療法(4) 高血圧症に対する運動の意義(2) 運動処方として適するスポーツについて
第7週	生活習慣病の運動療法(5) 高脂血症に対する運動の意義(1) 運動と脂質代謝について
第8週	生活習慣病の運動療法(6) 高脂血症に対する運動の意義(2) 運動と脂質代謝の調節機構について
第9週	生活習慣病の運動療法(7) 動脈硬化症に対する運動の意義(1) 運動と脂質代謝について
第10週	生活習慣病の運動療法(8) 動脈硬化症に対する運動の意義(2) 運動と脂質代謝の調節機構について
第11週	虚血性心疾患に対する運動の効果について 肥満に対する運動の効果について
第12週	運動と炎症反応について
第13週	運動と活性酸素(1) 運動による活性酸素の酵素的消去システムについて
第14週	運動と活性酸素(2) 運動による非酵素的な抗酸化機構について
第15週	総括

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	スポーツ心理学				
担当者名	堤 俊彦				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

運動・スポーツが及ぼす心の発達及びメンタルヘルスの向上効果に関し、知識や支援力を養う。運動・スポーツは、年齢を問わず体だけではなく人の心の発達や情緒の安定に欠かせない要素である。とはいえ、その継続して行うのは簡単ではない。本講義では、運動・スポーツの開始や継続に伴う心理的要因や動機づけを健康スポーツ視点において学び、将来、教育や健康運動指導士、心理カウンセリングの場面で活かせることを目的とする。

《授業の到達目標》

1. 運動・スポーツと心の健康及びメンタルヘルス関係について理解し論述できる。
2. 運動・スポーツ指導において心理学的な視点をふまえた実践法を習得する。
3. 行動変容に必要なとなるカウンセリングに関する知識を学び技法を習得する。

《テキスト》

健康スポーツの心理学 竹中晃二（編）大修館書房

《参考文献》

《成績評価の方法》

- ・ 中間とファイナルに実施する二回の試験（50%）、予習レポート(25%)、毎講義後のふり返り（25%）
- ・ 試験（50点 X 2）と予習レポート（10点 x 10）、ふり返り（5点 x 10）の250点満点の内100点以上で合格とする。

《授業時間外学習》

- ・ 講義の前に教科書の指定箇所を読んでおくこと
- ・ 教科書の次回の授業範囲を読み要約とコメントを予習レポートして提出する（4回）

《備考》

本クラスでは、健康の維持・増進に関して、実践的な知識を習得して欲しいです。そして、それらの知識を行動として活かし、学生時代からの健全な生活習慣づくりに結びつけてください。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	健康スポーツ心理学とは何か： 現代人の健康問題、動かなくなった現代人
第 2 週	健康スポーツのすすめ： 現代人の健康ニーズ、運動効果の根拠、運動の精神的恩恵
第 3 週	運動のメンタルヘルスへの影響： 生理・心理・社会的効果、やる気の行動科学
第 4 週	ストレス社会の健康スポーツ： ストレス社会、運動のストレスへの効果、不安減少のメカニズム
第 5 週	運動の心理学的効果（演習） ウォーキングにおける心の健康増進効果
第 6 週	運動と感情の健康 現代人を蝕む抑うつ、運動の気分改善効果、有酸素運動のうつ予防効果
第 7 週	運動・スポーツと行動科学 動機づけのメカニズム、動機づけの理論、内発的と外発的動機づけ
第 8 週	運動とメンタルヘルス（総論）
第 9 週	介護予防と健康スポーツ： 介護予防とは、加齢による心理的变化、高齢者の運動と自己効力感
第 10 週	健康教育と運動指導： 生活習慣と健康教育、カウンセリングとセラピー、依存とオーバートレーニング
第 11 週	運動と心の健康増進Ⅰ（健康運動指導士準備コースⅠ） 精神保健とメンタルヘルス、健康の定義、心理学的効果の測定
第 12 週	運動と心の健康増進Ⅱ（健康運動指導士準備コースⅡ） 心の発達理論、中高年期における心理的变化、運動を妨げるもの
第 13 週	健康づくり運動とカウンセリング（健康運動指導士準備コースⅢ） 運動実践の社会心理効果、運動関連心理指標、健康心理カウンセリングの役割
第 14 週	行動変容Ⅰ（健康運動指導士準備コースⅣ） 今なぜ行動変容か、変化を妨げる要因
第 15 週	行動変容Ⅱ（健康運動指導士準備コースⅤ） トランスセオレティカルモデル、行動変容のステージ、リラプスへの対応

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	トレーニング科学 I				
担当者名	矢野 琢也				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

- ・トレーニング指導において必要な基礎知識（運動生理学、解剖学、トレーニング理論、方法論等）の習得を行います。その上で実際にトレーニングを行い、理解を深めます。（時間配分：理論習得に約70%、実技習得に約30%）
- ・レジスタンストレーニングを中心に授業を展開します。実技では基本的なレジスタンストレーニングの方法、実施上の注意、指導方法等を学びます。
- ・理論に関してはテキストを中心に解説し、必要に応じてトピックス等を追加します。
- ・指導者として必要な「聞く、理解する、ポイントを見つける、まとめる、書く」の作業も徹底して行います。よってほぼ毎回レポート課題があります。

《授業の到達目標》

トレーニングの指導者養成を目標とします。
 トレーニング指導において必要なレジスタンストレーニングの基礎知識の獲得を行います。

《テキスト》

「健康運動実践指導者用テキストー健康運動指導者の手引きー」（財）健康・体力づくり事業財団

《参考文献》

「NSCA パーソナルトレーナーのための基礎知識」森永製菓（株）健康事業部、「ストレンクス&コンディショニング I」大修館書店、「ストレンクストレーニング&コンディショニング」ブックハウス HD、「競技力向上のトレーニング戦略」大修館書店、「トレーニングの科学的基礎」ブックハウス HD、「入門運動生理学第3版」杏林書院、「スポーツ医科学」杏林書院、「図解スポーツトレーニングの基礎理論」西東社

《成績評価の方法》

- ・10数回のレポートとテスト(70%)、ならびに実技テスト(30%)の結果のみで評価します。
- ・レポートは期日厳守です。原則遅れは受け取りません。
- ・無断欠席回数が4回以上の者は単位認定しません。

《授業時間外学習》

- ・授業のねらいでも述べましたが、基本的にシラバスの内容通りに授業は展開しますので、該当する箇所はテキストを事前に読んでまとめるくらいの予習を求めます。それができていれば、より高度な内容や専門的なテーマで授業が展開できるので、大いに期待しています。皆さんのやる気を最大限に生かせる授業にしたいと思います。
- ・実技に関しては、自ら時間を作って練習ならびに実践を行うことを強く希望します。

《備考》

- ・実際に運動も行います。指示のある日は、運動が出来る用意をすること。
- ・運動指導方法を真剣に学びたい人が、より多くのことを学べるよう、積極的に授業を展開してゆきます。みなさんの積極的な姿勢を望みます。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション。受講希望者は必ず出席すること。
第 2 週	トレーニング指導者について。必要な素養や技術等について理解する。
第 3 週	スポーツ障害の発生について理解する。あわせていかに予防するかをレジスタンストレーニングの視点から考える。
第 4 週	基本的なレジスタンストレーニングについてその特徴や理論を理解する。
第 5 週	レジスタンストレーニングの種類とその特徴について理解する。
第 6 週	レジスタンストレーニングのプログラム作成のための計画について理解する。
第 7 週	レジスタンストレーニングのプログラム評価のための指標について理解する。
第 8 週	レジスタンストレーニングのプログラム-1。下腿のトレーニング種類と特徴を理解する。
第 9 週	レジスタンストレーニングのプログラム-2。上肢のトレーニングの種類と特徴を理解する。
第 10 週	レジスタンストレーニングのプログラム-3。体幹のトレーニングの種類と特徴を理解する。
第 11 週	レジスタンストレーニングのプログラム-4。話題性の高いレジスタンストレーニングについてその効果等を知る。
第 12 週	レジスタンストレーニングのプログラム-5。高齢者を対象としたレジスタンストレーニングについて理解する。
第 13 週	成長期におけるレジスタンストレーニングについて理解する。
第 14 週	栄養面をサプリメントの活用等から理解する。
第 15 週	実技のチェック等総まとめを行う。

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	トレーニング科学Ⅱ				
担当者名	矢野 琢也				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

- ・「トレーニング科学Ⅰ」の応用編です。よって、基本的な運動生理学、解剖学、運動栄養学の知識を取得している(自習も含めて)ものを対象として授業展開を行います。
- ・トレーニング指導において必要な基礎知識（運動生理学、解剖学、トレーニング理論、方法論等）の習得を行います。その上で、実際にトレーニングを行い、理解を深めます。(時間配分：理論習得に約70%、実技習得に約30%)
- ・フリーウエイトでは「スクワット」を中心に技術習得ならびに理論の理解を行います。
- ・テキストによる補足解説を行い、あわせて随時トビックス等を追加します。
- ・指導者として必要な「聞く、理解する、ポイントを見つける、まとめる、書く」の作業を徹底して行います。そのため、ほぼ毎回のレポート課題あり。

《授業の到達目標》

- ・トレーニングの指導者養成を目標とします。
- ・レジスタンストレーニング指導において必要な基礎知識の獲得を行います。その結果、基本的なレジスタンストレーニングの指標作りならびにトレーニングの評価が出来るレベルを目指します。

《テキスト》

「NSCA パーソナルトレーナーのための基礎知識」森永製菓（株）健康事業部¥12,650。必要に応じて資料も配布します。

*テキストは、「トレーニング科学Ⅰ、Ⅱ」「スポーツ科学Ⅰ、Ⅱ」で使用します。

《参考文献》

「ストレンクス&コンディショニングⅠ」大修館書店、「ストレンクストレーニング&コンディショニング」ブックハウス HD、「競技力向上のトレーニング戦略」大修館書店、「トレーニングの科学的基礎」ブックハウス HD、「入門運動生理学第3版」杏林書院、「スポーツ医科学」杏林書院、「図解スポーツトレーニングの基礎理論」西東社

《成績評価の方法》

- ・レポートと小テスト(50%)、ならびに必要に応じて実施する実技テスト(50%)の結果のみで評価します。レポート提出は期日厳守です。原則遅れは受け取りません。欠席回数が4回以上の者は単位認定をしません。
- ・加点主義ですので、努力した分は評価します。

《授業時間外学習》

- ・事前に指定された内容の箇所のテキストを読んで、「わからない点」を明確にしておくことを求めます。そのわからないところやわかりにくい点ならびに重要箇所を中心に解説します。

《備考》

- ・実際に運動も行います。指示された日には運動が出来る用意をすること。
- ・運動指導や運動生理学を真剣に学びたい人が、より多くのことを学べるよう、積極的に授業を展開してゆきます。みなさんの積極的な姿勢を望みます。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション。受講希望者は必ず出席すること。
第 2 週	トレーニング指導者について必要な素養や技術等の解説と理解を行う。
第 3 週	スポーツ障害の発生について理解する。あわせていかに予防するかを考える。
第 4 週	基本的なレジスタンストレーニングについてその理論ならびに手技を理解する。
第 5 週	レジスタンストレーニングのプログラムデザインについて基本を理解する。
第 6 週	レジスタンストレーニングのプログラム-1。(膝、股関節)
第 7 週	レジスタンストレーニングのプログラム-2。(膝、股関節)
第 8 週	レジスタンストレーニングのプログラム-3。(膝、股関節) チェック-1
第 9 週	レジスタンストレーニングのプログラム-4。(膝、股関節) チェック-2
第10週	レジスタンストレーニングのプログラム-5。(膝、股関節:応用編) プライオメトリックとは!?
第11週	レジスタンストレーニングのプログラム-6。(膝、股関節:応用編) プライオメトリック (実技)
第12週	レジスタンストレーニングのプログラム-7。(膝、股関節:応用編) プライオメトリック (チェック)
第13週	成長期におけるレジスタンストレーニングの特性を理解する。
第14週	栄養面をサプリメントの活用等の観点から理解する。
第15週	総まとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	健康・体力づくり実践 I				
担当者名	三宅 一郎・徳田 泰伸・樽本 つぐみ				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

授業計画に示す内容のスポーツ種目や学校体育種目を実施する。方法として、個人・グループ毎に実施種目のルール確認と正しい実践方法の理解。実施種目は、個人・グループ毎に授業計画に示す全種目を経験する。各自がこの授業を通して体得したものが、次年度以降の授業に有効に活用されることを期待する。

随時体力測定を実施し自己の体力レベルを把握する機会を持ち、体力の維持増進に努めること。

さらに、学校施設内で実施不可能な種目（水泳等）については定期時間外に集中講義を実施する。

《授業の到達目標》

1年次開講のスポーツ実践I・IIと同様に主として運動実践を通して体育指導者としての能力を養うことを目標とする。その為に、スポーツ・体育における様々な種目の正しい実践方法を身につける。具体的には、様々なスポーツのルールの理解及び審判方法を体得すると共に、学校体育における実施種目の実戦を通して段階的な指導方法を学ぶ。また、スポーツ・運動実践時の障害や事故を未然に防ぐ為に、有効な準備運動や整理運動を知る。以上に示したスポーツ・体育指導者として必要と思われる内容を実施する。

《テキスト》

特になし。必要に応じて資料を配付する。

《参考文献》

『運動適応の科学～トレーニングの科学的アプローチ～』竹宮隆・石河利寛著(杏林書院)

『体力を考える～その定義・測定と応用～』宮下充正著(杏林書院)

『障害スポーツのプログラム』日本レクリエーション協会編(遊戯社)

『からだの‘仕組み’のサイエンスー運動生理学の最前線ー』加賀谷淳子他(杏林書院)

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。

ただし授業回数の1/3以上欠席した場合単位は与えない。

毎時間の授業のまとめ、感想、質問等をまとめたノート提出する（50%）

随時課題に対するレポート（30%）

学期末に理解度を確認するテスト（20%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

下記授業計画における次時の授業内容を参考文献等であらかじめ確認しておくことでより理解が深まる。

<復習方法>

学んだ内容を配付資料等により再確認にノートにまとめる。疑問点等があればノートの感想欄に記載すること（後日必ず返答する）。

これらの活動を通して効果的な理解が得られると考える。

《備考》

健康システム学科の学生として、スポーツ・学校体育の理論と実践を積極的に体得しよう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション
第 2 週	器械運動：平均台運動における特性の理解と実践（1）
第 3 週	器械運動：平均台運動における特性の理解と実践（2）
第 4 週	球技：テニスにおける特性の理解と実践（1）
第 5 週	球技：テニスにおける特性の理解と実践（2）
第 6 週	球技：ハンドボールにおける特性・ルールの理解と実践（1）
第 7 週	球技：ハンドボールにおける特性・ルールの理解と実践（2）
第 8 週	陸上競技：やり投げにおける種目特性の理解と実践
第 9 週	陸上競技：ハードル走における種目特性の理解と実践
第 10 週	陸上競技：短・長距離走における種目特性の理解と実践
第 11 週	球技：卓球における特性・ルールの理解と実践（1）
第 12 週	球技：ソフトボールにおける特性・ルールの理解と実践（2）
第 13 週	ダンス：表現活動における特性の理解と実践（1）
第 14 週	ダンス：表現活動における特性の理解と実践（2）
第 15 週	まとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	健康・体力づくり実践Ⅱ				
担当者名	三宅 一郎・徳田 泰伸・樽本 つぐみ				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

授業計画に示す内容を、理論と実践を交えながら実施する。日常生活において実践できる多種多様な健康体力づくりの運動を、実践を通してその方法を体得して欲しい。また、各年代や体力レベルに応じた健康体力づくりの指導時における留意点などを考える。さらに、様々な体力測定の実施を通して、的確な体力レベルの把握の仕方についても考える。これらの幅広い健康体力づくりの理論と実践の学習内容が学校体育指導者としても役立つことを期待する。最終的に、協力者の日常生活における健康体力づくりプログラムの作成や実践指導を体験する。

《授業の到達目標》

学校体育対象者を含めた様々な年代の個人の体力レベルに応じた、健康体力づくりの実践方法を考える。その実践を通して、多種多様な健康体力づくり実践時の正しい実践方法や有効な準備運動・整理運動について理解し、指導者としての能力を養うことを目標とする。最終的には、実際に個人レベルでの健康体力づくりプログラムを作成し、実践指導を体験する。

《テキスト》

特になし。必要に応じて資料を配付する。

《参考文献》

『運動適応の科学～トレーニングの科学的アプローチ～』竹宮隆・石河利寛著（杏林書院）

『体力を考える～その定義・測定と応用～』宮下充正著（杏林書院）

『障害スポーツのプログラム』日本レクリエーション協会編（遊戯社）

『からだの‘仕組み’のサイエンス』—運動生理学の最前線—加賀谷淳子他（杏林書院）

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。

ただし授業回数の1/3以上欠席した場合単位は与えない。

毎時間の授業のまとめ、感想、質問等をまとめたノートを提出する（50%）

随時課題に対するレポート（30%）

学期末に理解度を確認するテスト（20%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

下記授業計画における次時の授業内容を参考文献等であらかじめ確認しておくことでより理解が深まる。

<復習方法>

学んだ内容を配付資料等により再確認にノートにまとめる。疑問点等があればノートの感想欄に記載すること（後日必ず返答する）。これらの活動を通して効果的な理解が得られると考える。

《備考》

健康システム学科の学生として、健康体力づくりの理論と実践を積極的に体得し、学校体育指導者及び各年代における正しい健康体力づくり実践を指導できる能力を体得して欲しい。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション
第 2 週	年代に応じた、体力測定の実施方法と意義
第 3 週	障害を防ぐ準備運動、整理運動の実践と指導法（1）
第 4 週	障害を防ぐ準備運動、整理運動の実践と指導法（2）
第 5 週	幼児期における健康体力づくりの実践と指導法
第 6 週	児童期における健康体力づくりの実践と指導法
第 7 週	青少年期（中学生・高校生）における健康体力づくりの実践と指導法
第 8 週	成人期における健康体力づくりの実践と指導法
第 9 週	中高年期における健康体力づくりの実践と指導法
第 10 週	高齢者における健康体力づくりの実践と指導法
第 11 週	体力レベルに応じた、健康体力づくり実践と指導法（1）
第 12 週	体力レベルに応じた、健康体力づくり実践と指導法（2）
第 13 週	各年代に応じたスポーツ実践とその指導法（1）
第 14 週	各年代に応じたスポーツ実践とその指導法（2）
第 15 週	まとめ

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	病理学概論				
担当者名	押本 剛				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

病理学（pathology）とは、病気の原因やその成り立ちを科学的に理解するための学問である。人は病気になるとまず、何が原因でそのような状態になったのかを疑問に思うであろう。それを解明するのが病因学（etiology）であり、その病気がどのような機序で人体に影響を及ぼしていくのかを知るのが病理発生学（pathogenesis）で、病気の結果、組織の構造がどのように変化していくかをみるのが病理組織学（histopathology）である。

《授業の到達目標》

授業を通じて身近な疾患から病理学に触れる。

《テキスト》

新クイックマスター病理学 堤 寛 監修（医学芸術社）

《参考文献》

臨床病理・病態学、山内 豊明編（メディカ出版）
 シンプル病理学 笹野公伸ほか編（南江堂）
 標準病理学 町並睦生監修（医学書院）
 新病理学総論・各論 菊地浩吉編（南山堂）
 病理組織の見方と鑑別診断 赤木忠厚ほか編（医歯薬出版）

《成績評価の方法》

講義中に行う小テスト（約40%）、レポート（約20%）、口頭試問（約40%）等にて評価。
 なお、出席点そのものは評価に含めないが、授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

テキストの指定箇所を読んでおくこと

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	総論) 病理学の歴史
第2週	総論) 循環障害
第3週	各論) 心臓の構造と機能
第4週	総論) 炎症、感染症
第5週	各論) 呼吸器系の構造と機能
第6週	総論) 免疫異常とアレルギー
第7週	各論) 血液像と骨髄での造血
第8週	各論) 全身性疾患
第9週	総論) 細胞障害、先天異常
第10週	各論) 脈管の構造と機能
第11週	総論) 腫瘍
第12週	各論) 消化管の構造と機能
第13週	各論) 肝臓・胆嚢・膵臓の構造と機能
第14週	各論) 脳・神経系の構造と機能
第15週	総括

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	学校保健Ⅱ				
担当者名	加藤 和代				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

学校保健は、子どもたちの命と健康をまもるために必要な活動であり、指導に関わるも者に必要な使命です。学校保健Ⅰの学修内容をもとに、学校保健活動の実際についてその理論と方法を学び、児童生徒の健康づくりとともに学生自らの健康行動化への意識を高めることをねらいとしています。

この授業では、学校保健のうち保健管理に関する分野を中心に、学校安全を含めて保健管理に必要な知識や技術を修得するとともに、保健管理上の課題に触れながら、児童生徒の心と体の健康について、演習や実習等を通して具体的に学びます。

《授業の到達目標》

- 学校保健の領域を構造的にとらえることができる。
- 児童生徒の健康、安全に対する学校と教師の役割や責任について説明ができる。
- 学校保健活動の根拠となっている法律や制度を類別できる。

《テキスト》

「学校保健ハンドブック」（教員養成系大学保健協議会編 ぎょうせい）

《参考文献》

「学校保健の動向平成 21 年版」（財団法人日本学校保健会）「児童生徒の健康診断マニュアル 改訂版」（財団法人日本学校保健会）

《成績評価の方法》

課題レポート・グループワーク発表（50%）、定期試験（50%）から総合的に評価する。
授業欠席回数が授業実施回数の 1 / 3 以上の者は定期試験を受けることができません。

《授業時間外学習》

毎授業の最後に、学校教育や学校保健に関するトピックスを提示するので、「読み取る」「調べる」などして自分の意見をまとめ次回に発表する。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション 学校保健活動の展開
第 2 週	子どもの現代的健康課題
第 3 週	健康実態把握と学校保健統計
第 4 週	児童生徒の健康診断（1） 健康診断の実際（計画から事後措置まで）
第 5 週	児童生徒の健康診断（2） 保健管理としての健康診断、保健教育としての健康診断
第 6 週	感染症・食中毒の予防と対応
第 7 週	メンタルヘルスの理解とその対応（不登校、虐待、発達障害等）
第 8 週	学校環境衛生
第 9 週	学校環境衛生検査の実際
第 10 週	学校おける危機管理、安全管理
第 11 週	学校事故の状況、突然死への対応
第 12 週	学校給食と食育
第 13 週	グループワーク発表
第 14 週	グループワーク発表
第 15 週	学習のまとめ

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	学校保健Ⅲ				
担当者名	大平 曜子・加藤 和代				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

「学校保健」が教育職員免許法上の必須科目となっていることから、学校では全職員が協力して児童生徒の健康安全を推進していくことが求められています。とくに保健体育教員、養護教諭はその専門的立場から、ともに協力して積極的に役割を担い、活躍することが期待されています。この授業では保健教育、安全教育の指導の場面を中心に、児童生徒の健康課題の解決に向けた模擬授業等の体験・演習を通して実践力を身につけることをねらいとしています。授業時間外での教材研究等の積極的な取り組みを求めます。

《授業の到達目標》

- 児童生徒の現代的な健康課題について説明することができる。
- 「教科保健（保健学習）」と「保健指導」相違点を説明することができる。
- 工夫した保健指導の指導案作成、模擬授業等とおして役割を担う実践力を身につけることができる。

《テキスト》

学校保健ハンドブック（教員養成系大学保健協議会編） ぎょうせい
 小学校学習指導要領解説文部科学省 総則編（東洋館出版社）、体育編（東洋館出版）
 中学校学習指導要領解説文部科学省 総則編（ぎょうせい）、保健体育編（東山書房）

《参考文献》

これからの中学校保健学習、これからの小学校保健学習（財団法人日本学校保健会）

《成績評価の方法》

課題レポート・グループワーク発表（50%）、定期試験（50%）から総合的に評価する。
 授業欠席回数が授業実施回数の1/3以上の者は定期試験を受けることができません。

《授業時間外学習》

ワークシート、資料をこまめに整理して復讐するとともに、児童生徒の健康課題に関心をもって情報を収集すること。

《備考》

とくに教員免許の取得をめざしている人は、積極的な学習への参加を望みます。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション 社会の変化と子どもの健康課題
第 2 週	ヘルスプロモーションと健康教育
第 3 週	教育課程と保健教育
第 4 週	学校保健計画、学校安全計画
第 5 週	児童生徒の歯・口の健康づくり
第 6 週	喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育（1）
第 7 週	喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育（2）
第 8 週	学校における性教育・エイズ教育（1）
第 9 週	学校における性教育・エイズ教育（2）
第 10 週	食育
第 11 週	防災教育
第 12 週	グループワーク、発表(指導案、教材づくり)
第 13 週	グループワーク、発表(模擬授業)
第 14 週	グループワーク、発表(模擬授業)
第 15 週	学習のまとめ

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	精神保健				
担当者名	南川 康博				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

心の健康・心の問題について正しく理解し、専門的知識を実践で活かすことはさまざまな分野において必須となる。最初に、精神保健の意義や歴史について学ぶ。またその対象である人の心の構造と機能を生物学的観点から科学的に学ぶ。次に、心の病的状態について精神医学的観点から学習する。精神症候学により精神科特有の精神症候を理解し、各論では代表的な精神疾患の病態・治療の概要を学ぶ。また、心の健康の保持・増進の基本的理念を正しく認識し、社会において必要な精神保健活動や精神保健福祉の制度について理解を深める。

《授業の到達目標》

精神保健の基本理念と社会における実践・福祉について理解し、説明することができる。

《テキスト》

『精神看護学Ⅰ精神保健学』 吉松和哉他編 スーヴェルヒロカワ

《参考文献》

精神保健学 精神福祉士養成講座編集委員会編（中央法規）
 国民衛生の動向 厚生統計協会編（厚生統計協会）
 我が国の精神保健福祉 精神保健福祉ハンドブック 精神保健福祉研究会監修（太陽美術）
 世界の精神保健医療 新福尚隆ほか著（へるす出版）

《成績評価の方法》

筆記試験 70%、平常評価 30%（小テスト、レポート、出席状況、受講態度など）により総合的に評価する。

《授業時間外学習》

次回の授業範囲を予習し、専門用語の意味等をノートに整理して理解しておくこと。

《備考》

精神保健学は心の健康増進や維持に関わる広範な学問であり、医療関係者だけでなく、専門外の全ての人々が知っておくことが望ましい。とくに将来メンタルヘルスに関わる職業につく場合は必須であるので、是非受講してほしい。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	精神保健の基礎知識： 1)精神保健とは 2)精神保健医療の歴史 3)精神保健の意義と課題
第 2 週	ライフサイクルにおける精神保健： 1)胎児期・乳幼児期における精神保健 2)学童期における精神保健 3)思春期における精神保健 4)青年期における精神保健 5)成人期における精神保健 6)老年期における精神保健
第 3 週	精神疾患の基礎知識Ⅰ： 1)脳の構造と神経活動のメカニズム 2)脳の機能と精神活動
第 4 週	精神疾患の基礎知識Ⅱ： 精神症候学の概要
第 5 週	精神疾患の基礎知識Ⅲ： 代表的な精神疾患の概要
第 6 週	精神疾患の基礎知識Ⅳ： 代表的な精神疾患の治療の概要
第 7 週	精神保健における個別課題への取り組みⅠ： 1)精神障害者対策 2)認知症対策
第 8 週	精神保健における個別課題への取り組みⅡ： 1)アルコール関連問題対策 2)薬物乱用防止対策
第 9 週	精神保健における個別課題への取り組みⅢ： 1)思春期の精神保健対策 2)地域精神保健対策 3)ターミナルケアと精神保健
第 10 週	精神保健活動の実践Ⅰ： 1)家庭における精神保健 2)学校における精神保健
第 11 週	精神保健活動の実践Ⅱ： 1)職場における精神保健 2)地域における精神保健
第 12 週	地域精神保健と地域保健Ⅰ： 1)地域精神保健施策の概要 2)地域保健施策の概要
第 13 週	地域精神保健と地域保健Ⅱ： 1)関係法規 2)関連施策
第 14 週	諸外国における精神保健： 1)アメリカの地域精神保健 2) イギリスの地域精神保健 3) フランスの地域精神保健 4)諸外国における職場の精神保健
第 15 週	精神保健の総括

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	健康行動論				
担当者名	植田 誠治				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

健康行動を変容する種々のモデルを分析し、それらを健康教育へ応用する実践的研究を検討する。

《授業の到達目標》

健康行動を変容するモデルを理解し、健康教育への応用を検討できる。

《テキスト》

松本千明『医療・保健スタッフのための健康行動理論の基礎』医歯薬出版

《参考文献》**《成績評価の方法》**

出席，小課題への取り組み，テストについて，4：3：4の割合で評価する。

《授業時間外学習》

授業中に示す教科書の指定箇所を予習として読んでおくこと。
宿題を課すことがあるので、指示された方法で提出すること。

《備考》**《授業計画》**

週	授 業 計 画
第 1 週	健康行動科学の発展
第 2 週	健康行動理論の応用可能性
第 3 週	価値－期待モデルとは何か
第 4 週	価値－期待モデルの応用
第 5 週	ヘルス・ビリーフ・モデルの検討（1）
第 6 週	ヘルス・ビリーフ・モデルの検討（2）
第 7 週	自己効力感の検討（1）
第 8 週	自己効力感の検討（2）
第 9 週	変化のステージモデルの検討
第 10 週	計画的行動理論とは何か
第 11 週	ストレス・コーピング
第 12 週	ソーシャル・サポート
第 13 週	ヘルス・ローカス・オブコントロール
第 14 週	タイプ A 行動特性や自尊感情と健康行動
第 15 週	まとめ

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	看護学Ⅰ				
担当者名	大和田 節子				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	2年・Ⅰ期

《授業のねらい及び概要》

基礎看護技術を学ぶにあたって、1年次修得した看護の概念を想起し看護の対象となる人々を理解した上でよりよい看護ケアを提供するために習得すべき技を学ぶ。

看護技術は、健康の維持増進あるいは回復のために、対象の安全をまもり、最大限の安楽を提供し、自立を促すという大きな方向性に沿ったものでなければならない。主な授業内容は、スクリーニングの技術、安全をまもる技術、対象への介入技術である。受講者は、単に技を学ぶのではなく人間理解に関心・興味を持ち、よりよい技術の開発のために問題意識を持つことが重要であることを理解する。

《授業の到達目標》

- 「看護技術とは」を理解し説明できる。
- スクリーニングのねらいを理解することができる。
- スクリーニング技術の実際・ポイントを理解し、実践できる。
- 安全をまもる技術を理解し、実践できる。
- 対象への介入技術を理解し、実践できる。

《テキスト》

『系統看護学講座 基礎看護学技術Ⅰ、基礎看護学技術Ⅱ』 藤崎 郁、川村 治子著（医学書院）

《参考文献》

『演習・実習に役立つ基礎看護学技術』三上 れつ、小松 万喜子編集（ヌーヴェル ヒロカワ）

《成績評価の方法》

技術評価（40%）、定期試験（60%）とし、100点満点で60点以上を合格とする。
授業実施回数の3分のⅠ以上欠席した者は最終試験の受験資格はないものとする。

《授業時間外学習》

自分自身の「学習のテーマ・目的」を持ち、ゴールをイメージしながら計画的に学習する。学習のために必要な知恵とスキルを身につけるための努力は自分自身で決める。ひとりではできないときは、同じ目的を持つ仲間と知恵を出し合えば必ず到達することができる。その学習過程をファイルし、自身の個性や得意や強み・弱みを知る材料として活かして欲しい。そして、輝く未来のために自分に自信を持ち、自分の心に正直に対座するというのをこの機会に技の1つとして習得してはどうか。

《備考》

授業は講義と演習を行う。演習では、準備（物品、手順、服装、時間、マナー等）から後片付けまでが授業展開となる。参加型学習であることを念頭に、積極的に、楽しく、学習すること。

《授業計画》

週	授 業 計 画					
第1週	基礎看護技術とは	授業の進め方				
第2週	スクリーニングの技術	スクリーニングとは	自覚症状と精神・身体機能の把握			
第3週	スクリーニングの技術	身体測定	バイタルサインの観察			
第4週	スクリーニングの技術	演習				
第5週	スクリーニングの技術	健康歴と保健行動の把握	生活状況とその背景の把握			
第6週	スクリーニングの技術	演習				
第7週	安全をまもる技術	看護介入と安全・安楽	感染防止の技術	生活環境を整える		
第8週	安全をまもる技術	演習				
第9週	対象への介入技術	日常生活への援助	身体の清潔を保つ	衣服を用いる	食べる	排泄する
第10週	対象への介入技術	日常生活への援助	演習			
第11週	対象への介入技術	日常生活への援助	姿勢を保つ・活動を整える	睡眠・覚醒の援助		
第12週	対象への介入技術	日常生活への援助	演習			
第13週	対象への介入技術	検査・治療における援助				
第14週	対象への介入技術	演習				
第15週	学習のまとめ					

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	看護学Ⅱ（症状看護）				
担当者名	吉永 初喜				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

養護教諭にとって看護の知識・技術を習得することは必須である。また、自分と周囲の人々の健康にも関心を持ち疾病の早期発見と治療と看護の有効性を高めることは生涯の健康管理にも大きな影響を及ぼす。この講義ではなぜ症状が起こるのか、症状が全身にどのような影響を及ぼすのかを既習の解剖生理学と関連させてメカニズムから学習する。症状を客観的に観察し、的確な判断と対応ができるように具体的に学ぶ。

《授業の到達目標》

- ・科学的根拠に基づいて人体の構造・機能と健康障害（症状）の関連について理解できる。
- ・それぞれの健康障害時に必要な観察とアセスメント、援助方法が説明できる。

《テキスト》

『養護教諭必携シリーズ No.3 最新看護学』中桐 佐智子ほか著（東山書房）

《参考文献》

臨床看護学叢書 症状別看護 川島みどりほか著 メヂカルフレンド社

《成績評価の方法》

定期試験 90%（なお、試験はテキスト、ノート等の「持ち込み不可」にて実施する）、出席状況・授業に臨む態度 10%で評価する。

《授業時間外学習》

- ・予習として既習の解剖・生理学の内容を見直しておくこと。
- ・普段からクリティカルシンキングの考え方を取り入れ、病態及び看護の方法がメカニズムから理解できるよう習慣づけてほしい。
- ・浅く広く覚えることも大切ではあるが看護の方法ではすべてに根拠があることを理解し専門性を高めるという姿勢で授業に臨んでほしい。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	呼吸器系の病態と症状・徴候
第 2 週	呼吸器系のフィジカルアセスメントと援助方法
第 3 週	循環器系の病態と症状・徴候
第 4 週	循環器系のフィジカルアセスメントと援助方法
第 5 週	消化器系の病態と症状・徴候
第 6 週	消化器系のフィジカルアセスメントと援助方法
第 7 週	腎・泌尿器系の病態と症状・徴候
第 8 週	腎・泌尿器系のフィジカルアセスメントと援助方法
第 9 週	脳神経系の病態と症状・徴候
第 10 週	脳神経系のフィジカルアセスメントと援助方法
第 11 週	代謝・内分泌系の病態と症状・徴候
第 12 週	代謝・内分泌系のフィジカルアセスメントと援助方法
第 13 週	血液・造血器系の病態と症状・徴候
第 14 週	血液・造血器系のフィジカルアセスメントと援助方法
第 15 週	まとめ

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	臨床基礎実習				
担当者名	大平 曜子・加藤 和代				
授業方法	実習	単位・必選	1・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

養護教諭の養成課程において、看護領域の知識・技術の習得は、その専門性の柱として極めて重要です。続く看護学（看護学Ⅱ・Ⅲ・Ⅳそして臨床看護実習）の基礎実習として、臨床場面における観察実習をおこないます。受講者は、実習を通して、生命と向き合う医療現場に触れ、医療スタッフの専門職としての仕事のやり方や看護の役割を学び取ることができます。養護教諭を目指す学生として実習に臨むことの意味を把握し、普遍的な看護の理念が実践場面にどのように生かされているのか、また、患者―看護師のそれぞれの役割は何かなど、意欲的に観察し、学び取る姿勢が求められます。実習を機会に自らの資質・態度を省みるとともに、今後学ぶべき課題を明確にさせることを望みます。

臨床基礎実習は、夏季休業期間中に配当病院にて、1週間おこないます。

《授業の到達目標》

- 事前指導・事後指導(報告会)を通して、実習の目的や実習内容、実習成果などの報告ができる。
- 対象者に対する理解を深め、傷病者の心身の状態を観察し、報告することができる。
- 高度医療などにより変わりつつある医療のあり方やそこに働く専門職の職務内容を理解し、説明することができる。

《テキスト》

本学作成の「実習記録のノート」

配布プリント類

《参考文献》

- 『最新看護学』 中桐・天野・岡田 編著(東山書房)
- 『養護教諭のための看護学』 藤井寿美子、山口昭子、佐藤紀久榮編 (大修館書店)
- その他、適宜紹介する

《成績評価の方法》

臨地実習及び学内・学外(実習病院)の事前指導と事後指導(実習発表等)の欠席は、原則として認められない。実習ノートの記録(40%)、実習内容について臨床指導者と本学担当者の総合評価(20%)、事前・事後の活動状況(実習発表を含む)(40%)とし、100点満点で、60点以上を合格とする。

《授業時間外学習》

実習に向けて、文献等での知識の確認と定着に努める。
 実習室の空き時間を利用して、基礎技術の習得に努める。
 実習期間中の生活時間を想定し、規則正しい生活習慣を確立しておく。

《備考》

目的意識を持ち、主体的に授業に臨むこと。実習期間だけが実習ではなく、事前から事後までのすべてを含んで、実習であることを確認しておきたい。日程等は掲示にて連絡します。
 『看護学Ⅰ』(2年Ⅰ期)を履修し、8割以上出席していることとし、臨地実習の適否は、学科内委員会が判定します。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション、 臨床(臨地)実習の意義・必要性について
第2週	実習の目的と目標 実習中の注意事項
第3週	直前指導 予防衣や名札の配布など
第4週	病院における臨地実習(1日目)
第5週	病院における臨地実習(2日目)
第6週	病院における臨地実習(3日目)
第7週	病院における臨地実習(4日目)
第8週	病院における臨地実習(5日目)
第9週	事後報告会
第10週	
第11週	
第12週	
第13週	
第14週	
第15週	

《教職に関する科目》

科目名	教育課程論				
担当者名	廣岡 義之				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

現在の小学校・中学校・高等学校における教育課程の枠組みと内容を理解することが、この講義の眼目である。そのために以下の項目を中心に論ずる。

- (1) わが国の教育改革の歴史と教育課程の変遷について
- (2) 教育課程の意義と目的について
- (3) 教育課程及び学習指導要領編成の内容について
- (4) 道徳教育及び特別活動の内容について

《授業の到達目標》

教育課程とは何か、教育課程はどのように編成されるか、編成された教育課程はどのような形態を持つか、わが国の教育課程は歴史的にどのように変遷してきたか、現在の小・中・高校の教育課程はどのような特徴をもつか等について、主体的に考えることができる。

《テキスト》

1. 『教育課程入門(仮)』 広岡 義之編著 (ミネルヴァ書房) 2010年

《参考文献》

必要があれば講義の際に紹介する。

《成績評価の方法》

講義中の発表・態度 50%、講義中の小テスト 50%。
授業欠席回数が授業実施回数の 1/3 以上の者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

教科書等の指定箇所を熟読して、内容を把握しておくこと。

《備考》

この講義は、将来教職に就きたい人、教員免許状を取得したい人、あるいは教育問題に強い関心を持つ人達のためにあるので、その人達の学習の妨げになる「私語」や「遅刻」はしないこと。また特に自ら進んで講義内容に関心を持ち、関連事項を積極的に勉強する姿勢が必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	本講義のオリエンテーション
第 2 週	教育課程の意義
第 3 週	学習指導要領の意義と内容の歴史的変遷 (1)
第 4 週	学習指導要領の意義と内容の歴史的変遷 (2)
第 5 週	教育課程編成の教育目的・目標および社会的基盤
第 6 週	教育課程の諸形態について
第 7 週	教育課程の編成 (幼稚園)
第 8 週	教育課程の編成 (小学校)
第 9 週	教育課程の編成 (中学校)
第 10 週	教育課程の編成 (高等学校)
第 11 週	道徳教育の内容について
第 12 週	教育課程における特別活動の意義・役割・位置づけ
第 13 週	総合的な学習の時間の取り扱いについて
第 14 週	教育課程実施上の配慮事項について
第 15 週	新しい学習指導要領の変更点について

《教職に関する科目》

科目名	保健・保健体育科教育法Ⅰ（保健教育内容研究）				
担当者名	荒木 勉				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅰ期

《授業のねらい及び概要》

中学校ならびに高等学校における保健科教育の目標、内容、方法、評価についての基本的事項とそれらの関連を明確にしなが、授業計画の手順を踏まえて学習内容を指定するに至る過程を理解でき、また試行できるようになる。

そのため、中学校ならびに高等学校の保険化教育について、学習指導要領の検討、保健教科書における内容の分析・考察を通して理解を深め、保健授業の内容指定に至る過程を繰り返し確認する。

《授業の到達目標》

授業計画に則った、学習内容の指定について理解を深め、試行できる。

《テキスト》

教科書：中学校教科書「新・中学校保健体育（706）」学習研究社、高等学校教科書「現代保健体育（006）」大修館書店

《参考文献》

《成績評価の方法》

授業への出席、小課題への取り組み、テストについて、4：2：4の割合で評価する。

《授業時間外学習》

授業で理解した通りに、実際にできるかどうか確かめる。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	保健科教育の歴史と今日的課題
第 2 週	授業計画の過程を踏まえた学習内容を指定するための作業手順
第 3 週	保健科教育の目標論と内容論
第 4 週	保健科教育内容論：学習指導要領にみる内容の変遷（1）
第 5 週	保健科教育内容論：学習指導要領にみる内容の変遷（2）
第 6 週	保健科教育内容論：中学校教科書にみる学習内容（1）
第 7 週	保健科教育内容論：中学校教科書にみる学習内容（2）
第 8 週	保健科教育内容論：中学校教科書にみる学習内容（3）
第 9 週	保健科教育内容論：中学校教科書にみる学習内容（4）
第 10 週	保健科教育内容論：高校教科書にみる学習内容（1）
第 11 週	保健科教育内容論：高校教科書にみる学習内容（2）
第 12 週	保健科教育内容論：高校教科書にみる学習内容（3）
第 13 週	保健科教育内容論：高校教科書にみる学習内容（4）
第 14 週	保健科教育内容論：高校教科書にみる学習内容（5）
第 15 週	まとめ

《教職に関する科目》

科目名	保健科教育法Ⅰ（保健科教育教材研究）				
担当者名	荒木 勉				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

中学校ならびに高等学校の保健教科書教材を中心に、教材の持つ意味を健康科学の面と生徒のニーズの両面から考察でき、教材開発できるようにすることを目標とする。

そのため、中学校ならびに高等学校の保健教科書教材の分析を通して、教材の持つ意味を検討しながら、保険授業を展開するうえでの教材解釈、教材開発を試みる。

《授業の到達目標》

健康科学による知見の中から、生徒のニーズに基づいた学習内容の措定、それを踏まえて教材開発できる。

《テキスト》

教科書：中学校教科書「新・中学校保健体育（705）」学習研究社、高等学校教科書「現代保健体育（006）」大修館書店

《参考文献》**《成績評価の方法》**

授業への出席、小課題への取り組み、最終レポートを4：2：4の割合で評価する。

《授業時間外学習》

授業で理解したとおりに、実際にできるかどうか確かめる。

《備考》**《授業計画》**

週	授 業 計 画
第1週	健康の捉え方と保健学習・保健教材
第2週	保健学習を進めるうえでの教材の意味・機能
第3週	体の発育発達にかかわる保健教材
第4週	心の健康にかかわる保健教材（1）
第5週	心の健康にかかわる保健教材（2）
第6週	喫煙・飲酒・薬物乱用と健康にかかわる保健教材
第7週	喫煙・飲酒・薬物乱用の社会的要因にかかわる保健教材
第8週	医療制度と健康にかかわる保健教材
第9週	医薬品と健康にかかわる保健教材
第10週	生涯の健康にかかわる保健教材（1）
第11週	生涯の健康にかかわる保健教材（2）
第12週	健康と環境にかかわる保健教材（1）
第13週	健康と環境にかかわる保健教材（2）
第14週	健康と環境にかかわる保健教材（3）
第15週	まとめ

《教職に関する科目》

科目名	保健体育科教育法Ⅰ（保健体育科教育研究）				
担当者名	後藤 幸弘				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

本授業では、学習指導要領を深く理解するとともに保健体育授業担当者としてふさわしい、基礎的・基本的な資質や能力を身につけることを目標とする。多くの人は、スポーツを享受しながらも、スポーツそれ自体について考えてみることはあまりしない。スポーツは楽しければそれでよいのだという「一種の思考停止・判断停止」に支配されている傾向がある。欧米では、スポーツマンは、クレバーで実行力のある人の代名詞である。本授業では、この状態から脱却し、「身体運動文化」の奥深さに触れ、それを教育に生かせるようにしようとするもので、「的確な判断に基づく行動力の育成」のできる先生になる資質を習得することを目標とする。

《授業の到達目標》

学校体育及び保健体育科成立の文化基盤である「身体運動文化」への興味・関心、認識・理解を深め、専門知識の習得及び中学校保健体育科の授業担当者として求められる資質や実践的能力を身に付ける。具体的には、教育実習に向けて指導案が書けるようになることを目標とする。

《テキスト》

文部科学省「中学校学習指導要領解説（保健体育編）」
 文部科学省「高等学校学習指導要領解説（保健体育編）」
 教科書・実技書（高校のとき使用のもので可）

《参考文献》

竹田清彦 他編、「体育科教育学の探求」大修館書店
 高橋健夫 他編、「体育科教育学入門」大修館書店
 日本体育学会（監修）「最新スポーツ科学事典」平凡社

《成績評価の方法》

- ・出席を重視します。欠席が開講時数の1/4を超えた場合は欠格対象者となる。
- ・出席数（授業における意欲・態度を含む）（20%）、レポート（20%）及び試験（60%）を総合的に評価する。

《授業時間外学習》

- ・各自で復習をする。

《備考》

- ・講義資料は適宜配布する。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション・保健体育とは（払拭して欲しい5つの誤解）
第 2 週	保健体育科の成立基盤と授業の構造
第 3 週	保健体育授業の目標とその変遷
第 4 週	学習指導要領の変化と新学習指導要領について
第 5 週	運動領域の考え方と教育内容について
第 6 週	教育内容の措定の方法（陸上競技の短距離走を例に、速度曲線から）
第 7 週	教育内容の措定の方法（リレーを例に）
第 8 週	水泳の学習指導
第 9 週	武道の学習指導
第 10 週	運動が上手にできる子を育てる学習過程を支える要件（指導技術）
第 11 週	学習指導案作成の留意点（レポート：指導案の作成）
第 12 週	学習指導法について
第 13 週	教師の4大教授行動、望ましい心情そだてる4条件
第 14 週	まとめ
第 15 週	まとめ

《教職に関する科目》

科目名	道徳教育論				
担当者名	廣岡 義之				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

道徳教育の教訓的な形式主義を一度、揺さぶることにより、実存的な実践論として、道徳教育を捉えてみたい。こうした視点のもとで、受講生は道徳指導案の作成および模擬授業が義務づけられる。教員と受講生は、発表者に、様々な角度からコメントを加えることにより、発表者は模擬授業での自らの不足する部分を認識できる。道徳教育の理論と実践について深く理解する。実際に道徳の指導案を作成し、授業中に模擬授業を行い、教育実習においても十分対応できるようになる。道徳的な生徒との関係について配慮できるようにする。

《授業の到達目標》

教育の基礎・基本である道徳的内容の理解および実際の道徳の時間の指導法の実践力をつけることが、この授業の目標である。つまり、道徳の概念や道徳内容を学ぶことを通じて、今日の道徳教育の課題や問題について考え、実践することができるようにすることを目指す。

《テキスト》

- 『新しい道徳教育』 広岡 義之編著 (ミネルヴァ書房) 2009年

《参考文献》

授業中に紹介する。

《成績評価の方法》

講義中の発表・態度 50%、講義中の小試験 50%。
授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

教科書等の指定箇所を熟読し、内容を把握しておくこと。

《備考》

この講義は、将来教職に就きたい人、教員免許状を取得したい人、あるいは教育問題に強い関心を持つ人達のためにあるので、その人達の学習の妨げになる「私語」や「遅刻」はしないこと。また特に自ら進んで講義内容に関心を持ち、関連事項を積極的に勉強する姿勢が必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	本講義のオリエンテーション
第 2 週	新学習指導要領「道徳」の改訂重要事項
第 3 週	道徳教育の基本的なあり方
第 4 週	道徳教育の目標
第 5 週	道徳教育の全体計画と年間指導計画
第 6 週	道徳教育の内容と内容項目
第 7 週	道徳の時間の特性と指導方法、道徳教育の評価
第 8 週	道徳教育の指導案の内容
第 9 週	子どもの道徳性に伴う大人の道徳観
第 10 週	多様な資料と活用の創意工夫
第 11 週	子どもの心を開く道徳資料の検討
第 12 週	家庭・地域社会・学校における道徳教育
第 13 週	子どもの心を開く資料を使用しての授業展開例
第 14 週	小学校道徳の指導案の実際
第 15 週	中学校道徳の指導案の実際

《教職に関する科目》

科目名	特別活動論				
担当者名	上寺 常和				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

現在の小学校・中学校・高等学校における特別活動の枠組みと内容を理解することが、この講義のねらいである。そのために以下の項目を中心に論ずる。

- (1) わが国の特別活動の歴史と変遷について
- (2) 特別活動の意義と目的について
- (3) 学習指導要領における特別活動の位置づけについて
- (4) 道徳教育及び特別活動の内容について

《授業の到達目標》

特別活動とは何か、特別活動はどのように構成されるか、わが国の特別活動は歴史的にどのように変遷してきたか、現在の小・中・高校の特別活動はどのような特徴をもつか等について、基本的な理解ができるようになることを目指す。

《テキスト》

『新しい特別活動論』 広岡義之編著（創言社）2009年

《参考文献》

小学校・中学校・高等学校学習指導要領解説 特別活動編
その他、必要に応じて講義の際に適宜紹介する。

《成績評価の方法》

到達目標にかかわる出題範囲の定期試験（80%）、指定された教材を読む等の受講態度（20%）により評価する。
授業欠席回数が授業実施回数の1/3以上のときは、試験の受験資格を失う。

《授業時間外学習》

- ・受講前に、教材の指定された箇所を読んでおくこと。
- ・講義中に解説した内容を一旦ノートに記した後、重要と思われる内容を教科書の余白に転記する、あるいは付箋に記して教科書に張り付けるなどし、同時に教科書と読み合わせて講義内容を復習する。

《備考》

この講義は、将来教職に就きたい人、教員免許状を取得したい人、あるいは教育問題に強い関心を持つ人達のためにあるので、その人達の学習の妨げになる「私語」や「遅刻」はしないこと。また特に自ら進んで講義内容に関心を持ち、関連事項を積極的に勉強する姿勢が必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	本講義のオリエンテーション
第 2 週	特別活動の意義
第 3 週	特別活動の歴史
第 4 週	特別活動の目標
第 5 週	学級会活動について
第 6 週	ホームルーム活動について
第 7 週	児童会活動について
第 8 週	生徒会活動について
第 9 週	学校行事について
第 10 週	クラブ活動と部活動
第 11 週	特別活動と教科指導の関連
第 12 週	道徳教育の内容について
第 13 週	特別活動の今日的課題と役割
第 14 週	「総合的な学習の時間」と特別活動の関係・区分
第 15 週	本講義のまとめと重要個所の復習

《教職に関する科目》

科目名	教育方法・技術論				
担当者名	平井 尊士				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

授業全体を通して、授業計画に基づき、幅広く講義と演習の繰り返しを実施します。特に現代人の社会と心についても様々な視点（例えば、家族・メディア・教育・文化など）からも考察する

《授業の到達目標》

各教職科目の教育目標、内容、指導方法について、特に各専門教科の学習目標や学習内容にポイントを置き、教育方法論、教育工学全般の知識、授業設計の方法、評価方法、それらを取り巻く環境等について学習する。特に、演習（模擬授業も含む）を通して、質の高い授業を実施するための、必要な教材研究等についても理解・習得し、教育現場に出ても新任教師として自立できることを到達目標とする。

《テキスト》

佐藤典子編『現代人の社会とこころ：家族・メディア教育・文化』弘文堂（2009）

《参考文献》

適宜指示し使用します。

《成績評価の方法》

【評価方法】毎回、各授業後に課すレポートや課題

【評価の割合】毎回、各授業後に課すレポートや課題（100点）

授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えません

《授業時間外学習》

毎回配布する資料は学内システム（新統合 HUMANS）に電子ファイルとしておいておきます。毎回出す課題をするために必ず熟読して取り組むこと。

《備考》

テキストは必ず熟読すること。また必要に応じ、学内新統合 HUMANS システムおよび e-Learning システムを積極的に活用します。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	1. 教育方法論の位置づけ 情報化社会における教師教育では、理念に留まらない「教育方法論」が展開しなければならない。新学習指導要領の実施に伴い、「総合的な学習」「情報」「国際化」等の教育領域に応じて教育工学的アプローチがどのように必要か併せ「教育方法論」の位置づけを概観する。さらに現代人を取り巻く環境についてもしっかりと考える。特に「私」とは誰かなどについても事例を踏まえながら考える
第 2 週	2. 「教育方法」研究の歴史的背景について 諸外国の主な代表的な教育学者（ソクラテス・コメニウス、フレーベル・ペスタロッチ、デューイ・デュール、スキナー・ブルーナー等）の「教育方法」研究の歴史と日本における「教育方法」研究の歴史的背景を考察する。
第 3 週	3. 「教育工学」の概要について 教育工学の意義、歴史、研究領域、研究法について論じた後、「録画授業」を視聴する。
第 4 週	4. 教育工学と教師教育について 教育課程編成の基本を説明し、伝統的なカリキュラム構造を持つ教科学習と、柔らかな構造の学習活動との指導と評価の違いについて「教育課程（教育内容）」と「教育方法」の検討を行う。
第 5 週	5. 授業実践方法の考察について 授業研究の方法論、具体的な授業研究の例をあげながら、行動科学的/認知科学的、定量的/定性的、サーベイ/ケース・スタディ、仮説検証/仮説生成の4つの観点から、授業方法を検討する。
第 6 週	6. 授業設計の方法 現在、授業設計から学習支援へと授業設計の考え方が変容している。そこで実際の「学習指導案」を例に挙げ、その中心である学習方略の内容について学習する。
第 7 週	7. 授業におけるコミュニケーションについて：人間関係およびコミュニケーション 「発問」「指示」は重要な教師の行動であるが、その方法に注目したとき、特に「発問」の方略が学習者の応答に対処するための「処置」と密接に関係していることがわかる。授業での「発問」の機能と役割を学ぶ。特に人間関係って何？・コミュニケーションの多様性について学問上からも考究する
第 8 週	8. 授業研究および実践授業 わが国や諸外国の総合的な学習について、その歴史的変遷や背景にある理論を説明し、「総合的な学習の時間」の授業作りの視点と方法やこれに向けた小・中学校の先導的事例を紹介する。その後、学習指導案の作成の演習を行う。
第 9 週	9. 授業研究および評価 「8.」で演習を行った内容の解説を行う。さらに授業者および学習者の観察分析評価の方法と事業改善について、総合的授業評価法としての「生徒による授業評価」や、「形成的授業評価法」による授業評価の実践とその成果を紹介しながら、評価の意義と方法について解説する。
第 10 週	10. 学校教育におけるメディア環境 国の施策に基づき、コンピュータや情報通信ネットワークに代表される多種多様な情報機器が学校に導入されつつある。こうしたメディア環境を活用する授業の展開と課題について考察を行う。
第 11 週	11. 情報教育カリキュラムの開発と授業実践 実際の情報教育実践や理論を取り上げ、情報活用の実践力の育成としての授業の目標と実践上の工夫について、「ITを用いた学習指導方法の工夫改善」を目的としたシステムティックな単元設計、学習環境設計、先行経験との関係について考察を行う。
第 12 週	12. 教育情報データベースの開発と利用 教師のマルチメディア教材の作成（方法）や生徒が利用し調べ学習等に利用できる主な映像情報データベース（各種ポータルサイトや地域映像データベース）や学校放送番組と、その利用法について考察を行う。
第 13 週	13. 遠隔共同交流学习と学習環境について テレビ会議システム及びSCSを用いて遠隔地の小中学校が結び、総合的学習課題に共同して取り組む事業が多い。そこで開かれた学習環境における学習の特質とその授業構成と学習指導の方略について、事例をもとに解説し、現状と課題について考察を行う。
第 14 週	14. まとめ：P-D-S サイクルにおける評価を用いた演習 授業全体を通して、「教育工学」の内容を基本的に理解させ、それが単なる机上論に終わらず実践のレベルで自作教材を作成させる。
第 15 週	15. 最終まとめとレポート：職業生活と心や異文化を知ることで育む人間力などについて、しっかりと考察する。

《教職に関する科目》

科目名	生徒指導論（進路指導を含む）				
担当者名	廣岡 義之				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・1期

《授業のねらい及び概要》

「生きる力」（確かな学力・豊かな人間性・健康と体力）を積極的に推進するには、生徒指導、進路指導、いわゆるガイダンス・カンセリングが必要不可欠である。本講義では、このような生徒の全人的な育成を主眼とした生徒指導と進路指導を目指し、それぞれの事項についての深い理解ができることをねらいとする。

《授業の到達目標》

学校教育における生徒指導と進路指導の意義と役割を明らかにする。生徒指導と進路指導とは生徒が自己実現を図るためには車の両輪のように必須の内容であり、学校教育の上で重要な位置を占めるものである。本講義では現代における生徒指導及び進路指導の在り方の確立を目指す。

《テキスト》

『新しい生徒指導・進路指導』加澤恒雄・広岡義之編著（ミネルヴァ書房）2007年

《参考文献》

必要に応じて講義の際に適宜紹介する。

《成績評価の方法》

講義中の発表・態度 50%、講義中の小試験 50%。
授業欠席回数が授業実施回数の 1/3 以上の者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

教科書等の指定箇所を熟読し、内容を把握しておくこと。

《備考》

この講義は、将来教職に就きたい人、教員免許状を取得したい人、あるいは教育問題に強い関心を持つ人達のためにあるので、その人達の学習の妨げになる「私語」や「遅刻」はしないこと。また特に自ら進んで講義内容に関心を持ち、関連事項を積極的に勉強する姿勢が必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	本講義のオリエンテーション
第 2 週	生徒指導の教育的意義と課題
第 3 週	生徒指導の原理と理論
第 4 週	児童・生徒理解の進め方
第 5 週	学級経営の進め方
第 6 週	教科指導と生徒指導
第 7 週	生徒指導実践における教師像と研修
第 8 週	学校の生徒指導体制と家庭・地域との連携
第 9 週	進路指導の意義と課題
第 10 週	自己の発見と自我同一性の確立
第 11 週	就労観・職業観の形成と変容
第 12 週	進路指導実践の学校体制
第 13 週	学校教育における進路指導の実践展開（1）
第 14 週	学校教育における進路指導の実践展開（2）
第 15 週	本講義のまとめと重要箇所の復習

平成 20 年度 (2008 年度) 入学者

卒業要件単位数

科目区分		卒業必要単位	内必修単位と科目数	
基礎・教養科目		30 単位	10 単位	5 科目
専門教育科目	専門基礎科目群	8 単位	8 単位	4 科目
	I 群（運動・体育に関連する科目）	6 単位	—	—
	II 群（養護・保健に関連する科目）	6 単位	—	—
	卒業研究	6 単位	6 単位	2 科目
その他上記の科目区分のいずれかから		68 単位	—	—
合 計		124 単位	24 単位	11 科目

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成20年度（2008年度）入学者対象

() は兼任、[] は兼任講師

授業科目区分	授業科目の名称	授業方法	単位数		運動 実践 指導者	教員免許関係			学年配当 (数字は週当たり授業時間)								平成22年度の 担当者	
			必修	選択		養護	保健 体育	保健	1年		2年		3年		4年			
									I	II	I	II	I	II	I	II		
専 門 基 礎 育 科 目	基礎ゼミ I	演習	2						2									
	基礎ゼミ II	演習	2							2								
	健康科学序論	講義	2								2							
	健康科学	講義	2		◇						2							
	情報科学	講義	2								2							
	基礎生物学	講義	2								2							
	解剖学	講義	2		◇	○		□	2									
	生理学	講義	2			○	△	□	2									
	微生物学	講義	2			○		□				2						
	生化学 (分子生物学を含む)	講義	2									2						
	分子生物学演習	演習	2										2					
	栄養学	講義	2			○		□	2									
	食品学	講義	2			○			2									
	栄養指導論	講義	2									2						
	衛生学	講義	2			○	△	□	2									
	公衆衛生学	講義	2					△	□				2					
	医学概論	講義	2			○							2				[南川 康博]	
	ライフステージと健康	講義	2										2				不開講	
	心理学研究法	講義	2									2						
	心理測定法	演習	2									2						
	心理学基礎実験	実験	2											4			(北島 律之)	
	心理学応用実験	実験	2												4			
	認知心理学	講義	2									2						
	健康心理学	講義	2		◇							2						
	臨床健康心理学演習	演習	2										2					
	生涯発達心理学	講義	2											2			森田 義宏	
	臨床心理学 (含カウンセリング)	講義	2											2			(琴浦 志津)	
	教育心理学	講義	2			○	△	□					2					
	発達心理学	講義	2					▲	■			2						
	ストレス科学論	講義	2												2		[古賀 愛人]	
	人間関係論	講義	2												2		森田 義宏	
	教育特論 I	講義	2												2		河野 稔	
教育特論 II	講義	2												2		平本 幸治		
教育特論 III	講義	2												2				

◇は健康運動実践指導者養成科目

○は養護教諭免許必修科目、●は養護教諭免許選択科目

△は保健体育免許必修科目、▲は保健体育免許選択科目

□は保健免許必修科目、■は保健免許選択科目

※ 「スポーツ実践 I」、「スポーツ実践 II」、「健康・体力づくり実践 I」、「健康・体力づくり実践 II」、
「専門施設実習」は、定期授業の他に学外実習を行う。

※ 「レクリエーション (野外活動を含む)」は、4時間のうち3時間を学外実習にあてる。

※ 健康運動実践指導者養成講座科目として、表中の科目以外に集中講義として「運動障害と予防」と「救急処置」を2年
「運動の基礎」の中で「発育・発達と老化」を履修する。

※ 認定心理士養成科目として、表中の科目以外に3年Ⅱ期に「行動分析論」と「社会心理学」を履修する。

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成20年度（2008年度）入学者対象

()は兼任、[]は兼任講師

授業科目区分	授業科目の名称	授業方法	単位数	運動実践指導者	教員免許関係			学年配当(数字は週当たり授業時間)								平成22年度の担当			
					養護	保健体育	保健	1年		2年		3年		4年					
								I	II	I	II	I	II	I	II				
専門に 関連する 科目 ()	体育原理	講義	2			△		2											
	運動の基礎	講義	2	◇		△			2										
	運動生理学	講義	2	◇		△	□			2									
	運動生理学演習	演習	2							2									
	運動栄養学	講義	2	◇		△				2									
	子ども運動学	講義	2			△		2											
	子ども運動学演習	演習	2			▲			2										
	スポーツ医学概論	講義	2							2									
	スポーツ心理学	講義	2			▲				2									
	障害者スポーツ論	講義	2												2				
	スポーツ史	講義	2											2				徳田 泰伸	
	スポーツ科学Ⅰ	演習	2										2					矢野 琢也	
	スポーツ科学Ⅱ	演習	2											2				矢野 琢也	
	トレーニング科学Ⅰ	演習	2						2										
	トレーニング科学Ⅱ	演習	2							2									
	体力測定と評価	講義	2	◇		▲		2											
	スポーツ実践Ⅰ	演習	3				△		3										
	スポーツ実践Ⅱ	演習	3				△			3									
	健康・体力づくり実践Ⅰ	演習	3				△				3								
	健康・体力づくり実践Ⅱ	演習	3	◇		▲					3								
	スポーツ指導法Ⅰ	演習	2				△						2					三宅 一郎・榎本 つぐみ	
	スポーツ指導法Ⅱ	演習	2				△							2				三宅 一郎・榎本 つぐみ	
	健康・体力づくり指導法Ⅰ	演習	2	◇										2				木下 幸文	
	健康・体力づくり指導法Ⅱ	演習	2	◇											2			木下 幸文	
	運動処方論	講義	2											2				矢野 琢也	
	運動処方演習	演習	2												2			榎本 つぐみ	
	専門施設実習	実習	2											④	④	④	④	徳田 泰伸・河野 稔	
	レクリエーション（野外活動を含む）	実習	2				△							4				榎本 つぐみ	
	専門に 関連する 科目 ()	Ⅱ 病理学概論	講義	2									2						
		薬理学	講義	2			○							2					[仮家 公夫]
		養護概説Ⅰ	講義	2			○			2									
		養護概説Ⅱ	講義	2			●				2								
		学校保健Ⅰ（小児保健・学校安全を含む）	講義	2			●	△	□	2									
		学校保健Ⅱ	講義	2			○	△	□			2							
		学校保健Ⅲ	講義	2			○	△	□			2							
		精神保健	講義	2			○	△	□			2							
		健康行動論	講義	2				△	□				2						
		健康統計学	講義	2				●	■					2					河野 稔
		健康相談活動の理論と実践	講義	2			○								2				大平 曜子
		看護学概論	講義	2			○				2								
		看護学Ⅰ	演習	3			○					3							
		看護学Ⅱ（症状看護）	講義	2			○						2						
		看護学Ⅲ（疾患看護・介護を含む）	演習	3			○							3					(菅野)・(若井)・(井上廣代)
		看護学Ⅳ（ケーススタディ・治療別看護）	演習	2			○								2				大平 曜子・加藤 和代
臨床基礎実習		実習	1			○					2								
臨床看護実習		実習	2			○									4			大平 曜子・加藤 和代	
救急看護（救急処置を含む）		演習	3			○	△	□						3				(加藤 知可子)	
卒業研究		卒業研究Ⅰ	演習	3													3		
	卒業研究Ⅱ	演習	3														3		

※ 学年配当欄において○囲みで表示している科目については、○囲みで表示されている学年・学期のいずれかにおいて登録、履修できる科目である。

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成20年度（2008年度）入学者対象

（ ）は兼任、[]は兼任講師

授業科目の区分	授業科目の名称	授業方法	単位数		運動実践指導者	教員免許関係			学年配当(数字は週当たり授業時間)								平成22年度の担当者	
						養護	保健体育	保健	1年		2年		3年		4年			
									I	II	I	II	I	II	I	II		
教職に関する科目	教職概論	講義	2		○	△	□	2										
	教育原理	講義	2		○	△	□	2										
	教育史	講義	2		●	▲	■						2					(岡本 洋之)
	教育制度論	講義	2		○	△	□		2									
	教育課程論	講義	2		○	△	□			2								
	保健・保健体育科教育法Ⅰ(保健教育内容研究)	講義	2			△	□			2								
	保健・保健体育科教育法Ⅱ(保健教育法研究)	講義	2			△	□				2							[植田 誠治]
	保健科教育法Ⅰ(保健科教育教材研究)	講義	2				□				2							
	保健科教育法Ⅱ(保健科教育法演習)	講義	2				□						2					[植田 誠治]
	保健体育科教育法Ⅰ(保健体育科教育研究)	講義	2			△					2							
	保健体育科教育法Ⅱ(保健体育科教育法研究)	講義	2			△							2					[後藤 幸弘]
	道徳教育論	講義	2		○	△	□			2								
	特別活動論	講義	2		○	△	□				2							
	教育方法・技術論	講義	2		○	△	□				2							
	教育方法論	講義	2		○									2				(岡本 洋之)
	生徒指導論(進路指導を含む)	講義	2		○	△	□			2								
	教育相談(カウンセリングを含む)	講義	2		○	△	□	2										
	総合演習	演習	2		○	△	□						2					廣岡 義之・木下 幸文
中学校教育実習(事前事後指導を含む)	実習	5												5			三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文	
高等学校教育実習(事前事後指導を含む)	実習	3			△	□								3			三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文	
養護実習(事前事後指導を含む)	実習	5		○										5			大平 曜子・加藤 和代	

◇は健康運動実践指導者養成科目

○は養護教諭免許必修科目、●は養護教諭免許選択科目

△は保健体育免許必修科目、▲は保健体育免許選択科目

□は保健免許必修科目、■は保健免許選択科目

※ 教職に関する科目を修得しても、卒業要件単位には含まれない。

※ 教育職員免許状を取得するためには、上記科目のほか、教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目として、日本国憲法(2単位)、体育(2単位)、外国語コミュニケーション(2単位)、情報機器の操作(2単位)について、指定の科目を修得すること。

《専門基礎科目群》

科目名	医学概論				
担当者名	南川 康博				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

医学は臨床医学、基礎医学、社会医学に分類される。本講義では社会医学の中の予防医学、公衆衛生学について学んでゆく。疾病予防における保健統計の意義について理解し、その実践的活用を学習する。癌、高血圧や糖尿病などの生活習慣病の予防・健康教育の考え方を習得する。さらに、食中毒や感染症の予防・健康教育や職場における健康管理についても学ぶ。

《授業の到達目標》

感染症・生活習慣病・職業病・環境汚染病といった各種の疾患について学習し、各疾患と社会との関係について理解を深める。

《テキスト》

21世紀の予防医学・公衆衛生 町田 一彦・岩井 秀明 (杏林書院) 2008

《参考文献》

実践予防医学 高島 豊 (診断と治療社) 2003

New 予防医学・公衆衛生学 岸 玲子 (南江堂) 2003

《成績評価の方法》

筆記試験 50% 平常評価 50% (レポート、出席、受講態度など)

《授業時間外学習》

次回の授業範囲を予習し、専門用語の意味等をノートに整理して理解しておくこと。

《備考》

予防医学は健康をマネジメントする意味において、福祉・医療・保健に従事する人々に限らず全ての人に必要な知識である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	公衆衛生と予防医学について 1) 人の健康と科学 2) 予防レベルと保健、医療、福祉分野 3) 病気の予防と健康増進のために
第 2 週	疾病のまん延とその克服の歴史 1) 人と病気の克服 2) 20世紀の医療と公衆衛生の発達 3) 日本の予防医学の発展
第 3 週	健康科学の研究法 1) 疫学の定義と特殊性 2) 疫学方法論 3) 健康科学と統計手技 4) 新しい疫学研究の流れ
第 4 週	人口統計と衛生統計 1) 健康指標 2) 人口静態統計 3) 人口動態統計 4) 生命表 5) 疾病統計と疾病分類
第 5 週	環境と健康 1) 生活環境と健康 2) 気象と健康 3) 公害と公害防止対策 4) 地球環境と私たちの生活・健康 5) 環境影響評価
第 6 週	私たちの健康を守るために 1) 各臓器の特徴と疾病 2) 健康管理 3) ストレスと精神衛生 4) 医原性疾患・難病
第 7 週	感染症と生体防御 1) 病原微生物と感染症 2) 病原微生物の侵入と生体反応 3) 感染拡大の防止
第 8 週	感染症と生体防御 4) 有用な微生物と食品衛生 5) 日本における感染症 6) 世界の感染症
第 9 週	生活習慣病の予防と健康増進 1) 栄養とは 2) 嗜好品 3) 運動とスポーツの効用 4) メタボリックシンドロームと特定保健指導 5) ヘルスプロモーション
第 10 週	ライフサイクルと人生：生きがいある人生を求めて 1) 出産と健やかな成長 2) 新生児・乳児期および幼児期 3) 学童期・思春期 4) 青年期
第 11 週	ライフサイクルと人生：生きがいある人生を求めて 5) 中・熟年期 6) 高齢期 7) 介護保険制度化における高齢者介護 8) 少子高齢化社会の高齢者
第 12 週	職業と健康 1) 産業保健 2) 主な職業性疾病の成因とその対策
第 13 週	職業と健康 3) 現在の産業保健の問題点と健康増進活動 4) 労働法規
第 14 週	会と健康 1) 社会保障の変遷 2) 医療保険と介護保険 3) 21世紀の健康政策 4) 衛生行政と法律
第 15 週	医学概論の総括

《専門基礎科目群》

科目名	心理学基礎実験				
担当者名	北島 律之				
授業方法	実験	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

心理学の代表的な研究方法である実験法を、心理学の各領域における基礎的な実験を実際に行うことによって体験的に学びます。また、「実験目的」「実験方法」「実験結果」「考察」をレポートにまとめ、さらにそれを発表することで、心理学の科学的な考え方を体系的に身につけます。本科目での学びは、様々な領域や場面において、実際にデータを取得したり報告書を作成したりすることに役立ちます。

《授業の到達目標》

- 心理学の代表的な研究方法である実験法の特徴について、どのようなものか説明することができる。
- 心理学の各領域における基礎的な実験について実際に行うことができる。
- 実験結果を適切なやり方でまとめることができる。
- 結果から自分の考えを述べるることができる。

《テキスト》

『心理学実験法・レポートの書き方』 西口利文・松浦均(編) ナカニシヤ出版

《参考文献》

『心理学の研究法 実験法・測定法・統計法 [改訂版]』 加藤司 北樹出版 <授業「心理測定法」のテキスト>

《成績評価の方法》

レポート 80% 受講態度 10% 発表 10%

《授業時間外学習》

授業時間中に完成させることができなかったレポートを仕上げてください。レポートは必ず決められた日時までにメールに添付して送信してください。送信先のメールアドレスは授業中に示します。レポートは添削し、次回の授業の前半で講評を行います。

《備考》

- ・本科目を受講するためには、前もって「心理学」「認知心理学」「心理測定法」を修得しておく必要があります。
- ・実験は少人数のグループで行うものであるため、欠席や遅刻はしないようにしてください。事情がある場合は必ず担当教員に連絡してください。
- ・すべての実験に参加しレポートを提出することが、単位修得のための最低条件です。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	「ガイダンス」 実験に関する基本の説明。心理測定法の復習
第 2 週	「実験をしてみよう1(ミューラー・リヤー錯視) <知覚心理学> 実験の説明, 実験
第 3 週	「実験をしてみよう1(ミューラー・リヤー錯視) <知覚心理学> 実験のつづき, 基本的なレポートの書き方説明, レポートの作成
第 4 週	「実験をしてみよう2(触二点閾) <感覚心理学> 実験の説明, 実験
第 5 週	「実験をしてみよう2(触二点閾) <感覚心理学> 実験のつづき, レポートの作成
第 6 週	「実験レポートの書き方」 より本格的なレポートの書き方の説明
第 7 週	「実験1: 自由再生の実施」 <認知心理学> 実験の説明, コンピュータを用いた実験の準備
第 8 週	「実験1: 自由再生の実施」 <認知心理学> 実験, レポートの作成
第 9 週	「実験2: 両側性転移の実施」 <学習心理学> 学習・知覚運動協応など重要概念の説明, 反転メガネによる知覚運動協応の体験
第 10 週	「実験2: 両側性転移の実施」 <学習心理学> 実験の説明, 実験
第 11 週	「実験2: 両側性転移の実施」 <学習心理学> 実験のつづき, レポートの作成
第 12 週	「実験3: パーソナルスペースの実施」 <社会心理学> 実験の説明, 実験
第 13 週	「実験3: パーソナルスペースの実施」 <社会心理学> 実験のつづき, レポートの作成
第 14 週	「実験のプレゼンテーション」 発表準備
第 15 週	「実験のプレゼンテーション」 プレゼンテーション

《専門基礎科目群》

科目名	生涯発達心理学				
担当者名	森田 義宏				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

発達とは何か、生涯発達とは何かについて考える。発達に及ぼす環境の影響やその重要性について学ぶ。代表的な発達理論について学ぶ。乳児期から老年期までの各発達段階ごとの発達課題や認知的、社会的特徴について学ぶ。同時に、各発達段階ごとに生じやすい問題やその対処などについて学ぶ。

《授業の到達目標》

発達、生涯発達とはなにかについて説明できる。
 発達心理学や生涯発達心理学で用いられる基礎的な用語について説明できる。
 発達に及ぼす環境に影響や重要性について説明できる。
 発達段階ごとの発達課題や発達上の問題について説明できる。
 代表的な発達理論について説明できる。
 各発達段階ごとの認知機能や社会性の特徴について説明できる。

《テキスト》

使用しない

《参考文献》

授業中に随時紹介する

《成績評価の方法》

試験 70%と平常点（授業で指示する課題レポート、受講態度） 30%

《授業時間外学習》

新聞の悩みの相談・人生相談記事を10件集め、感想文を提出する。
 毎授業ごとに授業のまとめを提出する

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画			
第 1 週	オリエンテーション	生涯発達とは	発達概念	
第 2 週	発達と環境	遺伝土と環境の相互作用とは	発達理論	
第 3 週	乳児期の発達①	乳児期の発達課題	乳児の認知発達	
第 4 週	乳児期の発達②	愛着形成と社会性の発達		
第 5 週	幼児期の発達①	幼児期の発達課題	幼児の認知とことばの発達	
第 6 週	幼児期の発達②	幼児の自己意識の発達と社会性の発達		
第 7 週	児童期の発達①	児童期の発達課題	児童期の認知発達	
第 8 週	児童期の発達②	児童の社会性の発達 (学校・友人)		
第 9 週	青年期の発達①	青年期の発達課題	青年期の特徴	青年の心的特性(1)
第 10 週	青年期の発達②	青年の心的特性(2)		
第 11 週	青年期の発達③	青年期の心的特性(3)	おとなへの旅立ち	
第 12 週	成人期の発達	成人期の発達課題	仕事と結婚の心理	
第 13 週	中年期の発達①	中年期の発達課題	職場と家庭、人生の見直し	
第 14 週	老年期の発達①	老年期の発達課題	定年と第 2 の人生	
第 15 週	老年期の心理②	老化と心身の健康 (認知症とは)		

《専門基礎科目群》

科目名	臨床心理学（含カウンセリング）				
担当者名	琴浦 志津				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

臨床心理学とは、こころの治療に関する心理学である。フロイトは、大人の患者との精神分析的治療の中で、人の情緒発達における幼児期の体験の重要性を発見した。フロイト以降の研究者は、フロイトの理論を基礎にしながら、より年少の乳幼児と母親との関係性に焦点をあて、対象関係論をうちたてていった。この授業では、このようなこころの治療の歴史をたどりながら、人の情緒発達の理論について学ぶことを目的とするが、対人関係上の問題を呈する人々への理解と自分自身の理解を深めるためにも役立ててほしい。

《授業の到達目標》

人の不安の源泉はどこにあるかを知る。
 人の心の成長において大切なことは何かを知る。
 対人関係はどのような関係から育つのかを知る。

《テキスト》

「保育・教育に生きる 臨床心理学」松島恭子監修・篠田美紀編著 光生館 2200円

《参考文献》

「スクールカウンセラーがすすめる112冊の本」滝口俊子・田中慶江編

《成績評価の方法》

授業への取り組み30% 授業内容の理解50% レポート20%

《授業時間外学習》

上記の参考文献は、「こころを理解するための参考文献」である。配布するリスト 112冊の本の中から、各自1冊の本を選び、手書きで原稿用紙又はレポート用紙5枚の「感想文」を期日までに提出すること。

《備考》**《授業計画》**

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション 「臨床心理学とは何か」
第2週	フロイトの発見
第3週	フロイトの精神分析
第4週	フロイト以降の研究者の理論
第5週	対象関係論
第6週	遊戯療法
第7週	芸術療法
第8週	芸術療法
第9週	行動療法
第10週	認知行動療法
第11週	家族療法
第12週	ユングの臨床心理学
第13週	来談者中心療法
第14週	フォーカシング
第15週	臨床心理学の理解について

《専門基礎科目群》

科目名	ストレス科学論				
担当者名	古賀 愛人				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

ストレスに関する基礎知識としての、ストレス状況、ストレスの生体反応とその対処法を学ぶことにより、現代社会におけるストレスへの対処法を身につけ、精神的健康の増進に役立つ方法の獲得を目指す。

このため、ストレス概念に関する研究の流れを概観し、ストレスとホメオスタシス、ストレスが及ぼす生理機能への影響、ストレスの測定と評価、ストレス対処法等を講義する。

《授業の到達目標》

- ① ストレスとは何かを説明できる。
- ② ストレスと生理的反応を説明できる。
- ③ ストレスと生体反応を説明できる。
- ④ ストレス対処法を学び、ストレスへの対処が出来る。

《テキスト》

久住真理（監著）『ストレスと健康』紀伊国屋書店

《参考文献》**《成績評価の方法》**

授業における討論への参加度（20%）、及び筆記試験（80%）による総合評価

《授業時間外学習》

ストレスの生体反応に関しては、近年、大脳生理学的研究の進歩がめざましい。このため、ストレスの生理・生体反応を正しく理解するためには、大脳生理学の基礎知識が必要であり、この面の授業時間外学習が望まれる。

《備考》**《授業計画》**

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション 現代社会とストレス
第 2 週	ストレスとは何か
第 3 週	ストレスの概念と研究の流れ（1）
第 4 週	ストレスの概念と研究の流れ（2）
第 5 週	ストレスに対するアプローチ
第 6 週	ストレスとホメオスタシス（1）
第 7 週	ストレスとホメオスタシス（2）
第 8 週	ストレスの生理機能に及ぼす影響
第 9 週	ストレス反応の測定と評価
第 10 週	ストレスと生体反応（1）
第 11 週	ストレスと生体反応（2）
第 12 週	ストレス対処（1）
第 13 週	ストレス対処（2）
第 14 週	ストレスとメンタルヘルス（1）
第 15 週	ストレスとメンタルヘルス（2）

《専門基礎科目群》

科目名	人間関係論				
担当者名	森田 義宏				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

良好な人間関係は困った時に支え助けてくれるが、良好でない人間関係は敵対的で、時には傷つけられる危険性すらあり、ストレスのもととなる。この授業では人間関係や良好な人間関係の作り方などに関する理論、実験、実践例などについて心理学の観点から学ぶ。授業では、社会の中の人間関係と個人の視点からの人間関係について概念を整理しながら学びを深めていく。前者では集団とリーダーシップのダイナミクスを学び、後者での人間関係を対人関係という概念に置き換え、コミュニケーション、自己理解、自己意識、対人関係の発達、対人関係の分析、対人関係の病理などについて学ぶ。

《授業の到達目標》

人間関係についての基礎的な専門用語について説明できる。
 自分をとりまく人間関係をある程度分析できる。
 良い人間関係をつくるスキルを日々の生活に応用できる。

《テキスト》

使用しない

《参考文献》

授業中に随時紹介する

《成績評価の方法》

試験 70%、レポートなど提出物 30%

《授業時間外学習》

人間関係の悩みについての記事を新聞、雑誌、web 上から探し、報告する
 自分をとりまく人間関係について、授業で学んだこととの関連を探して、報告する。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション 現代の人間関係の特徴と問題
第 2 週	人間関係論と対人関係のちがひ 人間関係論のはじまり；ホーソン研究と集団力学
第 3 週	集団とリーダーシップ リーダーシップ研究の変遷 その 1
第 4 週	集団とリーダーシップ リーダーシップ研究の変遷 その 2
第 5 週	対人関係と自己理解 1 自己理解を深める ジョー・ハリーの窓
第 6 週	対人関係と自己理解 2 心理テストを通じた自己理解
第 7 週	対人関係と自己理解 3 他者から見た自己理解
第 8 週	対人関係と自己理解 4 印象形成、対人魅力
第 9 週	自己意識・自己概念の発達
第 10 週	対人関係とコミュニケーション
第 11 週	カウンセリングにおける人間関係のあり方 受容と共感的理解
第 12 週	対人関係の分析 1 エゴグラムと交流分析
第 13 週	対人関係の分析 2 交流分析：ストローク、ゲーム、ラケット、脚本分析
第 14 週	対人関係ストレスとストレスコーピング
第 15 週	人間関係の病理

《専門基礎科目群》

科目名	教育特論 I				
担当者名	河野 稔				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

大学生にとって、大学で修得した知識と技能を就職・進学といった具体的な進路に結び付けることは、社会的・職業的に自立した人間となるために大切なことである。そのためには、将来目標とするキャリアについての明確な課題意識を持つことが重要となる。

この授業では、主に教員採用試験や公務員試験の一般教養科目に関する基礎的な知識と問題解答能力の習得を通じて、受講生一人ひとりが自身の進路に向けての課題を明確にし、進路の実現のために課題に取り組む力を養うことを目指す。民間企業の採用試験対策にも役立つ内容も取り上げる。

毎回の授業は、複数の学科専任教員が入れ替わりで担当する、オムニバス形式で進める。また、担当する教員からは学習方法や問題解決のためのアドバイス等を行うが、基本的に、受講生の自主学習を主体として進めていく。

《授業の到達目標》

- 自分の進路に対する具体的な目標を持ち、その実現に向けての課題を具体的に説明できる。
- 自分の進路を実現するための計画を練り、それを行動に移すことができる。
- 自分の進路に必要な基礎的な知識を主体的かつ継続的に学習する態度が身についている。

《テキスト》

オムニバス形式の授業であるため、適宜授業の中でプリントを配布する。

《参考文献》

オムニバス形式の授業であるため、適宜参考となる文献や資料を紹介する。

《成績評価の方法》

- ・レポートと課題等の提出物（100%）で評価する。
- ・欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の場合、単位は与えない。

《授業時間外学習》

あらかじめ、自分の進路に必要な学習内容をチェックして、自主的に学習を進めておくこと。

授業後には、配布された資料等をもとに学習内容をよく理解しておくこと。とくに、問題解答能力を養うには、受講生同士の協力から得るものが多い。学習成果や疑問点を授業に持ち寄って情報交換できるように整理しておくこと。

《備考》

この授業だけで採用試験の一般教養科目に関するすべての対策が行えるわけではありません。各自が、長期間にわたって主体的な学習を継続していくことが一番大事であることによく留意してください。また、他の受講生と協同して学習することも大事です。お互いに意欲を持って良い刺激をし合えるように心掛けて授業に参加してください。

なお、オムニバス形式の授業であるため、授業計画は目安です。担当教員の都合により進行が異なることがあります。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション（授業の進め方、スケジュールなど）
第 2 週	自分のキャリアデザイン
第 3 週	健康システム学科生全体のキャリアデザイン（グループでの討議）
第 4 週	グループ討議の結果の発表
第 5 週	採用試験の概要（教員、公務員、民間企業等）
第 6 週	一般教養の模擬テスト
第 7 週	一般教養（人文科学）の傾向と対策
第 8 週	一般教養（社会科学）の傾向と対策
第 9 週	一般教養（自然科学）の傾向と対策
第 10 週	一般教養のまとめ
第 11 週	一般知能の模擬テスト
第 12 週	一般知能（数的推理、判断推理）の傾向と対策
第 13 週	一般知能（文章理解、資料解釈）の傾向と対策
第 14 週	一般知能のまとめ
第 15 週	将来の進路の実現に向けて / 学習全体のふり返し

《専門基礎科目群》

科目名	教育特論Ⅱ				
担当者名	平本 幸治				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

受講者は、学科専門科目の履修が進み、進路について本格的に取り組むべき段階に到達しつつあります。履修した専門領域の内容や「教育特論Ⅰ」で明確になった自らの課題に対し、より具体的な対策と主体的な取り組みが重要であり、獲得した知識・技能などを活用し、課題解決へ向けて、しかるべき態度でのさらなるステップが必要となります。本授業では、自己表現能力の開発の一環として、文章表現をはじめ、グループ・ディスカッションやディベートなどを通じて個人的課題を明確にするとともに、チームの一員として活動する上で必要な事項について学ん参ります。毎回の授業は、複数の学科専任教員が交代で担当するオムニバス形式で進め、専門分野の特性も加味しつつ指導・助言を行いますが、受講者相互の適度な緊張感の中こそ養われる能力でもあることを認識し、相互に助け合い、学びとる態度が必須となります。

《授業の到達目標》

自己の進路に必要な知識・能力を主体的かつ継続的に獲得する姿勢・態度が身についている。グループ・ディスカッションの進行等に精通し、自己の役割を果たすことができる。自己及びチームの課題を把握・分析し、解決に向けて計画的に取り組み、評価することができる。

《テキスト》

適宜プリントを配布します。

《参考文献》

適宜参考となる文献や資料を紹介します。

《成績評価の方法》

レポートと課題等の提出物（100％）で評価します。授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の場合、単位を供与しません。

《授業時間外学習》

自己の進路に必要な事項について、計画的に学習を進めて下さい。進路に関連する情報の収集を積極的に行い、相互に有益な情報交換が可能になるように整理しておいて下さい。

《備考》

グループで行う学習に関しては、積極的な参加が不可欠となります。向上心をもって参加し、自らの責任を果たすように努めて下さい。また、授業で学びとった事柄を、日常生活の中で積極的に活用・応用して下さい。オムニバス形式の授業のため、授業計画は目安です。担当教員の都合により進捗が異なる場合があります。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション（授業の進め方）
第 2 週	学科の専門性とは何か
第 3 週	キャリア形成のタイム・スケジュール
第 4 週	論理的思考と文章表現① 文章理解
第 5 週	論理的思考と文章表現② 文章表現（自己アピール）
第 6 週	面接① 個人
第 7 週	面接② 個人
第 8 週	面接③ グループ
第 9 週	面接のまとめ
第 10 週	グループ・ディスカッション①
第 11 週	グループ・ディスカッション②
第 12 週	ディベート①
第 13 週	ディベート②
第 14 週	グループ・ワークのまとめ
第 15 週	学習のまとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	スポーツ史				
担当者名	徳田 泰伸				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

古代から現代にいたるスポーツと教育の関係を、社会的・文化的・技術的・理論的視点から学習する。

《授業の到達目標》

運動・スポーツの歴史的研究の意義と方法を通じて、体育・スポーツの成り立ちや歩みを理解することができる。

《テキスト》

特に指定はしない。講義中に参考資料の配布および参考図書の紹介をする。

《参考文献》

必要に応じて参考資料を配布する。

《成績評価の方法》

小テスト、授業内課題の提出物、レポート課題

小テスト（20%）、各分野の学習後に課すレポート課題（60%）、平常点（20%）

授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

《授業時間外学習》

スポーツ史に登場する遺跡や人物等の展示会があれば見学することまたテレビ等で取り上げられる番組があれば視聴するようにする

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	授業オリエンテーション 15週の授業内容について説明する
第2週	人類文明と身体的技能職の成立 資料・文献を通じて学習していく
第3週	古代文明のスポーツ 資料・文献を通じて学習していく
第4週	中世におけるスポーツ 資料・文献を通じて学習していく
第5週	近世におけるスポーツ 資料・文献を通じて学習していく
第6週	近代体育理論の成立と展開 資料・文献を通じて学習していく
第7週	近代スポーツの展開 資料・文献を通じて学習していく
第8週	近代オリンピックの成立過程 資料・文献を通じて学習していく
第9週	学校体育の制度化とスポーツ 資料・文献を通じて学習していく
第10週	体育の科学的発展 資料・文献を通じて学習していく
第11週	生涯スポーツの歴史的展望 資料・文献を通じて学習していく
第12週	各グループ別によるディスカッション（課題提供）
第13週	各グループ別によるディスカッション（課題提供）
第14週	レポートによる小テスト
第15週	学習のまとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	スポーツ科学 I				
担当者名	矢野 琢也				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

- ・ 現在、トレーニング指導において科学的な基礎知識無くしては、効果的な結果は得られません。よって、運動生理学、解剖学等の基礎知識、ならびにトレーニング理論と方法論の基礎の習得を行います。その上で、必要に応じて実際にトレーニングを行い、理解を深めます。
- ・ 基本はテキストを中心に解説し、必要に応じてトピックス等を追加します。また、理解度が早い場合は、ストレングストレーニングの基礎を追加で行います。
- ・ 指導者として必要な「聞く、理解する、ポイントを見つける、まとめる、書く」の作業を徹底して行います。毎回レポート課題あり（レポートは期日厳守）。

《授業の到達目標》

トレーニングの指導者養成を目標とした講義と実技。
 トレーニング指導にあたり必要な基礎知識・技術の獲得。
 トレーニング理論や方法論を学ぶことで、運動生理学の重要性や必要性を学ぶ。
 「聞く、理解する、ポイントを見つける、まとめる、書く」の作業を徹底して行い基礎力を養成する。

《テキスト》

「NSCA パーソナルトレーナーのための基礎知識」森永製菓（株）健康事業部¥12,650。必要に応じて資料も配布します。

《参考文献》

「ストレングストレーニング&コンディショニング」ブックハウス HD、「トレーニングの科学的基礎」ブックハウス HD、「ストレングス&コンディショニング I」大修館書店、「競技力向上のトレーニング戦略」大修館書店、「入門運動生理学第3版」杏林書院、「スポーツ医科学」杏林書院、「図解スポーツトレーニングの基礎理論」西東社

《成績評価の方法》

- ・ 数回のレポート(50%)とテスト(50%)の結果のみで評価します。
- ・ レポートは期日厳守です。原則遅れは受け取りません。
- ・ 無断欠席回数が4回以上の者は単位認定をしません。

《授業時間外学習》

- ・ 自ら時間を設定して、予習ならびに復習としてトレーニングすることを強く希望します。
- ・ 持久的トレーニングに関して、各自で心拍数等の計測を行ってもらい、パソコンでデータ管理を行う予定です。

《備考》

トレーニング指導者養成のための授業を行います。レポートは期日、時間厳守です。
 運動指導や運動生理学を真剣に学びたい人が、より多くのことを学べるよう、積極的に授業を展開します。みなさんの積極的な姿勢を望みます。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション。受講希望者は必ず出席すること。
第 2 週	トレーニングの原則について。トレーニングの定義と原則を理解する。
第 3 週	成長期のトレーニングについて特に障害防止の面から理解する。
第 4 週	筋の構造とメカニズムを理解する。
第 5 週	筋活動におけるエネルギー系や神経系のメカニズムを理解する。
第 6 週	筋組成（速筋線維）の特性とトレーニング効果を理解する。
第 7 週	筋組成（遅筋線維）の特性とトレーニング効果を理解する。
第 8 週	AT,LT,VT,OBLA の理解と応用を理解する。
第 9 週	パワーに関する基礎知識とエクササイズに関する知識を習得する。
第 10 週	筋持久力に関する基礎知識を習得する。
第 11 週	有酸素性持久力トレーニングに関する基礎知識を習得する。
第 12 週	エネルギー補給と代謝に関する基礎知識を習得する。
第 13 週	高齢者に対するトレーニング効果について理解する
第 14 週	ディ・トレーニングに関する基礎知識を習得する。
第 15 週	総まとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	スポーツ科学Ⅱ				
担当者名	矢野 琢也				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

- ・「スポーツ科学Ⅰ」の応用編です。実技と講義を併用します。
- ・競技力向上のための基本的なトレーニング方法（無酸素性トレーニング、有酸素性トレーニング）をその特徴を中心に学びます。
- ・トレーニング効果の検証（乳酸値、心拍数等の測定）も実施する予定です。
- ・トレーニングには、原理原則があります。それらはトレーニングを理解・活用する上で重要となります。これまでに明らかになっていく科学的知識を学び、より効果的かつ安全にトレーニング指導が行える指導者養成を目指します。
- ・授業は、「聞く、理解する、ポイントを見つける、まとめる、書く」の作業を徹底して行います。そのため数回のレポート課題が有ります。

《授業の到達目標》

- ・競技力向上を目的としたトレーニング指導者養成を目標とします。
- ・トレーニングの理論および方法を学ぶことで、運動生理学の重要性や必要性を学ぶことも目標とします。実際に運動を行い、その効果を検証する方法を実践し、理解することもその目標とします。

《テキスト》

「ストレンクス&コンディショニングⅠ」大修館書店.必要に応じて資料も配布します。

《参考文献》

「ストレンクストレーニング&コンディショニング」ブックハウス HD、「NSCA パーソナルトレーナーのための基礎知識」森永製菓株、「トレーニングの科学的基礎」ブックハウス HD、「競技力向上のトレーニング戦略」大修館書店、「入門運動生理学第3版」杏林書院、「スポーツ医科学」杏林書院、「乳酸と運動生理・生化学」市村出版、「中距離ランナーの科学的トレーニング」大修館書店、「図解スポーツトレーニングの基礎理論」西東社

《成績評価の方法》

- ・ほぼ毎回のレポート(50%)とテスト(50%)の結果のみで評価します。レポートは期日厳守です。原則遅れは受け取りません。欠席回数が4回以上の者は単位認定しません。

《授業時間外学習》

- ・テキストでの事前予習は行うこと。ならびに実技では、必要に応じて日々の練習を強く希望します。実技評価も行う予定です。
- ・授業時間外で自らトレーニングを行い、測定結果をまとめる作業も行う予定です。

《備考》

トレーニング理論ならびに方法論を真剣に学びたい人が、より多くのことを学べるよう、積極的に授業を展開してゆきます。みなさんの積極的な姿勢を望みます。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション。受講希望者は必ず出席すること。
第 2 週	効果的なトレーニングを行うため何が必要かを考える。
第 3 週	競技能力向上におけるフィジカルトレーニングについて基本的な知識の習得を行う。
第 4 週	無酸素性トレーニングの理論について運動生理学を中心に理解する。
第 5 週	無酸素性トレーニングについてそのトレーニング方法と効果を運動生理学を中心に理解する。
第 6 週	有酸素性トレーニングの理論について運動生理学を中心に理解する。
第 7 週	有酸素性トレーニングについてそのトレーニング方法を運動生理学を中心に理解する。
第 8 週	有酸素性トレーニングについてそのトレーニングの効果の検証方法について理解する。
第 9 週	有酸素性トレーニングについてそのトレーニングの効果の検証方法について実践する。
第 10 週	無酸素性トレーニングについてそのトレーニングの効果の検証方法について実践する。
第 11 週	高度なレベルの競技力向上を目的とした有酸素性トレーニングについて、そのトレーニング方法を理解する。
第 12 週	高度なレベルの競技力向上を目的とした無酸素性トレーニングについて、そのトレーニング方法を理解する。
第 13 週	スピードトレーニングについて、その方法と効果について理解する。
第 14 週	ジュニア期のトレーニングについて、その特徴と注意点を理解する。
第 15 週	総まとめ&最新のトレーニング事情について学ぶ。

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	スポーツ指導法 I				
担当者名	三宅 一郎・樽本 つぐみ				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

運動実践を通して体育指導者としての指導能力を養うことを目標とする。1、2年次に履修した「スポーツ実践 I・II」「健康体力づくり I・II」においてスポーツや学校体育における正しい実践方法を再確認すると共に指導方法を身につける。具体的には、様々なスポーツや学校体育における実施種目の実戦を通して段階的な指導方法やその際の指示助言等を学ぶ。

以上に示したスポーツや学校体育指導者として必要と思われる内容を学習する。

《授業の到達目標》

授業計画に示す内容のスポーツ種目や学校体育種目を実施する。方法として、基本的に個人で各種目における指導計画を作成し実際に指導経験を積む。さらに反省・評価を繰り返し行うことにより指導者としての資質を高める。実施種目は、個人・グループ毎に授業計画に示す全種目を経験する。各自がこの授業を通して体得したものが、II期開講のスポーツ指導法IIに有効に活用されることを期待する。

さらに、学校施設内で実施不可能な種目（水泳等）については定期時間外に集中講義を実施する。

《テキスト》

特になし。必要に応じて資料を配付する。

《参考文献》

『運動適応の科学～トレーニングの科学的アプローチ～』竹宮隆・石河利寛著（杏林書院）

『体力を考える～その定義・測定と応用～』宮下充正著（杏林書院）

『選手とコーチのトレーニングマニュアル』ブルーノ・ポーレット著

『中学校学習指導要領解説（体育編）』（明治図書）

『高等学校学習指導要領解説（体育編）』（明治図書）

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。

ただし授業回数の1/3以上欠席した場合単位は与えない。

毎時間の授業のまとめ、感想、質問等をまとめたノート提出する（50%）

随時課題に対するレポート（30%）

学期末に理解度を確認するテスト（20%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

下記授業計画における次時の授業内容を参考文献等で確認し、あらかじめ指導計画案を作成することによって指導方法に対してより理解が深まりかつ指導内容が広がる。

<復習方法>

学んだ内容を配付資料等により再確認しノートにまとめる。疑問点等があればノートの感想欄に記載すること（後日必ず返答する）。これらの活動を通してより効果的な理解が得られると考える。

《備考》

健康システム学科の学生として、スポーツ・学校体育の理論と実践を積極的に体得しよう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション
第 2 週	体づくり運動の考え方と指導法（1）
第 3 週	体づくり運動の考え方と指導法（2）
第 4 週	器械運動：マット運動における特性の理解と指導法（1）
第 5 週	器械運動：マット運動における特性の理解と指導法（2）
第 6 週	球技：バスケットボールにおける特性・ルール理解と指導法（1）
第 7 週	球技：バスケットボールにおける特性・ルール理解と指導法（2）
第 8 週	球技：バレーボールにおける特性・ルール理解と指導法（1）
第 9 週	球技：バレーボールにおける特性・ルール理解と指導法（2）
第 10 週	陸上競技：短距離における種目特性の理解と指導法
第 11 週	陸上競技：リレーにおける種目特性の理解と指導法
第 12 週	陸上競技：走り幅跳びにおける種目特性の理解と指導法
第 13 週	格技：剣道における特性の理解と指導法（1）
第 14 週	格技：剣道における特性の理解と指導法（2）
第 15 週	まとめ

《Ⅰ群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	スポーツ指導法Ⅱ				
担当者名	三宅 一郎・樽本 つぐみ				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

スポーツ指導法Ⅰと同様に主として運動実践を通して体育指導者としての指導能力を養うことを目標とする。その為に、スポーツ・体育における様々な種目の正しい実践方法を再確認すると共に指導方法を身につける。具体的には、様々なスポーツのルールや学校体育における種目の実践を通して段階的な指導方法やその際の指示助言等を学ぶ。
 以上に示したスポーツ・体育指導者として必要と思われる内容を学習する。

《授業の到達目標》

授業計画に示す内容のスポーツ種目や学校体育種目を実施する。方法として、個人で各種目における指導計画を作成し指導経験を積む。さらに反省・評価→指導を繰り返すことにより指導者としての資質を高める。実施種目は、個人・グループ毎に授業計画に示す全種目を経験する。さらに、学校施設内で実施不可能な種目（水泳等）については時間外に実施する。

《テキスト》

特になし。必要に応じて資料を配付する。

《参考文献》

- 『運動適応の科学～トレーニングの科学的アプローチ～』竹宮隆・石河利寛著(杏林書院)
- 『体力を考える～その定義・測定と応用～』宮下充正著(杏林書院)
- 『選手とコーチのトレーニングマニュアル』ブルーノ・ポーレット著
- 『中学校学習指導要領解説（体育編）』（明治図書）
- 『高等学校学習指導要領解説（体育編）』（明治図書）

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。
 毎時間の授業のまとめ、感想、質問等をまとめたノート提出する（50%）
 随時課題に対するレポート（30%）
 学期末に理解度を確認するテスト（20%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

下記授業計画における次時の授業内容を参考文献等で確認し、あらかじめ指導計画案を作成することによって 指導方法に対してより理解が深まりかつ指導内容が広がる。

<復習方法>

学んだ内容を配付資料等により再確認しノートにまとめる。疑問点等があればノートの感想欄に記載すること（後日必ず返答する）。これらの活動を通してより効果的な理解が得られると考える。

《備考》

健康システム学科の学生として、スポーツ・学校体育の指導者としてふさわしい能力を体得しよう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業オリエンテーション
第 2 週	器械運動：跳び箱運動における特性の理解と指導法（1）
第 3 週	器械運動：跳び箱運動における特性の理解と指導法（2）
第 4 週	器械運動：鉄棒運動における特性の理解と指導法（1）
第 5 週	器械運動：鉄棒運動における特性の理解と指導法（2）
第 6 週	球技：バドミントンにおける特性・ルールの理解と指導法（1）
第 7 週	球技：バドミントンにおける特性・ルールの理解と（指導法2）
第 8 週	陸上競技：走り高跳びにおける種目特性の理解と指導法
第 9 週	陸上競技：砲丸投げにおける種目特性の理解と指導法
第 10 週	陸上競技：長距離走における種目特性の理解と指導法
第 11 週	球技：サッカーにおける特性・ルールの理解と指導法（1）
第 12 週	球技：サッカーにおける特性・ルールの理解と指導法（2）
第 13 週	格技：柔道における特性の理解と指導法（1）
第 14 週	格技：柔道における特性の理解と指導法（2）
第 15 週	まとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	健康・体力づくり指導法 I				
担当者名	木下 幸文				
授業方法	演習	単位・必選	2年・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

効果的な運動を指導して行くにあたっては、運動の目的のほかに運動の質と量について検討していかなければならない。生活習慣病やメタボリックシンドローム予防としてのポピュレーションアプローチ、ハイリスクアプローチにおける運動プログラムの目的や内容は異なり、個人差の大きい高齢者においては個別対応の運動プログラムを開発していかなければならない。さまざまな目的に応じた運動プログラムを提供していくためには、個人の生理的特性や心理的特性を考慮しなければならない。演習では、様々な条件下で、安全かつ効果的な健康運動プログラムの作成するための手段を学んでいく。

《授業の到達目標》

運動を指導したり処方したりする際に重要となってくるのは、運動を行う目的である。運動プログラムや運動処方を作成するときには、運動を行う人に対して目的を設定して身体の機能を維持・改善するために適切な運動を助言・指導しなければならない。運動を行う対象者は様々であり、対象者の健康増進や生活習慣が運動によって改善できるよう効果的でかつ安全な指導を行わなければならない。この演習では、健康づくりや体力づくりのための運動のあり方について説明でき、日常生活や運動での健康づくり、ライフスタイルや各年代に応じた安全で効果的な運動プログラムを作成することが出来る。

《テキスト》

「健康運動実践指導者養成用テキスト」財団法人健康体力づくり事業財団（南江堂）2009年

《参考文献》

「メタボリックシンドローム解消ハンドブック」田畑泉著（杏林書院）2008年
 「特定保健指導における運動指導マニュアル」日本健康運動指導士会編（サンライフ企画）2007年
 「介護予防実践マニュアル」久野譜也・松田光生編（社会保険研究所）2007年
 「中高年者のための運動プログラム 基本編」田中喜代次、重松良祐、中垣内真樹編（ナッパ）2006年
 「中高年者のための運動プログラム 病態編」田中喜代次、重松良祐、中垣内真樹編（ナッパ）2006年
 「地域における高齢者の健康づくりハンドブック」松田光生・福永哲夫・烏帽子田彰・久野譜也編（ナッパ）2003年

《成績評価の方法》

演習中に行う確認テスト(60%)とレポート(20%)、平常点(20%)により総合的に判断する。ただし、演習への出席率が全体の90%以下の場合、単位を取得することはできません。

《授業時間外学習》

毎時間、テキストの各章についてテストを行いますので事前に目を通しておくこと。テキストの専門用語について、事前に各自で意味を理解しておくこと。

《備考》

本演習は、定期の授業時間以外に学外実習（水中運動）を行う予定である（時期未定。日時は追って連絡する）。健康運動実践指導者の認定試験を受験する予定の人は、必ずテキストを購入すること。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション（演習の進め方と評価方法について）
第 2 週	健康づくり運動と運動プログラム作成の理論
第 3 週	個別健康支援プログラムについて（国保ヘルスアップモデル事業）
第 4 週	ライフスタイルに応じた運動プログラムの作成(1)
第 5 週	ライフスタイルに応じた運動プログラムの作成(2)
第 6 週	ライフスタイルに応じた運動プログラムの実際と評価(1)
第 7 週	ライフスタイルに応じた運動プログラムの実際と評価(2)
第 8 週	高齢者の健康増進プログラム作成と実際(1)前後期高齢者の健康づくり運動
第 9 週	高齢者の健康増進プログラム作成と実際(2)介護予防運動の実際
第 10 週	高齢者の健康増進プログラム作成と評価(1)
第 11 週	高齢者の健康増進プログラム作成と評価(2)
第 12 週	健康のための水泳・水中運動の理論と実際(1)水中運動のプログラム作成と評価
第 13 週	健康のための水泳・水中運動の理論と実際(2)アクアビクスプログラムの作成
第 14 週	健康のための水泳・水中運動の理論と実際(3)水中ウォーキングプログラムの作成
第 15 週	総括

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	健康・体力づくり指導法Ⅱ				
担当者名	木下 幸文				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

エアロビクス運動（エアロビックダンス、水泳・水中運動、ジョギング、ウォーキング）やストレッチング、補強運動など実際に行うことによって、それぞれの運動の特性や効果について理解を深めるとともに、指導上の留意点、問題点をあげながら講述していく。また、健康づくり運動の理論を講述するに加えて、目的にかなった運動プログラムの作成・実践していくための手段について検討していく。

《授業の到達目標》

運動・施設が充実されたとしても、優れた指導者がいなければそれを生かすことが出来ない。指導とは、すなわち対象者に対して目標が一つ一つ達成できるように動機づけないしは激励し行動させることである。健康体力づくりのための運動指導を行うためには、運動の特性や理論について理解することに加えて、専門能力・専門知識やその遂行能力だけでなく、人間関係の指導力または社会的な能力も有し、指導者としての自覚をもって行動する必要がある。「健康体力づくり指導法Ⅰ」に引き続いて本演習では、健康を維持増進するための適切な運動の在り方・方法論を説明でき、健康増進のための運動プログラムを実演できる。

《テキスト》

「健康運動実践指導者養成用テキスト」財団法人健康体力づくり事業財団（南江堂）2009年。

《参考文献》

必要があれば適宜紹介していく。

《成績評価の方法》

毎演習時に行う章テスト（70%）と受講態度（30%）により総合的に判断する。ただし、演習への出席率が全体の90%以下の場合、単位を取得することはできません。

《授業時間外学習》

毎時間、テキストの各章についてテストを行いますので事前に目を通しておくこと。運動指導プログラムが実演できるように各自で練習しておくこと。

《備考》

本演習は、定期の授業時間以外に学外実習（水中運動）を行う予定である（時期未定。日時は追って連絡する）。健康運動実践指導者の認定試験を受験する人は、必ず受講すること。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション（演習の進め方と評価方法について）
第2週	エアロビクス運動の理論と実際（1）（エアロビックダンスの特性と理論）
第3週	エアロビクス運動の理論と実際（2）（エアロビックダンスの指導の要点と実際）
第4週	エアロビクス運動の理論と実際（3）（ウォーキングの特性と理論1）
第5週	エアロビクス運動の理論と実際（4）（ジョギング・ウォーキングの特性と理論2）
第6週	エアロビクス運動の理論と実際（5）（ウォーキングの指導の要点と実際1）
第7週	エアロビクス運動の理論と実際（6）（ジョギング・ウォーキングの指導の要点と実際2）
第8週	エアロビクス運動の理論と実際（7）（水泳・水中運動の特性と理論）
第9週	エアロビクス運動の理論と実際（8）（水泳・水中運動の指導の要点と実際）
第10週	補強運動の理論と実際(1)
第11週	補強運動の理論と実際(2)
第12週	ストレッチングの理論と実際
第13週	健康づくりとプログラム（運動プログラム作成上の原則）
第14週	運動プログラム作成の理論
第15週	総括

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	運動処方論				
担当者名	矢野 琢也				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

運動ならびにトレーニングは競技力向上だけでなく、生活習慣病の予防や改善、高齢者が健康で豊かな生活を送るための重要な事項となっています。その上で、総合的かつ具体的に生活習慣病対策を進めるに当たり、運動指導者が果たす役割は今後ますます大きくなっています。よって、指導者は安全かつ効果的に運動を行うために必要な事項を学ぶ必要があります。

授業は、運動処方の目的、方法を運動生理学の面から解説します。特に、運動を行うに当たって必要な知識である種目、強度、時間、頻度、対象者の特徴等を学びます。基本的な内容に関しては、「運動処方の指針 第7版 南光堂」に準拠します。

《授業の到達目標》

運動やトレーニングの指導者養成を目標とします。

運動処方論の目的および方法を学ぶことで、運動の重要性や必要性を学ぶことを目標とします。運動生理学の重要性を理解することもその目標とします。

《テキスト》

特に指定しません。配布資料を必要に応じて配布します。

《参考文献》

「運動処方の指針 第7版」南光堂、「運動処方」朝倉書店、「運動生理学概論」杏林書院、「スポーツ医科学」杏林書院、「レジスタンストレーニングのプログラムデザイン」ブックハウス HD

《成績評価の方法》

数回のレポート（50%）ならびに期末テスト（50%）の結果のみで評価します。提出期日は厳守です（減点対象）。

《授業時間外学習》

・3年時の選択科目授業のため、それまでに学んだ基本的な知識の応用として授業展開します。よって予習を行っている、もしくは、これまで学んだ運動生理学や解剖学、運動栄養学、運動の基礎等の知識があるものとして授業展開を行います。より積極的に望んでください。

《備考》

- ・パワーポイントやビデオ等の映像資料を積極的に用いて授業展開します。
- ・学びたい人が、より多くのことを学べるよう、積極的に授業を展開しますので、みなさんの積極的な姿勢を望みます。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーションおよび運動処方に関する情報の紹介
第 2 週	トレーニングの原則について理解する。
第 3 週	運動処方の概要について理解する。
第 4 週	トレーニングの概要について理解する。
第 5 週	心肺系の運動処方について理解する。
第 6 週	エネルギーの消費に関して理解する。
第 7 週	プログラムの進行についてその注意点等を理解する。
第 8 週	トレーニングの特異性について理解する。
第 9 週	レジスタンストレーニングの処方について理解する。
第 10 週	柔軟性に関して理解する。
第 11 週	トレーニング効果の持続について理解する。
第 12 週	プログラムの監視について理解する。
第 13 週	エクササイズ習性変容の方法について理解する。
第 14 週	運動処方の在り方について理解する。
第 15 週	これまで学んだ運動処方の総まとめを行う。

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	運動処方演習				
担当者名	樽本 つぐみ				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

病気になれば病院に行き、病状にあった薬を処方してもらう。それと同様に、運動をしたい人（しなければならない人）には、運動処方の条件や原則を捉えた上でその人の状況にあった運動（トレーニング）を処方することが運動指導者の役割である。運動処方を行うためには、心拍数や血圧、乳酸値、心電図、最大酸素摂取量などを測定するための知識や測定法を学び、その測定値をもとに運動の種類や強度、頻度などを設定する。実際にその運動を行うことで、処方した運動が適切であったかそうでないかが判断できる。これら一連の流れを自らの身体を活用して「ハーフマラソン（21.0975km）を完走する」ことを目標に行うことで、運動を処方する基礎的な力が身に付くとともに、他の運動への応用力も体得できることを目指します。

《授業の到達目標》

ハーフマラソンを完走するためには、まず自分を知ることが大切である。その上で、目標心拍数や運動の強度などを定め、トレーニングを行い、2月14日に行われる「神戸バレンタインデー・ラブラン大会」に出場する。トレーニングが計画通りいかず、修正を加えたり、怪我でトレーニングを中断し、方法を変更したりと、自分の身体でさえ思う通りにいかないことで様々な勉強ができる。また、ハーフマラソン走行中には、今までと違う自分に出会えることが最大の勉強になると思います。

《テキスト》

テキストは使用しません。必要に応じて資料を配付します。

《参考文献》

- 「運動生理学 20 講 第 2 版」勝田 茂（朝倉書店）
- 「運動処方の指針 第 7 版」日本体力医学会体力科学編集委員会（南江堂）
- 「運動療法と運動処方」佐藤祐造（文光堂）

《成績評価の方法》

「評価の方法」・・・レポート、発表、トレーニング状況、大会の様子
 「評価の割合」・・・レポート（40%）、発表（30%）、トレーニング方法やトレーニング内容と結果との関係（30%）
 ただし、授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の時は評価対象外とします。

《授業時間外学習》

授業で学んだこと、調べたことをもとに2/14に行われるハーフマラソン大会に出場する。授業以外でのトレーニングや栄養管理、試走など前向きな姿勢が大会当日に結果としてあらわれる。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション
第 2 週	処方の基礎知識と身体測定（体組成・筋力・フォームのチェック・行動様式など）
第 3 週	身体活動量・運動量・減量等の目標設定と体力に応じたトレーニングプログラムの作成
第 4 週	運動と心拍数との関係
第 5 週	運動と筋力トレーニングとの関係
第 6 週	運動とエネルギー量との関係
第 7 週	運動とフォームとの関係
第 8 週	運動と水分摂取・栄養補給との関係
第 9 週	運動と乳酸との関係
第 10 週	運動と怪我との関係
第 11 週	運動と生活習慣との関係
第 12 週	運動とウェア・靴との関係
第 13 週	運動と心電図との関係
第 14 週	運動と環境との関係
第 15 週	ハーフマラソン大会に参加およびまとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	専門施設実習				
担当者名	徳田 泰伸・河野 稔				
授業方法	実習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

民間・公共のスポーツ施設、病院・リハビリテーション等の医療施設、各種スポーツクラブ及びチーム、その他、指導教員が認めた施設・クラブ・チーム等において、社会人としての行動を身につけ、指導者としての心構え、指導法及び必要な技術的要策を理解する。

《授業の到達目標》

施設実習において、公共、民間、病院等の各種フィットネス施設における、スポーツ選手から生活習慣病予防改善に至る各種指導を実践することによって、その成果を確認すると共に、指導場面で発生する種々の問題の解決能力を養うことができる。

《テキスト》

適宜授業で配布する。

《参考文献》

ヘルス&フィットネス実務マニュアル「フィットネスクラブ内の秘実務業務の手引書」（現場マニュアル）

《成績評価の方法》

専門実習（60%）、平常点（20%）、小テスト（20%）
 授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

《授業時間外学習》

予習としては、配布資料をよく読み、実習に備えておくこと。
 復習としては、実習中の記録を適宜まとめておくこと。

《備考》

専門施設実習は1年次のスポーツ実践I・II、運動の基礎、健康スポーツ科学I、2年次の健康・体力づくり実践I・II、スポーツ医学概論、スポーツ科学演習、3年次の運動処方演習、スポーツ科学演習、健康・体力づくり指導法I・IIを十分に復習し予習しておくこと。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	概要、紹介、授業計画、当日スケジュール、評価、名簿確認作成 FC業界論・市場＝H・FCA 民公企チーム、介病＝資格、能力[経.GSP]性格P 可.将来
第2週	1：1面接・実習先の決定「補足・健僧法」希望近い、半期計画、当日、評価、名簿確認、就職のための（理論・実技・実務とジム・スタジオ・プール・エンターテイナー）
第3週	施設実習の依頼＝希望.調査. 面談、オーディションー評価ー評価点（理論 総復習 Q&A） （対人交流コミュニケーション論）地図・プロット（施設）
第4週	施設実習の承諾＝写真ーB（実技 総復習 Q&A） （案内&W-up）1. オーディション実技テストー採点 2. 面談＝病院、リハ、FC？ 3. HC
第5週	健康体力 管理システム（カルテ操作～プログラムデザイン）
第6週	事業計画の理解
第7週	施設、ハード面の習得
第8週	ソフトプログラム（ジム、スタジオ、プールの各種教室を指導する）
第9週	指導サービステクニックの習得（フロント～コーチ業）
第10週	安全管理の心得（CPR～施設管理、フロアー業務、メンテナンス）
第11週	施設利用、サインシステム、案内業務
第12週	年間イベント（企画と集客能力）
第13週	人事管理と業務評価
第14週	雑務（会議、機関誌、備品、文献等）
第15週	学習のまとめ

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	専門施設実習				
担当者名	徳田 泰伸・河野 稔				
授業方法	実習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

民間・公共のスポーツ施設、病院・リハビリテーション等の医療施設、各種スポーツクラブ及びチーム、その他、指導教員が認めた施設・クラブ・チーム等において、社会人としての行動を身につけ、指導者としての心構え、指導法及び必要な技術的要策を理解する。

《授業の到達目標》

施設実習において、公共、民間、病院等の各種フィットネス施設における、スポーツ選手から生活習慣病予防改善に至る各種指導を実践することによって、その成果を確認すると共に、指導場面で発生する種々の問題の解決能力を養うことができる。Ⅱ期においては学外での実習を重きを置いて指導力を高めていく。

《テキスト》

授業中に資料を配付する

《参考文献》

ヘルス&フィットネス実務マニュアル「フィットネスクラブ内の秘実務業務の手引書」（現場マニュアル）

《成績評価の方法》

専門実習（60%）、平常点（20%）、小テスト（20%）
授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

《授業時間外学習》

予習としては、配布資料をよく読み、実習先ごとの注意事項を確認しておくこと。
復習としては、最後に報告してもらうので、実習内容を記録しまとめておくこと。

《備考》

専門施設実習は1年次のスポーツ実践Ⅰ・Ⅱ、運動の基礎、健康スポーツ科学Ⅰ、2年次の健康・体力づくり実践Ⅰ・Ⅱ、スポーツ医学概論、スポーツ科学演習、3年次の運動処方演習、スポーツ科学演習、健康・体力づくり指導法Ⅰ・Ⅱを十分に復習し予習しておくこと。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション 15週の内容について話し合う。特に実習先の検討。学生の実習先の希望等について打ち合わせる
第2週	実習先でのシミュレーションを行い、実習場面で発生する問題等について議論する
第3週	各施設先（実習先）を想定し、2週目で発生した諸問題について検討し、指導力を養うための講義とする
第4週	学外実習 実習先での授業（第1回目 挨拶、打ち合わせ、仕事の内容等について現場指導者との協議に入る）
第5週	学外実習 実習先での授業（第2回目 仕事の内容について具体的な指示を受ける） 実践を行う
第6週	学外実習 実習先での授業（第3回目 仕事の実践を通して客と対応していく） 対応した内容について反省と明日への対応を検討する
第7週	学外実習 実習先での授業（第4回目 第3回目と同じく仕事の内容に対して反省と自分らしさの指導力を発揮していく）
第8週	学外実習 実習先での授業（第5回目 第4回目の内容をふまえ、自分の指導力が客に対していかに反応があるか否か反省し、明日への計画に生かしていく）
第9週	学外実習 実習先での授業（第6回目 第5回目と同じく指導力を発揮し、その内容をふまえ、何が足りないか常に客との繋がりを重視していく）
第10週	学外実習 実習先での授業（第7回目 第6回目の内容をふまえ、実習後半の指導力を反省し、理論と実践を身につけていく）
第11週	学外実習 実習先での授業（第8回目 第7回目をふまえ、理論と実践が片寄りのない指導になっているかを検討する）
第12週	学外実習 実習先での授業（第9回目 第8回目をふまえ、各自の指導力が客に対して、評価がどのようなものか確かめる）
第13週	本学での授業の中で実習先での諸問題等について報告し反省会を開く
第14週	実習先での実習録を作成し、全員でまとめる（各施設ごと）
第15週	各自の報告を発表形式で行う

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	レクリエーション（野外活動を含む）				
担当者名	樽本 つぐみ				
授業方法	実習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

レクリエーションの果たす役割について理解し、活動（イベント）を通して参加者の意欲を引き出し、魅力のある活動や運営の仕方を学びます。また学外でのキャンプ実習では、日常生活から離れて、自然の中で相互に協力し、自然に親しむ力を身につけ、指導者として野外活動の企画・立案・運営ができることを目指します。

本講義は、保健体育免許必修科目です。また4時間のうち3時間を学外実習で行います。

《授業の到達目標》

レクリエーション支援が、子どもから高齢者までさまざまな人々に多様な活動の機会を提供するための働きかけであることを理解した上で、オリジナリティのある活動を作成し、実践することを学びます。また、学外でのキャンプ実習では、自然の中での行動の仕方、共同生活を行うための必要な知識と技能、自然に親しむ心を養うことの重要性について学びます。

《テキスト》

テキストは使用しません。必要に応じて資料を配付します。

《参考文献》

「やさしいレクリエーション実践」川村皓章（日本レクリエーション協会）
 「野外活動テキスト」（日本野外教育研究会）

《成績評価の方法》

「評価の方法」・・・レポート、キャンプ実習の様子、発表
 「評価の割合」・・・レポート（30%）、キャンプ実習（50%）、発表（20%）
 ただし、授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の時は評価対象外とします。

《授業時間外学習》

15回の授業とは別に、学外でキャンプ実習（1泊2日）と集中講義でのレクリエーション指導を行います。詳細は第1週の授業時に説明しますので、必ず出席してください。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション
第2週	レクリエーションの基礎理論と支援の理論
第3週	レクリエーション組織の経営論とサービス論
第4週	ホスピタリティトレーニングとアイスブレイキング
第5週	キャンプ実習：事前指導（実施計画作成、グループ分け、役割分担など）
第6週	キャンプ実習：開講式、テント設営
第7週	キャンプ実習：オリエンテーリングまたは登山
第8週	キャンプ実習：食料調達（例）魚釣り、野草など
第9週	キャンプ実習：野外調理
第10週	キャンプ実習：自然観測
第11週	キャンプ実習：キャンプファイヤー
第12週	キャンプ実習：フォークダンスおよびキャンプソング
第13週	キャンプ実習：野外レクリエーション
第14週	キャンプ実習：テント撤去、閉講式
第15週	キャンプ実習：発表および事後指導

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	薬理学				
担当者名	仮家 公夫				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

薬理学では、養護教員が遭遇すると想定される医薬品と疾患を持つ児童・生徒の病態との相互作用についての知識を養い、適切な医薬品の使用の大切さ学ぶ。医薬品は化学物質であり、疾患の治癒や予防に期待される作用と不必要な副作用や生命に関わる有害作用を示すことがある。もちろん期待される作用に付随している副作用もあるが、副作用や有害作用は適切な使用・適応を誤ったことにより生じる。これらは医療過誤として報道されていることは、周知の事である。

まず、講義内容に馴染むために医薬品の持つ性格、消毒薬や応急手当で用いられる医薬品について講述する。その後に体内での医薬品の動態や作用発現機序について総論を修得して欲しい。各論では全ての医薬品を解説する事は不可能であり、免疫系・抗アレルギー・抗炎症薬、抗感染症薬、抗がん薬、末梢組織・器管性疾患治療薬について講述する。

《授業の到達目標》

対象となる服薬中の児童や生徒の疾患の状況を把握し、適切な対応が出来るように、医薬品の作用の基本的原理を理解し、主要な疾患治療薬の作用機序、薬効と副作用などについて理解出来るレベル。

《テキスト》

『系統看護学講座 専門基礎5 薬理学』 大鹿・吉岡 ほか著

《参考文献》

『疾患別薬理学 第4版』 赤池昭紀ほか著 (2007:7刷 廣川書店)

『シンプル薬理学』 野村・石川 編 (2009年:南江堂)

『今日の治療薬 2010』 浦部・島田・川合 編 (2010:南江堂)

《成績評価の方法》

定期試験評価 80%、平常評価 20%(レポート・出席状況など)

《授業時間外学習》

毎回の講義内容の復習は当然であるが、適宜課題を与えるので、受講者は期日までにレポートを提出のこと。

《備考》

学習は諸君の自己責任であるが、薬物治療中の未成年者の症状把握は難しいので、理解が困難な事項などは積極的に質問をしてほしい。座席を指定するが、私語や携帯電話を楽しむ学生、また授業中の出入りや飲食をしたい学生は受講しないこと。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	薬理学総論 (1) 薬物治療の目ざすもの、消毒用薬品、応急手当に用いる医薬品
第 2 週	薬理学総論 (2) 薬物動態の基本
第 3 週	薬理学総論 (3) 薬効に影響を与える因子
第 4 週	抗感染症薬 (1)
第 5 週	抗感染症薬 (2)
第 6 週	抗がん薬
第 7 週	免疫治療薬
第 8 週	抗アレルギー薬、抗炎症薬
第 9 週	物質代謝に作用する薬物 糖尿病治療薬、脂質異常症治療薬
第 10 週	心血管・血液に作用する薬物 (1) 血液凝固系疾患など
第 11 週	心血管・血液に作用する薬物 (2) 高血圧症など
第 12 週	心血管・血液に作用する薬物 (3) 心不全・不整脈など
第 13 週	呼吸器系に作用する薬物 カゼ症候群、気管支喘息など
第 14 週	脳神経系に作用する薬物 (1) 不眠症、うつ、統合失調など
第 15 週	脳神経系に作用する薬物 (2) パーキンソン病、痙性マヒなど

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	健康統計学				
担当者名	河野 稔				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

この授業では、統計学の基礎について学習する。また、保健統計学の基礎を身につけることをめざす。具体的には、基本的な統計量（平均値、分散、標準偏差など）をはじめ、相関係数と回帰直線、確率分布、区間推定や仮説検定（カイ2乗検定、t検定、F検定など）まで、統計学の基礎全般について学習する。演習問題として、身近な統計データから保健統計に関する資料など、幅広く例題を取り上げる。毎回の授業では、授業の理解度を確認するための小テストを実施する。また、表計算ソフトを利用した統計処理についての演習にも取り組む。

《授業の到達目標》

- データを代表する統計値を求めたりグラフを作成して、データ全体の特徴を把握できる。
- 統計的手法を用いて、標本から母集団の特徴を推測したり、複数の母集団の特徴を比較できる。
- 表計算ソフトなどを用いて、統計的データを整理したり分析することができる。

《テキスト》

『やさしい保健統計学 改訂第4版』 縣 俊彦（南江堂）2007年

《参考文献》

- ・『国民衛生の動向 2009』（厚生統計協会）2009年
 - ・『医学・保健学のためのやさしい統計学』 正井栄一（金原出版）2003年
 - ・『統計分析のこが知りたい』 石井秀宗著（文光堂）2005年
 - ・『本当にわかりやすいすぐ大切なことが書いてあるごく初歩の統計の本』 吉田寿夫（北大路書房）1998年
 - ・『Excelで学ぶやさしい統計学』 田久浩志（オーム社）2004年
 - ・『Excelで学ぶ統計解析入門 第2版』 菅民郎（オーム社）2003年
 - ・『Excelで学ぶ統計解析』 涌井良幸、涌井貞美（ナツメ社）2003年
- その他の文献や資料は、授業中に必要に応じて紹介する。

《成績評価の方法》

- ・毎回の小テスト（20%）と課題などの提出物（20%）と中間および定期試験の結果（60%）で評価する。
- ・欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の場合は単位を与えない。

《授業時間外学習》

- 予習について
教科書の次回の授業範囲を読んでおくこと。また、グラフ作成や関数の利用など、表計算ソフトの操作や手順を練習しておくこと。
- 復習について
定期試験だけでなく、中間試験も行うので、用語や統計的手法の内容を覚えるだけでなく、データの整理や手法が具体的に使えるように練習しておくこと。

《備考》

統計を学ぶ上で重要なことは、「何が知りたいのか（目的）」「誰から調べるのか（対象）」「どのような手法を用いるのか（手段）」を明確にすることです。つまり、統計処理の数学的な背景よりも、具体的な目的や対象に対して統計を道具として分析し、何かを発見したり明らかにすることが大事です。授業だけにとどまらず、身の回りにある「データ」に関心を持って、授業で学習したことを生かそうという意欲を持って、授業に参加してください。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション／統計の必要性、記述統計と推測統計
第 2 週	データの尺度、度数分布
第 3 週	代表値と散布度
第 4 週	相関と回帰
第 5 週	確率、順列、組み合わせ
第 6 週	中間試験の実施（ここまでの学習の振り返り）
第 7 週	中間試験の解説／確率変数と確率分布
第 8 週	確率分布（二項分布、正規分布、カイ二乗分布、F分布など）
第 9 週	母集団と標本、区間推定
第 10 週	仮説検定(1) 1つの母集団の統計値の検定（母平均、母比率、母相関係数）
第 11 週	仮説検定(2) 2つの母集団の統計値の検定（z検定、t検定など）
第 12 週	仮説検定(3) クロス表の検定（適合度の検定、独立性の検定など）
第 13 週	仮説検定(4) その他のノンパラメトリックな検定
第 14 週	分散分析
第 15 週	人口静態統計と人口動態統計／全体の学習の振り返り

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	健康相談活動の理論と実践				
担当者名	大平 曜子				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

学校教育における健康相談活動の果たす役割は大きく、その概念や特質を理解したうえで、子どものヘルスニーズに対処することが肝要です。受講者はこの授業を通じて、保健室の特質、養護教諭の職務の特質、その中で行う健康相談活動の基礎的概念を確認し、その方法を体験的に習得していくことができます。授業では、心の健康問題と身体症状や生活の変化の関わりを理解し、子どもを観る目を養い、判断力を養います。また、養護教諭の専門にどのように位置づけられるのか 相談の目標の方法、問題の捉え方、記録とプライバシーの保護、守秘義務と教育的配慮など、基本的事項をおさえつつ実践力をつけていきます。

《授業の到達目標》

- 健康相談活動の概念や役割について説明できる。
- 健康相談活動の基礎的理論を理解し、また、説明ができる。
- 子どものヘルスニーズがわかり、健康相談活動の進め方がわかる。
- 健康相談活動の実際を体験的に理解する。ロールプレーイングができる

《テキスト》

適宜プリントを配布する。

《参考文献》

適宜紹介する。

《成績評価の方法》

レポート課題（40%）、定期試験（60%）とし、100点満点で60点以上を合格とする。
授業実施回数の3分の1以上欠席した者は最終試験の受験資格はない。

《授業時間外学習》

関係図書にはできるだけ目を通す。
課題レポート作成時には、文献にあたり、科学的な報告になるよう、レポートの書き方を学んでおく。
授業で配布したプリントにはマーカーでしるしを入れるなど、理解を助けるよう工夫し、復習をおこなう。

《備考》

養護教諭をめざす者は、目的意識を持ち、主体的に授業に臨んで欲しい。演習形態の授業も加えながらすすめるが、主体的に参加されることが望まれる。また、多くがグループでの演習形態をとる予定であり、だれもが率先してリードできる力を培ってほしい。演習には必ずレポート課題の提出を求める。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション（授業の進め方）健康相談活動の基本的概念（定義、目的、意義）
第 2 週	養護教諭の職務と健康相談活動の関係
第 3 週	子どもの健康問題の現代的背景と状況
第 4 週	健康相談活動に関連する諸理論
第 5 週	健康相談活動のための基礎理論
第 6 週	健康相談活動のカウンセリングの技法
第 7 週	保健室における健康相談活動の実践（1） ロールプレーイング…インテーク、アセスメント
第 8 週	保健室の機能と施設設備、 保健室対応について
第 9 週	保健室における健康相談活動の実践（2） アセスメント、健康相談 ロールプレーイング…アセスメント、健康相談
第10週	心の健康問題に応じた対応の仕方
第11週	健康相談活動の記録と報告 連携の仕方
第12週	保健室における健康相談活動の実践（3） ロールプレーイング…面談の記録
第13週	健康相談活動の評価と改善
第14週	実践研究の意義
第15週	学習のまとめ

《Ⅱ群(養護・保健に関連する科目)》

科目名	看護学Ⅲ（疾患看護・介護を含む）				
担当者名	若井和子・齋藤 智江・井上満代				
授業方法	講義・演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

ねらい：養護教諭に対する期待は、健康教育や健康相談活動などの新たな役割が加わり一段と高まってきている。その期待に応じて、養護教諭に必要な基礎看護知識を発達段階に沿って学び、理解する。また、高齢化に向かって健康意識変化の重要性や科学的根拠についても考える。

概要：基礎看護学
発達（母性・小児）看護学
成人・老年看護学・援助論

《授業の到達目標》

養護教諭に必要な基礎看護知識を発達段階に沿って理解できる。また、高齢化に向かって健康意識変化の重要性や科学的根拠についても考えることができる。

《テキスト》

「養護教諭のための看護学」藤井寿美子他編 大修館書店

《参考文献》

「総合思春期学」清水凡生 編集 診断と治療社

「女性の看護学 母性の健康から女性の健康へ」吉沢豊予子、鈴木幸子編著 メヂカルフレンド社

《成績評価の方法》

母性看護25%、成人・老年看護25%、小児看護50%筆記試験とする

《授業時間外学習》

授業内学習の予習・復習及び演習準備

《備考》

筆記試験については後日知らせる。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	思春期看護の基礎知識（若井）
第2週	思春期における健康障害と看護（若井）
第3週	母性の概念および母性看護の基礎知識（若井）
第4週	女性のライフサイクルと各期のヘルスケア（若井）
第5週	成人看護の基礎知識(齋藤)
第6週	成人期における健康障害と看護のポイント(援助技術を含む)、骨折・外傷、生活習慣病等を中心に（齋藤）
第7週	老年期における健康障害と看護のポイント(援助技術を含む)、心不全・呼吸不全・脳梗塞等を中心に(齋藤)
第8週	病院実習に必要な基礎看護技術・救急処置 等(齋藤)
第9週	小児看護の基礎知識（井上）
第10週	小児各期の発達（乳児期・幼児期・学童期）（井上）
第11週	乳児期の健康障害と看護（井上）
第12週	幼児期の健康障害と看護（井上）
第13週	学童期の健康障害と看護（井上）
第14週	心の傷へのケア・学校感染症・小児のフィジカルアセスメント（井上）
第15週	小児のフィジカルアセスメント（井上）

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	看護学Ⅳ（ケーススタディ・治療別看護）				
担当者名	大平 曜子・加藤 和代				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

看護学については概論、Ⅰ、Ⅱ（症状看護）、Ⅲ（疾患看護・介護を含む）と積んできました。そこで、これまでの知識や技術の蓄積に加えて、実践の学として症例学習を加え、看護学の理解を深めます。授業では、基礎実習の経験を生かしつつ、次に控える臨床看護実習や養護実習に活かせる看護について考え、知識・技術を再確認し、科学的理解や分析的理解を習得し、看護実践能力の質の向上を目指します。

受講者は、具体的な看護過程の進め方を学び、実践方法を追求する中で、課題発見の力や問題解決能力をつけていくことが求められます。

《授業の到達目標》

- 看護学の基礎知識と基礎技術を習得している。
- 対象の健康問題全般を科学的・系統的に把握することができる。
- 主な治療・処置に伴う看護について、理解し説明できる。
- 臨床看護実習に向けて、各自の課題を見出し、課題解決に取り組むことができる。

《テキスト》

適宜プリントを配布する

《参考文献》

- 『最新看護学』中桐・天野・岡田 編著（東山書房）
 『実践基礎看護学』中西監修（建帛社）
 その他適宜紹介する

《成績評価の方法》

レポート課題（20%）、小テスト（10%）、課題研究の発表（10%）、定期試験（60%）とし、100点満点で60点以上を合格とする。

授業実施回数の3分の1以上欠席した者は評価対象者とは認めません。

《授業時間外学習》

課題レポートのために、関係図書に目を通しておく。

復習で、疑問や不確かな知識を明らかにしておく。

技術の確認や科学的理解のために、実習室の空き時間を利用して、積極的に練習をおこなってください。

養護教諭の専門性と関連性を持って理解するあるいは考える習慣を身につける。

《備考》

看護の最終段階であり、これまでの看護学の単位をすべて修得していることが望ましい。

本講座の出席状況は、この科目の単位認定に関与するだけでなく、「臨床看護実習」の受講資格に関わってくることを認識しておいてください。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション 臨床看護実習との関わり
第2週	症状別看護について 1
第3週	症状別看護について 2
第4週	子どもに多い病気と手当、学校の対応
第5週	バイタルサインなど基礎看護技術の復習 小テスト第1回
第6週	看護過程の実際、看護診断（判断）について
第7週	症状別アセスメント、情報収集とコミュニケーションについて 1
第8週	症状別アセスメント、情報収集とコミュニケーションについて 2
第9週	看護における倫理観と教職員の倫理観について 小テスト第2回
第10週	記録と報告について
第11週	安全と安楽について
第12週	授業のまとめ
第13週	臨床看護実習の目的の確認と導入
第14週	臨床看護実習における記録と報告について
第15週	臨床看護実習における症例学習について

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	臨床看護実習				
担当者名	大平 曜子・加藤 和代				
授業方法	実習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

養護教諭として必須事項である「看護学」の最終段階にあたります。これまで「看護学Ⅰ～Ⅳ」で学んだ事柄や「救急看護」などで得た技術、2年次の「臨床基礎実習」の学びを発展させ、患者とより深く関わり、高度医療や医療的ケアに触れながら、養護教諭としての専門性を高めていきます。受講者は、看護の仕事や役割に触れ、受け持ちの患者様を通して、看護過程の実際を体験的に学び、子どもたちの健康課題に養護教諭として何をどのようにするかの基本を学ぶことができます。また、実習を通して、自らの課題を明らかにすることもできます。受講者にとって、この実習が、看護の集大成にふさわしい実習になることを望みます。臨床看護実習は、春季休業期間中に配当病院にて、2週間をおこないます。

《授業の到達目標》

- 養護教諭の視点を持って、看護の仕事を理解し、その関連性を説明することができる。
- 病者理解と対応の中で、真の健康理解ができ、それを表現することができる。
- 患者の安全・安心の確保、コミュニケーションの取り方、情報収集の在り方などを学び、また、実践することができる。

《テキスト》

本学作成の「実習記録のノート」

配布プリント類

《参考文献》

- 『実践基礎看護学』 中西睦子監修(建帛社)
 - 『最新看護学』中桐・天野・岡田 編著(東山書房)
 - 『養護教諭のための看護学』藤井寿美子、山口昭子、佐藤紀久榮編 (大修館書店)
- その他、適宜紹介する

《成績評価の方法》

臨地実習、学内・学外（実習病院）の事前指導および事後指導（実習発表等）の欠席は、原則として認められません。実習ノートの記録（40%）、臨地実習の評価（20%）、事前事後指導の活動状況（実習発表を含む）（40%）とし、100点満点で60点以上を合格とする。

《授業時間外学習》

実習に向けて、文献等での知識の確認と定着に努める。
実習室の空き時間を利用して、基礎技術の習得に努める。
実習期間中の生活時間を想定し、規則正しい生活習慣を確立しておく。

《備考》

目的意識を持ち、主体的に授業に臨むこと。実習期間だけが実習ではなく、事前指導から事後の実践報告まですべてを含んで、実習であることを確認しておきたい。日程等は掲示にて連絡します。
『臨床基礎実習』は修得済みであること、『看護学Ⅱ』『看護学Ⅲ』は履修済みであることを原則とし、今期開講の『看護学Ⅳ』を履修し、8割以上出席していること。臨地実習の適否は、学科内委員会が判定します。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション、 臨床（臨地）実習の意義・必要性について
第 2 週	実習の目的と目標 実習中の注意事項
第 3 週	直前指導 予防衣や名札の配布など
第 4 週	病院における臨地実習（1日目）
第 5 週	病院における臨地実習（2日目）
第 6 週	病院における臨地実習（3日目）
第 7 週	病院における臨地実習（4日目）
第 8 週	病院における臨地実習（5日目）
第 9 週	病院における臨地実習（6日目）
第 10 週	病院における臨地実習（7日目）
第 11 週	病院における臨地実習（8日目）
第 12 週	病院における臨地実習（9日目）
第 13 週	病院における臨地実習（10日目）
第 14 週	事後の実習報告会に関する指導 礼状作成、実習内容の確認、報告会の持ち方
第 15 週	実習報告会

《Ⅱ群（養護・保健に関連する科目）》

科目名	救急看護（救急処置を含む）				
担当者名	加藤 知可子				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

特に幼児期、学童期、青年期に起こりがちな緊急を要する病気や外傷の一般的な救急処置について、講義と実習を行う。

《授業の到達目標》

学校管理下で突然の病気やけがが発生したときの処置の技術と的確に判断する能力を養う。すべて医療機関にゆだねたり、保護者のもとへ帰していると学校教育が保障できない。救急処置を行った上で医療機関へ救急車で搬送すべき事態か、保護者に受診を勧める状態なのか、学校で応急処置して様子を見るのか、あるいは問題がないと判断するのか、その判断と手技は養護教諭の専門性が問われるところである。これらは決して容易なことではなく、生命の危機とも背中合わせの重要な役割であることを認識し、その技術を修得する。

《テキスト》

『養護教諭講座・2 救急処置』杉浦守邦監修（東山書房）

《参考文献》

『人体の構造と機能 第1版』下正宗（医学書院）
新訂『目で見るからだのメカニズム』堺章著（医学書院）

《成績評価の方法》

筆記試験(70%)を中心に、技術チェック・出席状況やレポート提出・授業への意欲・実習態度(30%)を含めて評価する。

《授業時間外学習》

救急看護に関する図書・資料を読み、予習・復習を行う。

《備考》

学校で起りうるケガや病気を主に対象とするが、日常生活に役立つと思う。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	救急医療の基礎と考え方
第 2 週	安全管理、安全教育
第 3 週	観察 バイタルサインなどの観察の技術
第 4 週	内因性救急疾患 1 疼痛
第 5 週	内因性救急疾患 2 けいれん
第 6 週	内因性救急疾患 3 発熱 呼吸循環器
第 7 週	心身症
第 8 週	食中毒
第 9 週	急性腹症
第 10 週	外因性救急疾患 1 心肺蘇生
第 11 週	外因性救急疾患 2 異物、火傷、凍傷、擦過傷、切傷、刺傷、とげ、捻挫、脱臼、打撲
第 12 週	外因性救急疾患 3 骨折、咬傷、感電、溺水、誤嚥、服毒、シンナー・アルコール中毒
第 13 週	緊急度の高い症状 意識障害の処置、熱射病、脱水、チアノーゼ、ショック、アナフィラキシー
第 14 週	心肺蘇生法、運搬法・包帯法
第 15 週	学習のまとめと試験

《教職に関する科目》

科目名	教育史				
担当者名	岡本 洋之				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

本授業では、「教育」の関わる範囲を学校教育や社会教育だけでなく、子どもの遊び、子育て、大人と子どもの関係、海外留学など、広くとらえ、みなさんが日ごろ読んでいる本の中に教育史に関わる題材があふれていることをおさえる。

具体的には、受講生は日ごろ読んでいる本の中から、教育史的内容を含むものを1冊以上選び、その内容を紹介する「発表文献報告書」(1冊につきA4サイズ1枚)を提出する。こうして報告された本に関して、立候補(または指名)により決められた報告者が、本の中の教育史的内容と考察を順次口頭で発表する。

時間の関係で発表できなかった者には、同様の内容のレポートを課す。

なお受講生は全員、授業開始時までに必ずワープロソフト(Microsoft Word)の使用法を習得しておくこと。口頭発表のレジュメやレポートはワープロで作成したものに限定する。

《授業の到達目標》

教育史は、文字通り教育の歴史である。しかし歴史というと、無味乾燥な暗記物というイメージが付きまとう。高校までの誤った歴史教育がそのようなイメージを生んでしまったのは残念である。

本授業では、みなさんに暗記してもらうことは一つもない。その代わりに教育史に関する文献を自分で見つけ、それについて発表することにより、教育史を身近に感じてもらうことが、本授業の目的である。

《テキスト》

とくに定めない。

《参考文献》

題材として取り上げる本の例……『少年H』妹尾河童、『まる子だった』さくらももこ、『窓際のトットちゃん』黒柳徹子、『竜馬がゆく』司馬遼太郎、『車輪の下』ヘッセ、『星の王子さま』サンテグジュペリ、『上杉鷹山』童門冬二、『五体不満足』乙武洋匡、ほか。

《成績評価の方法》

「発表文献報告書」などの提出物(30%)と、発表への評価(70%)による。

《授業時間外学習》

自力で文献を読むことは言うまでもないが、その他は必要に応じて指示する。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション
第2週	発表文献選定のための個別指導(1) 文献リスト作り等
第3週	発表文献選定のための個別指導(2) 発表内容の詰め等
第4週	口頭発表(1) 文献例:『少年H』妹尾河童
第5週	口頭発表(2) 文献例:『まる子だった』さくらももこ
第6週	口頭発表(3) 文献例:『窓際のトットちゃん』黒柳徹子
第7週	口頭発表(4) 文献例:『竜馬がゆく』司馬遼太郎
第8週	口頭発表(5) 文献例:『車輪の下』H・ヘッセ
第9週	口頭発表(6) 文献例:『星の王子さま』A・サンテグジュペリ
第10週	口頭発表(7) 文献例:『上杉鷹山』童門冬二
第11週	口頭発表(8) 文献例:『五体不満足』乙武洋匡
第12週	口頭発表(9) 文献例:『エーミールと探偵たち』E・ケストナー
第13週	口頭発表(10) 文献例:『教育革命』東上高志
第14週	口頭発表(11) 文献例:『子育てごっこ』三好京三
第15週	口頭発表(12) 文献例:『ユンボギの日記』李潤福

《教職に関する科目》

科目名	保健・保健体育科教育法Ⅱ（保健教育法研究）				
担当者名	植田 誠治				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

保健科教育について、学習指導要領の検討、保健科教育研究の動向分析を通して考察し、その目標、方法、評価等についての発展的な理解を深める。

《授業の到達目標》

保健科教育の目標、内容、方法、評価についての今日的課題を分析・説明できる。保健科教育の目標、内容、方法、評価について、学習指導要領や保健科教育研究の動向を分析検討できるとともに、今日の考え方とその背景について考察できる。

《テキスト》

中学校教科書「新・中学校保健体育（706）」学習研究社、高等学校教科書「現代保健体育（006）」大修館書店
保健学習推進委員会「高等学校保健学習の指導と評価」日本学校保健会

《参考文献》

森昭三他「新保健の授業づくり入門」大修館書店

《成績評価の方法》

授業への出席、小課題への取り組み、試験を、4：2：4の割合で評価する。

《授業時間外学習》

授業中に指示したプリントや教科書の箇所を事前に予習しておくこと。

《備考》

プリントを多く配布するので、それを綴じるファイルを準備すること。授業中に小課題を出したり、次回まで予習課題を出したりもする。それらは成績に反映させるので積極的に取り組むこと。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	保健科教育カリキュラムの背景
第2週	保健科教育カリキュラムの動向－学習指導要領改訂の背景とその内容（1）－
第3週	保健科教育カリキュラムの動向－学習指導要領改訂の背景とその内容（2）－
第4週	保健科教育内容研究の動向
第5週	保健科教育の目標論
第6週	保健科教育の教材論
第7週	保健科教育の教材開発
第8週	保健科教育教材の検討（1）
第9週	保健科教育教材の検討（2）
第10週	保健科教育の評価論
第11週	保健の「思考・判断」を評価する評価問題
第12週	保健の評価問題の作成（1）
第13週	保健の評価問題の作成（2）
第14週	保健の評価問題の作成（3）
第15週	まとめ

《教職に関する科目》

科目名	保健科教育法Ⅱ（保健科教育法演習）				
担当者名	植田 誠治				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

今日の保健授業では、健康に関する基礎的な内容の理解のみならず、現代的健康課題への対応、実践力の育成、学習方法の工夫等が求められている。それらをふまえて教材研究をし、15分の模擬授業計画を作成し、実施し、カンファレンスを行い、保健教材を検討するとともに保健授業づくりの力量を高める。

《授業の到達目標》

保健の授業計画を立て、指導案を作成することができる。学生を児童・生徒にみ立て、15分間の模擬授業を行うことができる。模擬授業を批評し、そのよかった点、改善すべき点に意見をのべることができる。

《テキスト》

中学校教科書「新・中学保健体育（706）」学習研究社、高等学校教科書「現代保健体育（006）」大修館書店

《参考文献》

森昭三他「新保健の授業づくり入門」大修館書店

《成績評価の方法》

出席、模擬授業の作成実施とカンファレンスの積極的参加、レポートをおおむね3：4：3で評価する。

《授業時間外学習》

授業時間以外も使い各自じゅうぶんな検討をしてから模擬授業を行うこと。また修正案の作成にも取り組むこと。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーションーグループピング
第 2 週	テーマの決定と教材研究
第 3 週	模擬授業計画立案
第 4 週	模擬授業計画の精査
第 5 週	第 5 週～第 14 週 各自による模擬授業の実施とカンファレンス
第 6 週	各自による模擬授業の実施とカンファレンスは次の手順で行う。
第 7 週	①模擬授業の実施（15分）
第 8 週	②模擬授業の評価（授業評価表による評価と質的評価）（10分）
第 9 週	③授業者の指導案にもとづく解説と実際に行った感想（10分）
第 10 週	④カンファレンス（15分）
第 11 週	⑤まとめ（5分）
第 12 週	⑥修正案の作成
第 13 週	⑦修正案の検討
第 14 週	⑧修正後の模擬授業の実施
第 15 週	まとめ

《教職に関する科目》

科目名	保健体育科教育法Ⅱ（保健体育科教育法研究）				
担当者名	後藤 幸弘				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

本科目では「学習指導要領（保健体育編）」を理解するとともに、学校現場で生徒に運動、スポーツの技術を学習させる意義と教科内容（体育分野）を理解する。その上で、「球技」を中心に教育内容を押さえた「的確な判断に基づく行動力の育成」のできる先生になる力を習得することが目標である。換言すれば、高い専門性に基づき教育現場での教科指導法について創意工夫できる力を養う。

《授業の到達目標》

保健体育科教育法Ⅰに引き続き、保健体育科成立の文化基盤である「身体運動文化」への興味・関心、認識・理解を深め、専門知識の習得及び中学校保健体育科の授業担当者として求められる資質や実践的能力を身に付ける。

《テキスト》

文部科学省「中学校学習指導要領解説（保健体育編）」
文部科学省「高等学校学習指導要領解説（保健体育編）」
教科書・実技書（高校のとき使用のもので可）

《参考文献》

竹田清彦 他編、「体育科教育学の探求」大修館書店
高橋健夫 他編、「体育科教育学入門」大修館書店
日本体育学会（監修）「最新スポーツ科学事典」平凡社

《成績評価の方法》

- ・出席を重視します。欠席が開講時数の1/4を超えた場合は欠格対象者となる。
- ・出席数（授業における意欲・態度を含む）（20%）、レポート（20%）及び試験（60%）を総合的に評価する。

《授業時間外学習》

- ・各自で復習をする。

《備考》

- ・講義資料は適宜配布する。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション・保健体育科とは？
第 2 週	体育授業の構造【教師、教育内容（教材）、学習者】について
第 3 週	体育科の目標の変遷と考え方・体育の学力について
第 4 週	運動領域の考え方と教育内容について
第 5 週	普遍的教育内容について
第 6 週	技術について（運動技能の捉え方）
第 7 週	ルールと競争について
第 8 週	戦術について
第 9 週	球技の分類論と教育内容について
第 10 週	球技の学習指導法について
第 11 週	体づくり運動について①
第 12 週	体づくり運動について②
第 13 週	評価について
第 14 週	まとめ
第 15 週	まとめ

《教職に関する科目》

科目名	教育方法論				
担当者名	岡本 洋之				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

受講生は数名ずつのチームに分かれ、それぞれに割り当てられたキーワード（「アルコール」、「煙草」、「麻薬・覚醒剤」等）に関して、図書やインターネット等を使って調べたうえで、ポスターや紙芝居、冊子を作ったり、マイクロソフト・パワーポイント等を用いて模擬授業を行なう。

《授業の到達目標》

本授業では、「教育と情報」と題して、養護教諭の職務を遂行するのに必要な情報を収集（受信）、整理したうえで、子どもたちを前にしてプレゼンテーション（発信）を行なうのに必要な知識と技術（情報機器の活用を含む）を学ぶ。

《テキスト》

とくに定めない。

《参考文献》

- ・『学校図書館を活用する学び方の指導』 宅間紘一（全国学校図書館協議会）2002年
- ・『熱いビジネスチームをつくる4つのタイプ——コーチングから生まれた——』 鈴木義幸（ディスカヴァー・トゥエンティワン）2002年

《成績評価の方法》

提出物（20%）と、発表への評価（80%）による。

《授業時間外学習》

模擬授業づくりのためのチームでの作業。その他は必要に応じて指示する。

《備考》

本授業では、模擬授業を行う単位であるチームを、齊尾恭子・大阪国際大和田高等学校非常勤講師を中心とする「チーム学習研究会」（指導者：西之園晴夫・佛教大学教授）での教育学研究成果に基づいて編成している。その意味で本授業は、実験授業的色彩を帯びている。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション（心理テストを用いたチーム分け）
第 2 週	チームごとに分かれての作業（1） 授業の構想づくり
第 3 週	チームごとに分かれての作業（2） 情報機器の活用プラン作成等
第 4 週	模擬授業（1） テーマ例：骨粗鬆症／運動
第 5 週	模擬授業（2） テーマ例：栄養素／休養
第 6 週	模擬授業（3） テーマ例：生活習慣病と栄養／麻薬・覚せい剤
第 7 週	模擬授業（4） テーマ例：地産地消／アルコール
第 8 週	模擬授業（5） テーマ例：おやつのととり方／ガン
第 9 週	模擬授業（6） テーマ例：咀嚼力／循環器疾患
第 10 週	模擬授業（7） テーマ例：食物ピラミッド／ストレス対処法
第 11 週	模擬授業（8） テーマ例：子どもの食事／むし歯
第 12 週	模擬授業（9） テーマ例：発育と発達／カゼ
第 13 週	模擬授業（10） テーマ例：朝食欠食／タバコ
第 14 週	模擬授業（11） テーマ例：行政のととりくみ
第 15 週	まとめ（講義）

《教職に関する科目》

科目名	総合演習				
担当者名	廣岡 義之・木下 幸文				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	3年・I期

《授業のねらい及び概要》

本講義では、教員として横断的・総合的に学習活動を推進していくための方策について検討し、健康教育の役割とその実践について学習する。学校教育の目標は、児童生徒のもっている個性や能力などを最大限に伸ばすことである。その実現を図るために適切かつ効果的な指導をしていくうえで、児童生徒を的確に理解することが重要である。児童生徒への心のアプローチとしてグループワークを取り入れたり、自己理解を促す体験を取り入れたりするなど、教育現場において必要な児童生徒を理解するためのエクササイズを提示する。複数教員によるオムニバス方式で行い、それぞれの担当時間毎にテーマを持ってすすめる。また、担当者それぞれが内容に即した方法で評価する。

《授業の到達目標》

教育総合演習は、第一に、教育における研究のあり方や態度能力の育成をめざし、第二に、人類や社会全体に関する課題に焦点を当て、第三として、人類の健康をあらゆる角度から考える。担当者がそれぞれの専門の枠を越え、現代的課題を包括的に捉えながら、実践的能力の育成の機会とする。科学的理解と現代的現象の科学的把握、解決法に対する思考力の強化をめざす。人格形成と人間関係や母子関係、教育のシステムと環境、健康課題とライフスタイルなどを題材に、各教員が様々な角度から課題に迫る。

《テキスト》

広岡：武安宥編著、『ペレニタスの教育』

その他プリント等を適宜配布する。

《参考文献》

木下：『学校カウンセリングの考え方・進め方』福島脩美・樺沢徹二著（金子書房）2003

その他、適宜紹介する。

《成績評価の方法》

各教員が、それぞれ試験や受講態度等で評価した成績を総合的に判断する。

《授業時間外学習》

毎時間、授業内容の復習と予習を必要とする。

《備考》

（木下）：演習科目であり、各自の受講態度を重視する。人間に対する関心、身の回りのちょっとした疑問など、しっかりものを観ることを疑似体験したいと考えている。一部講義は、時間割外の時間に行う場合もある。

（廣岡）：この講義は、将来教職に就きたい人、教員免許状を取得したい人、あるいは教育問題に強い関心を持つ人達のためにあるので、その人達の学習の妨げになる「私語」や「遅刻」はしないこと。また特に自ら進んで講義内容に関心を持ち、関連事項を積極的に勉強する姿勢が必要である。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション 授業のすすめ方と評価法について、担当者から説明する。
第 2 週	（木下）：課題解決のプロセスについて
第 3 週	（木下）：人の身体の仕組みや健康について理解する（1）
第 4 週	（木下）：人の身体の仕組みや健康について理解する（2）
第 5 週	（木下）：演習のまとめと評価
第 6 週	（木下）：学校における教育課題 不登校の事例を通じて
第 7 週	（木下）：教育課題の支援体制 スクールカウンセラーの活動をとおして
第 8 週	（木下）：グループワーク 「子どもの心になって」自己理解・他者理解
第 9 週	（木下）：グループワーク 「子どもの心を聴く」傾聴訓練・コンセンサス
第 10 週	（木下）：フィードバック 実習のふり返しから、レポート作成
第 11 週	（廣岡）：人間と教育人間とは何か、 個人格の完成、 社会的人格の完成、 自己超越的存在としての人間
第 12 週	（廣岡）：幼児教育の原理と目的： 「法律」からみた保育原理、 乳幼児教育の原理、 「保育者」養成の原理、 「保育」の目的、 「保育教育」の課題と展望
第 13 週	（廣岡）：家庭教育： 教育の場所、 家庭の機能と教育、 家庭・家族像の変遷、 家庭教育の目的、 家庭の教育的雰囲気の意味
第 14 週	（廣岡）：社会教育： 「社会教育」の位置づけ、 「生涯学習社会」における社会教育、 社会教育における方法・形態
第 15 週	（廣岡）：環境教育： 地球と環境（自然・社会・文化・生命）、 文明と環境、 学校教育における「環境教育」、 今後の「環境教育」における課題と展望

《教職に関する科目》

科目名	中学校教育実習（事前事後指導を含む）				
担当者名	三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文				
授業方法	実習	単位・必選	5・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

教育実習は、大学で学んだ知識や理論、あるいは技術を実践の場で具体的に展開させうる能力を養う場である。実際の授業や生徒指導を行うことを通じて、今まで学んだ理論や知識を結びつけて、生き生きとした教育を展開することが期待される。教育現場実習における事前指導では、実習にできるだけ抵抗感なく臨めるようにするとともに、教育実習に際して求められる必要不可欠な基礎的な事柄を確実に身につける。教育実習の事後における指導では、教育実習を通して学んだことを、教育実習前の自己の教育観、学校観、生徒観等と対比しつつ整理しながら、各自が適正な自己評価と反省を踏まえて、今後の学校教育や教師の課題を認識し、その後の学部における教育、研究に十分役立つようにすることを目的としている。

《授業の到達目標》

本実習科目は、教育実習とそれにかかわる事前事後の指導を含めたものである。実際の教育現場での教育指導にあたり、教育実習の事前と事後に行う指導を通して、授業技術や生徒理解の方法について直接的、体験的な学習を深めるとともに、教育実習の目的の達成をより確かなものにする。

《テキスト》

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」
その他、適宜紹介する。

《参考文献》

文部科学省『中学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『高等学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『(各教科等の)学習指導要領解説編』東山書房

《成績評価の方法》

基本的に欠席は認めない。ただし止む得ない事情の時は必ず事前に連絡すること
教育現場実習校による評価(教育実習成績報告書)における「総合評価」(20%)
教育実習記録(実習ノート) (40%)
事前事後指導での活動 (40%)

《授業時間外学習》

<予習方法>

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」を熟読し、内容の理解する。内容時によってはその時の対応や 対処方法を考えまとめておく。

<復習方法>

学んだ内容のみならずその意味を理解し実習に備える能力を付けることを望む。

《備考》

中学校・高等学校の教育実習は学外実習であることを認識して、教職免許取得の意志を明確にし、主体的に実習に取り組むこと。教諭を目指す学生としてまた、生徒の範となる自覚と誇りをもって臨みたい。
教育実習を受講しようとするものは、兵庫大学教職課程の履修等に関する規定第4条を満たさなければならない。満たしていない場合、教育実習への参加を認めない。また、教育実習を行うに当たり、介護等体験を必ず済ませておくこと。

本科目は教育現場実習のほか、それに関わる事前事後指導も含んでおり、開講期は3年Ⅱ期から4年Ⅱ期までの3期となっている。また、必要に応じて時間外に補講を行う場合もある。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション (実習の心得・注意)
第 2 週	教育実習の意義と目的
第 3 週	教育実習への取り組み方 (教育実習校への挨拶、面接、実習上の諸注意など)
第 4 週	学習指導案の作成演習 (実習課題の明確化と方法について)
第 5 週	授業の教材研究・学習指導案の作成等 (模擬授業)
第 6 週	教育実習校でのオリエンテーション(指導方針等の確認、指導教員との打ち合せ等)
第 7 週	教育現場実習 1
第 8 週	教育現場実習 2
第 9 週	教育現場実習 3
第 10 週	教育現場実習 4
第 11 週	事後指導 (実習終了後の処理、礼状の作成)
第 12 週	事後研究 1 (自己評価と反省)
第 13 週	事後研究 2 (自己評価と課題の確認)
第 14 週	実習成果報告
第 15 週	教育実習のまとめと反省

《教職に関する科目》

科目名	高等学校教育実習（事前事後指導を含む）				
担当者名	三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文				
授業方法	実習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

教育実習は、大学で学んだ知識や理論、あるいは技術を実践の場で具体的に展開させうる能力を養う場である。実際の授業や生徒指導を行うことを通じて、今まで学んだ理論や知識を結びつけて、生き生きとした教育を展開することが期待される。教育現場実習における事前指導では、実習にできるだけ抵抗感なく臨めるようにするとともに、教育実習に際して求められる必要不可欠な基礎的な事柄を確実に身につける。教育実習の事後における指導では、教育実習を通して学んだことを、教育実習前の自己の教育観、学校観、生徒観等と対比しつつ整理しながら、各自が適正な自己評価と反省を踏まえて、今後の学校教育や教師の課題を認識し、その後の学部における教育、研究に十分役立つようにすることを目的としている。

《授業の到達目標》

本実習科目は、教育実習とそれにかかわる事前事後の指導を含めたものである。実際の教育現場での教育指導にあたり、教育実習の事前と事後に行う指導を通して、授業技術や生徒理解の方法について直接的、体験的な学習を深めるとともに、教育実習の目的の達成をより確かなものにする。

《テキスト》

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」
その他、適宜紹介する。

《参考文献》

文部科学省『中学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『高等学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『(各教科等の)学習指導要領解説編』東山書房

《成績評価の方法》

基本的に欠席は認めない。ただし止む得ない事情の時は必ず事前に連絡すること
教育現場実習校による評価(教育実習成績報告書)における「総合評価」(20%)
教育実習記録(実習ノート) (40%)
事前事後指導での活動 (40%)

《授業時間外学習》

<予習方法>

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」を熟読し、内容の理解する。内容時によってはその時の対応や 対処方法を考えまとめておく。

<復習方法>

学んだ内容のみならずその意味を理解し実習に備える能力を付けることを望む。

《備考》

中学校・高等学校の教育実習は学外実習であることを認識して、教職免許取得の意志を明確にし、主体的に実習に取り組むこと。教諭を目指す学生としてまた、生徒の範となる自覚と誇りをもって臨みたい。
教育実習を受講しようとするものは、兵庫大学教職課程の履修等に関する規定第4条を満たさなければならない。満たしていない場合、教育実習への参加を認めない。また、教育実習を行うに当たり、介護等体験を必ず済ませておくこと。

本科目は教育現場実習のほか、それに関わる事前事後指導も含んでおり、開講期は3年Ⅱ期から4年Ⅱ期までの3期となっている。また、必要に応じて時間外に補講を行う場合もある。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション（実習の心得・注意）
第 2 週	教育実習の意義と目的
第 3 週	教育実習への取り組み方（教育実習校への挨拶、面接、実習上の諸注意など）
第 4 週	学習指導案の作成演習（実習課題の明確化と方法について）
第 5 週	授業の教材研究・学習指導案の作成等（模擬授業）
第 6 週	教育実習校でのオリエンテーション(指導方針等の確認、指導教員との打ち合せ等)
第 7 週	教育現場実習 1
第 8 週	教育現場実習 2
第 9 週	教育現場実習 3
第 10 週	教育現場実習 4
第 11 週	事後指導（実習終了後の処理、礼状の作成）
第 12 週	事後研究 1（自己評価と反省）
第 13 週	事後研究 2（自己評価と課題の確認）
第 14 週	実習成果報告
第 15 週	教育実習のまとめと反省

《教職に関する科目》

科目名	養護実習（事前事後指導を含む）				
担当者名	大平 曜子・加藤 和代				
授業方法	実習	単位・必選	5・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

養護実習はこれまで大学で学んできた専門知識や理論、技術や感性を実践の場で展開し、実践する能力を養い、評価する機会です。4年次に実施される小・中・高等学校での養護実習の事前指導として、養護教諭の専門的職務内容、実習に必要とされる技術や知識など、学校現場に出ていくために不可欠な事柄を確実に身につけていきます。また、学校における養護教諭の役割と意義について再確認し、教師としての能力も同時に高めていきます。受講者は、希望とする養護教諭の免許取得に向けて、具体的な対策を講じる中で、自らの課題を確認し、心構えも含め、準備をしていくことができます。実習の事後指導では、実習での学びを確認し、実習以前の教育観、生徒観との比較や実習評価から、自らの課題を明らかにし、真の教育者として育つための対策を講じていきます。

《授業の到達目標》

養護実習の手引きにある実習目標を本講座の目標とする。教育現場での実践を通じて、養護の専門的知識を深め、技術を磨き、実習目標の達成を確かなものにする。自らの実習目標を定め、実習全般を通じて達成に努める。

《テキスト》

兵庫大学健康システム学科「養護実習の手引き」
『新学校保健実務必携』（第一法規）

《参考文献》

『児童・生徒の健康診断マニュアル』日本学校保健会（第一法規）
その他、適宜紹介する。

《成績評価の方法》

実習校評価（20%）、養護実習日誌の記録（40%）、事前事後指導での活動（実習報告会を含む）（40%）とし、100点満点で、60点以上を合格とする。

《授業時間外学習》

実習に向けて、文献等を参考に、知識の確認と定着をはかる。実習室の空き時間を利用して、基礎的技術の確認をおこなう。実習期間中の生活時間を想定し、規則正しい生活習慣を確立しておく。

《備考》

養護実習（5単位）の内の1単位分に相当する事前事後指導であることを意識し、主体的に授業に臨むこと。養護実習終了後、事後指導である実習報告会を終えた後に、最終評価を行なう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション 養護実習にむけての心構え
第2週	教育職員に関すること、学校教育に関すること、学校保健の考え方・進め方 養護教諭とは、保健室とは、保健室経営の仕方
第3週	保健室における対応の仕方及び記録の仕方
第4週	日常の学校環境衛生検査
第5週	定期健康診断の考え方・進め方
第6週	保健学習・保健指導案作成
第7週	保健日より作成（校種ごと）
第8週	学校事故と対応の仕方、記録の仕方
第9週	実習要項と実習ノートの内容確認
第10週	各自の実習目標について
第11週	実習手続きと関係文書の作成
第12週	（事後指導にあてる：実習の成果報告①）
第13週	（事後指導にあてる：実習の成果報告②）
第14週	（事後指導にあてる：実習の成果報告③）
第15週	（事後指導にあてる：実習のまとめ）

《認定心理士養成科目》

科目名	行動分析論				
担当者名	森田 義宏				
授業方法	講義	単位・必選	1・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

動物は環境に様々な行動によって働きかけ、その結果によって行動は支配される。この行動主義の考え方や理論を学ぶ。ある行動を支配する先行刺激と結果にもとづき、その行動をコントロールする行動分析（機能的分析）のテクニックについて、実験事例を通して詳しく学ぶ。授業では、レスポナントおよびオペラント条件づけ、強化随伴性、行動分析（機能的分析）、行動分析のテクニック、行動療法、認知行動療法などをテーマとして取り上げる。

《授業の到達目標》

動物にとって学習とは何か、学習の持つ意味を説明できる。
 代表的な学習理論について説明できる。
 強化と罰および汎化と分化の違いを説明できる。
 行動分析（機能的分析）の代表的なテクニックを説明できる。

《テキスト》

杉山尚子 「行動分析学入門—ヒトの行動の思いがけない理由」 集英社新書

《参考文献》

ポール・A. アルバート、アン・C. トルートマン、佐久間徹ほか訳 「はじめての応用行動分析」 二弊社

《成績評価の方法》

試験 70%、提出物 30%

《授業時間外学習》

日々の生活での、強化随伴性、消去、分化、汎化の事例を探し、報告する。
 ターゲット行動を決めて、行動分析を体験し、報告する。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	行動主義心理学のはじまりと発展
第 2 週	スキナーの考え方とオペラント条件づけ 1
第 3 週	スキナーの考え方とオペラント条件づけ 2
第 4 週	オペラント条件づけの研究法 1
第 5 週	オペラント条件づけの研究法 2
第 6 週	オペラント条件づけの研究法 3
第 7 週	オペラント条件づけによる言語獲得
第 8 週	フリーオペラントとディスクリートオペラント
第 9 週	応用行動分析 1 強化の適用 事例と問題点
第 10 週	応用行動分析 2 消去法適用 事例と問題点
第 11 週	応用行動分析 3 分化強化法の適用 事例と問題点
第 12 週	応用行動分析 4 罰の適用 1 レスポンスコスト法ほか
第 13 週	応用行動分析 5 罰の応用 2 罰適用の問題点
第 14 週	ソーシャルスキルの獲得 対人的ソーシャルスキルについて
第 15 週	スキナー理論への反証と認知行動療法について

《認定心理士養成科目》

科目名	社会心理学				
担当者名	北島 律之				
授業方法	講義	単位・必選	1・選	開講年次・開講期	3年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

社会心理学は、家族や友人との身近な社会、学校や会社といった日常的活動の舞台となる社会、さらには国際的なつながりの中における規模が大きな社会について、それらをどのように心に映し出し、それらにどのように働きかけるかを解き明かそうとしています。本講義では、社会心理学の知見を体系的に学習し、人と人が出会うところに生まれるいろいろな問題に対し深く洞察したり、遠く離れた世界で起きている現象さえも自分自身の心と関係していることを認識できたりする力を養います。「自己」「他者とのつながり」「自己間の影響過程」「社会の理解」などをテーマとし、個人と社会的状況との間に起こる様々な相互的過程を科学的に学びます。

《授業の到達目標》

- 「社会心理学」の心理学における位置づけを説明できる。
- 自己、他者とのつながり、自己間の影響過程、社会の理解といった主要テーマについて、理解し説明できる。
- 心理的または社会的現象のいくつかについて、社会心理学の知識を基に主体的に考えることができる。

《テキスト》

「いちばんはじめに読む心理学の本2 社会心理学 社会で生きる人のいとなみを探る」 遠藤由美編著 ミネルヴァ書房

《参考文献》

「図説心理学入門第2版」 齊藤勇編 誠信書房（教養科目「心理学」教科書）

《成績評価の方法》

ペーパーテスト 60% レポート・小テストなど 20% 受講態度 20%

《授業時間外学習》

- ・予習の方法
下の授業計画はテキストに準拠しています。該当する箇所を前もって読んでおくようにしてください。この段階では必ずしも内容を理解できている必要はありません。こういったテーマを学ぶか、前もって意識することが大切です。
- ・復習の方法
最初に、授業中に整理するプリントを中心に復習してください。その際、用語の意味を理解し覚えてください。また、テーマの目的に深く関係した課題を出しますので、レポートを作成するようにしてください。レポートは採点・添削後、返却します。

《備考》

- 本科目は、教養科目「心理学」を修得後に受講することを奨めます。
- 認定心理士の資格取得を目指す人は、受講するようにしてください。
- 心は一人ひとりに当たり前のようにあるため、自分で気づくことができる視点から自分の心を眺め、素朴にすべてを知っているつもりになってしまいがちです。自己中心主義的ではなく、なるべく謙虚に客観的に、心について考えようとするのが大切です。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	ガイダンス、「社会的動物としての人間と社会心理学」① 他者の心の理解
第 2 週	「社会的動物としての人間と社会心理学」② 集団での協力関係
第 3 週	「感情」① 感情の生起
第 4 週	「感情」② 感情の役割
第 5 週	「人を傷つける心、人を助ける心」① 他者への攻撃
第 6 週	「人を傷つける心、人を助ける心」② 他者への援助
第 7 週	「集団」① 集団とは何か
第 8 週	「集団」② 集団の行動への影響
第 9 週	「社会的自己」① 自己とは何か
第 10 週	「社会的自己」② 自己評価と自己制御
第 11 週	「社会的影響」 人が他者に及ぼす影響
第 12 週	「態度・説得」 態度とは何か、態度はどのように変わるか
第 13 週	「原因帰属と社会的推論・判断」① 他者の行動の理解
第 14 週	「原因帰属と社会的推論・判断」② 判断の特徴
第 15 週	「これまで何を学んだか」 まとめ

平成 19 年度 (2007 年度) 入学者

卒業要件単位数

科目区分		卒業必要単位	内必修単位と科目数	
基礎・教養科目		30 単位	12 単位	6 科目
専門教育科目	専門基礎科目群	8 単位	8 単位	4 科目
	I 群（運動・体育に関連する科目）	6 単位	—	—
	II 群（養護・保健に関連する科目）	6 単位	—	—
	卒業研究	6 単位	6 単位	2 科目
その他上記の科目区分のいずれかから		68 単位	—	—
合 計		124 単位	26 単位	12 科目

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成19年度（2007年度）入学者対象
 （ ）は兼担、[]は兼任講師

授業 科目 区分	授業科目の名称	授業 方法	単位数		運動 実践 指導者	教員免許関係			学年配当 (数字は週当り授業時間)								平成22年度の 担当者												
			必修	選択		養護	保健 体育	保健	1年		2年		3年		4年														
									I	II	I	II	I	II	I	II													
専 門 基 礎 育 科 目 群	基礎ゼミⅠ	演習	2						2																				
	基礎ゼミⅡ	演習	2							2																			
	健康科学序論	講義	2							2																			
	健康科学	講義	2		◇						2																		
	情報科学	講義		2						2																			
	基礎生物学	講義		2						2																			
	解剖学	講義		2		◇	○		□	2																			
	生理学	講義		2			○	△	□	2																			
	微生物学	講義		2			○		□			2																	
	生化学 (分子生物学を含む)	講義		2							2																		
	分子生物学演習	演習		2								2																	
	栄養学	講義		2			○		□	2																			
	食品学	講義		2			○			2																			
	栄養指導論	講義		2								2																	
	食生活論	講義		2										2															
	衛生学	講義		2			○	△	□	2																			
	公衆衛生学	講義		2				△	□			2																	
	医学概論	講義		2			○							2															
	社会福祉論	講義		2										2															
	ライフステージと健康	講義		2										2															
	心理学研究法	講義		2								2																	
	心理測定法	演習		2									2																
	心理学基礎実験	実験		2											4														
	心理学応用実験	実験		2												4													(北島 律之)
	認知心理学	講義		2								2																	
	健康心理学	講義		2		◇						2																	
	臨床健康心理学演習	演習		2									2																
	生涯発達心理学	講義		2										2															
臨床心理学(含カウンセリング)	講義		2										2																
教育心理学	講義		2			○		△	□			2																	
発達心理学	講義		2					△	□		2																		
ストレス科学論	講義		2											2															
人間関係論	講義		2												2														

◇は健康運動実践指導者養成科目

○は養護教諭免許必修科目、●は養護教諭免許選択科目

△は保健体育免許必修科目、▲は保健体育免許選択科目

□は保健免許必修科目、■は保健免許選択科目

※ 健康運動実践指導者養成講座予定科目として、表中の科目以外に集中講義として「運動障害と予防」を2年Ⅰ期に、「健康科学Ⅱ」の中で「発育・発達と老化」を履修する。

※ 「スポーツ実践Ⅰ」、「スポーツ実践Ⅱ」、「健康・体力づくり実践Ⅰ」、「健康・体力づくり実践Ⅱ」、「専門施設実習」は、定期授業の他に学外実習を行う。

※ 「レクリエーション (野外活動を含む)」は、4時間のうち3時間を学外実習にあてる。

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成19年度（2007年度）入学者対象
 （ ）は兼担、[]は兼任講師

授業科目区分	授業科目の名称	授業方法	単位数		運動実践指導者	教員免許関係			学年配当(数字は週当たり授業時間)								平成22年度の担当者					
			必修	選択		養護	保健体育	保健	1年		2年		3年		4年							
									I	II	I	II	I	II	I	II						
専門に 関連する 科目	体育原理	講義		2				△		2												
	運動の基礎	講義		2	◇			△			2											
	運動生理学	講義		2	◇			△	□			2										
	運動生理学演習	演習		2								2										
	運動栄養学	講義		2	◇			△				2										
	子ども運動学	講義		2				△			2											
	子ども運動学演習	演習		2				▲				2										
	スポーツ医学概論	講義		2									2									
	スポーツ心理学	講義		2					▲				2									
	障害者スポーツ論	講義		2																2		[田島 俊信]
	スポーツ史	講義		2																		
	スポーツ科学概論	演習		2										2								
	スポーツ科学演習	演習		2											2							
	トレーニング科学Ⅰ	演習		2								2										
	トレーニング科学Ⅱ	演習		2									2									
	体力測定と評価	講義		2	◇				▲		2											
	スポーツ実践Ⅰ	演習		3	◇				△		3											
	スポーツ実践Ⅱ	演習		3	◇				△			3										
	健康・体力づくり実践Ⅰ	演習		3	◇				△			3										
	健康・体力づくり実践Ⅱ	演習		3					▲				3									
	運動処方論	講義		2											2							
運動処方演習	演習		2												2							
健康・体力づくり指導法Ⅰ	演習		2	◇				△						2								
健康・体力づくり指導法Ⅱ	演習		2					▲							2							
専門施設実習	実習		2											④	④	④	④					徳田 泰伸・河野 稔
レクリエーション(野外活動を含む)	実習		2					△					④		④							樽本 つぐみ
科 保健に 関連する 科目	Ⅱ群 養護・ 保健	病理学概論		2								2										
	薬理学	講義		2				○							2							
	養護概説Ⅰ	講義		2				○			2											
	養護概説Ⅱ	講義		2				●				2										
	学校保健Ⅰ(小児保健・学校安全を含む)	講義		2				●	△	□		2										
	学校保健Ⅱ	講義		2				○	△	□			2									
	学校保健Ⅲ	講義		2				○	△	□				2								
	精神保健	講義		2				○	△	□			2									
	健康行動論	講義		2					△	□				2								
	健康統計学	講義		2					●	■					2							
	健康相談活動の理論と実践	講義		2					○							2						
	看護学概論	講義		2					○				2									
	看護学Ⅰ	演習		3					○					3								
	看護学Ⅱ(症状看護)	講義		2					○						2							
	看護学Ⅲ(疾患看護・介護を含む)	演習		3					○							3						
	看護学Ⅳ(ケーススタディ・治療別看護)	演習		2					○								2					
	臨床基礎実習	実習		1					○				2									
臨床看護実習	実習		2					○									4					
救急看護(救急処置を含む)	演習		3					○	△	□					3							

※ 学年配当欄において○囲みで表示している科目については、○囲みで表示されている学年・学期のいずれかにおいて登録、履修できる科目である。

カリキュラム年次配当表

健康システム学科 平成19年度（2007年度）入学者対象

（ ）は兼担、[]は兼任講師

授業 科目 区分	授業科目の名称	授業 方法	単位数		運動 実践 指導者	教員免許関係			学年配当 (数字は週当たり授業時間)								平成22年度の 担当者	
			必修	選択		養護	保健 体育	保健	1年		2年		3年		4年			
									I	II	I	II	I	II	I	II		
専 門 教 育 科 目	卒業研究Ⅰ	演習	3														3	三宅 一郎
	卒業研究Ⅰ	演習	3														3	大平 曜子
	卒業研究Ⅰ	演習	3														3	廣岡 義之
	卒業研究Ⅰ	演習	3														3	森田 義宏
	卒業研究Ⅰ	演習	3														3	徳田 泰伸
	卒業研究Ⅰ	演習	3														3	木下 幸文
	卒業研究Ⅰ	演習	3														3	加藤 和代
	卒業研究Ⅰ	演習	3														3	(本多 久夫)
	卒業研究Ⅱ	演習	3														3	三宅 一郎
	卒業研究Ⅱ	演習	3														3	大平 曜子
	卒業研究Ⅱ	演習	3														3	廣岡 義之
	卒業研究Ⅱ	演習	3														3	森田 義宏
	卒業研究Ⅱ	演習	3														3	徳田 泰伸
	卒業研究Ⅱ	演習	3														3	木下 幸文
	卒業研究Ⅱ	演習	3														3	加藤 和代
	卒業研究Ⅱ	演習	3														3	(本多 久夫)
	教 職 に 関 す る 科 目	教職の理解（研修、服務及び身分保障等を含む）	講義	2			○	△	□	2								
教育原理		講義	2			○	△	□	2									
教育史		講義	2			●	▲	■						2				
教育制度論		講義	2			○	△	□	2									
教育課程論		講義	2			○	△	□			2							
保健・保健体育科教育法Ⅰ（保健教育内容研究）		講義	2				△	□			2							
保健・保健体育科教育法Ⅱ（保健教育法研究）		講義	2				△	□				2						
保健科教育法Ⅰ（保健科教育教材研究）		講義	2					□				2						
保健科教育法Ⅱ（保健科教育法演習）		講義	2					□					2					
保健体育科教育法Ⅰ（保健体育科教育研究）		講義	2				△					2						
保健体育科教育法Ⅱ（保健体育科教育法研究）		講義	2				△						2					
道徳教育論		講義	2			○	△	□			2							
教育方法・技術論		講義	2			○	△	□				2						
教育方法論		講義	2			○								2				
生徒指導論（進路指導を含む）		講義	2			○	△	□			2							
教育相談（カウンセリングを含む）		講義	2			○	△	□		2								
総合演習		演習	2			○	△	□						2				
中学校教育実習（事前事後指導を含む）		実習	5					△	□								5	三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文
高等学校教育実習（事前事後指導を含む）		実習	3														3	三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文
養護実習（事前事後指導を含む）		実習	5			○											5	大平曜子・加藤和代

◇は健康運動実践指導者養成科目

○は養護教諭免許必修科目、●は養護教諭免許選択科目

△は保健体育免許必修科目、▲は保健体育免許選択科目

□は保健免許必修科目、■は保健免許選択科目

※ 教職に関する科目を修得しても、卒業要件単位には含まれない。

※ 教育職員免許状を取得するためには、上記科目のほか、教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目として、日本国憲法（2単位）、体育（2単位）、外国語コミュニケーション（2単位）、情報機器の操作（2単位）について、指定の科目を修得すること。

《専門基礎科目群》

科目名	心理学応用実験				
担当者名	北島 律之				
授業方法	実験	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

これまでに学んだ心理学の様々な知識を基に、自らが計画した研究を実際に行える力を養成することが目的です。受講生自身が基になる研究計画にアイデアを加えること、研究のための準備を行うことが求められます。現代的な手法による研究のいくつかを主体的に実践していきます。また、心理学基礎実験で身につけたレポート作成力を、より洗練されたものへと高めていきます。本科目での学びは、様々な領域や場面において、実際にデータを取得したり報告書を作成したりすることに役立ちます。

《授業の到達目標》

- 心理学の研究方法について、どのようなものがあり、それらがどういった特徴をもつか説明することができる。
- 心理学の各領域における研究について、自らのアイデアを加えながら実際に行うことができる。
- 洗練された研究レポートを作成することができる。

《テキスト》

なし(適宜, プリントを配布)

《参考文献》

- 『心理学の研究法 実験法・測定法・統計法 [改訂版]』 加藤司 北樹出版 <授業「心理測定法」のテキスト>
- 『心理学実験法・レポートの書き方』 西口利文・松浦均(編) ナカニシヤ出版 <授業「心理学基礎実験」のテキスト>
- 『認知心理学基礎実験入門』 兵藤宗吉・須藤智(編) 八千代出版
- 『研究事例で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データ解析』 小塩真司 東京図書

《成績評価の方法》

レポート 80% 受講態度 10% 発表 10%

《授業時間外学習》

授業時間中に完成させることができなかつたレポートを仕上げてください。レポートは必ず決められた日時までにメールに添付して送信してください。送信先のメールアドレスは授業中に示します。レポートは添削し、次回の授業の前半で講評を行います。

《備考》

- ・本科目を受講するためには、前もって「心理学基礎実験」を修得しておく必要があります。
- ・実験は少人数のグループで行うものであるため、欠席や遅刻はしないようにしてください。事情がある場合は必ず担当教員に連絡してください。
- ・すべての実験に参加しレポートを提出することが、単位修得のための最低条件です。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	「ガイダンス」 心理学基礎実験の復習, 本科目における実験の概略の説明.
第 2 週	「PC を刺激提示装置とした実験 1 : 意味記憶」 実験の説明, 実験, レポートの作成
第 3 週	「PC を刺激提示装置とした実験 2 : 潜在的連合テスト①」 実験に用いるソフトウェアの説明, 潜在的連合テストの体験, 実験計画
第 4 週	「PC を刺激提示装置とした実験 2 : 潜在的連合テスト②」 実験準備, 実験
第 5 週	「PC を刺激提示装置とした実験 2 : 潜在的連合テスト③」 レポートの作成
第 6 週	「生理指標を用いた実験 : 脳波の計測①」 脳波の説明, 脳波計測の体験
第 7 週	「生理指標を用いた実験 : 脳波の計測②」 計測器の使い方の説明, 実験計画
第 8 週	「生理指標を用いた実験 : 脳波の計測③」 実験準備, 実験
第 9 週	「生理指標を用いた実験 : 脳波の計測④」 レポートの作成
第 10 週	「質問紙を用いた調査 : 性格と価値観①」 特性論に基づく性格検査(YGPI, BigFive), 質問紙調査の説明
第 11 週	「質問紙を用いた調査 : 性格と価値観②」 研究計画
第 12 週	「質問紙を用いた調査 : 性格と価値観③」 調査
第 13 週	「質問紙を用いた調査 : 性格と価値観④」 統計解析ソフトの使い方の説明
第 14 週	「質問紙を用いた調査 : 性格と価値観⑤」 結果のまとめ, レポートの作成
第 15 週	「研究のプレゼンテーション」

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	障害者スポーツ論				
担当者名	田島 俊信				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

スポーツは、健常者だけが楽しみ豊かな生活と健康維持の為にやるものではなく、障害を持った者も健常者と同等に生活に不可欠なものである。障害者がスポーツをするには、健常者のように直ぐにスポーツが出来るのではなく、準備期間が必要であり、障害者スポーツの本来の意味を理解するとともに、理論と実技指導が出来なくてはならない。障害者がスポーツする事により、機能回復とスポーツがもたらす特性が、豊かな生活に結びつくので、一人でも多くの障害者がスポーツに参加させられるよう啓蒙・啓発活動と実践が行える指導者の養成をする。

(1.見る・聞く 2.考える 3.指導・用具 4.支援)

《授業の到達目標》

障害者にとって、体を動かす技術（機能）は健常者に比べ数段階劣っている事が多く、各筋肉の使い方、筋肉の強化を図りながら永年動かすことの少なかった各関節・靭帯を発達させる為、ストレッチ・スポーツマッサージ等と筋力トレーニングを併用し、運動可動域を高められ理論・実技指導者を養成する。

(1. 障害者に関する基礎知識 2. リハビリテーションにおける障害者スポーツ応用力 3. 障害者スポーツ指導方法論（指導・助言等）
4. 地域における障害者スポーツ支援 5. 障害者スポーツへの工夫と一般スポーツへの応用力 6. 障害者スポーツセンター指導員に関する職業への導入 7. 障害者スポーツと実社会への関わり)

《テキスト》

「障害者のスポーツ指導の手引き」第2次改訂版 (財)日本障害者スポーツ協会 編
(発行 (株)ぎょうせい)

《参考文献》

- ・「救急法講習会教本」 著者 日本赤十字社 出版 日本赤十字社 編
- ・「障害者のスポーツ指導書 技術II」 著者 日本身体障害者スポーツ協会 編
- ・全国身体障害者スポーツ大会「競技規則集」 著者 (財)日本身体障害者スポーツ協会 編
- ・全国身体障害者スポーツ大会「競技規則の解説」 著者 (財)日本身体障害者スポーツ協会 編

《成績評価の方法》

- 1.出席率 20%
- 2.レポートによる評価 80%
 - (1) 障害者スポーツに関するテーマを提示し各自が目的、方法、結果、考察の手順でまとめる。
 - (2) 知識を評価するのではなく、自らが調べ相手に合った指導法を柔軟に対応出来る方法考察する。
 - (3) 視点、内容、まとめをレポートに記載させ点数評価する。
 - (4) 授業終了後、学内規定日迄に提出。

《授業時間外学習》

実際に障害者に指導が望ましいが、障害者のメンタル面に影響を与える恐れがある事から、ウエルネスルームで健常者でもって、ウォーミングアップからクーリングダウン迄を指導体験を数回経験させ、反省を行い修正し、完成させる。

《備考》

障害者は好んで障害になったのではなく、健常者同様にスポーツを観たり、行なったりを望んでいる者も多く、障害者を指導出来る指導者の育成を図る。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	わが国における障害者スポーツの歴史と現状
第 2 週	スポーツと心理
第 3 週	障害者とスポーツ
第 4 週	レクリエーション概論
第 5 週	知的障害者スポーツ
第 6 週	競技スポーツと障害 (1)
第 7 週	競技スポーツと障害 (2)
第 8 週	スポーツ事故の予防と応急処置 (1)
第 9 週	スポーツ事故の予防と応急処置 (2) 実技 (消防署に救急救命士に依頼 レサシアン使用)
第 10 週	からだと障害
第 11 週	リハビリテーション 障害者スポーツ組織と大会
第 12 週	トレーニング論 身体障害者スポーツ指導者制度について
第 13 週	障害者スポーツ導入の為の実技指導
第 14 週	ウェイトトレーニング中心のトレーニング実技 (各筋肉の強化等)
第 15 週	スポーツと実社会の関わり 障害者スポーツ指導の組織づくり

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	専門施設実習				
担当者名	徳田 泰伸・河野 稔				
授業方法	実習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

民間・公共のスポーツ施設、病院・リハビリテーション等の医療施設、各種スポーツクラブ及びチーム、その他、指導教員が認めた施設・クラブ・チーム等において、社会人としての行動を身につけ、指導者としての心構え、指導法及び必要な技術的要策を理解する。

《授業の到達目標》

施設実習において、公共、民間、病院等の各種フィットネス施設における、スポーツ選手から生活習慣病予防改善に至る各種指導を実践することによって、その成果を確認すると共に、指導場面で発生する種々の問題の解決能力を養うことができる。

《テキスト》

適宜授業で配布する。

《参考文献》

ヘルス&フィットネス実務マニュアル「フィットネスクラブ内の秘実務業務の手引書」（現場マニュアル）

《成績評価の方法》

専門実習（60%）、平常点（20%）、小テスト（20%）
授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

《授業時間外学習》

予習としては、配布資料をよく読み、実習に備えておくこと。
復習としては、実習中の記録を適宜まとめておくこと。

《備考》

専門施設実習は1年次のスポーツ実践I・II、運動の基礎、健康スポーツ科学I、2年次の健康・体力づくり実践I・II、スポーツ医学概論、スポーツ科学演習、3年次の運動処方演習、スポーツ科学演習、健康・体力づくり指導法I・IIを十分に復習し予習しておくこと。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	概要、紹介、授業計画、当日スケジュール、評価、名簿確認作成 FC 業界論・市場＝H・FCA 民公企チーム、介病＝資格、能力[経.GSP]性格 P 可.将来
第2週	1：1 面接・実習先の決定「補足・健僧法」希望近い、半期計画、当日、評価、名簿確認、就職のための（理論・実技・実務とジム・スタジオ・プール・エンターテイナー）
第3週	施設実習の依頼＝希望.調査. 面談、オーディションー評価ー評価点（理論 総復習 Q&A） （対人交流コミュニケーション論）地図・プロット（施設）
第4週	施設実習の承諾＝写真ーB（実技 総復習 Q&A） （案内&W-up） 1. オーディション実技テストー採点 2. 面談＝病院、リハ、FC？ 3. HC
第5週	健康体力 管理システム（カルテ操作～プログラムデザイン）
第6週	事業計画の理解
第7週	施設、ハード面の習得
第8週	ソフトプログラム（ジム、スタジオ、プールの各種教室を指導する）
第9週	指導サービステクニックの習得（フロント～コーチ業）
第10週	安全管理の心得（CPR～施設管理、フロアー業務、メンテナンス）
第11週	施設利用、サインシステム、案内業務
第12週	年間イベント（企画と集客能力）
第13週	人事管理と業務評価
第14週	雑務（会議、機関誌、備品、文献等）
第15週	学習のまとめ

《Ⅰ群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	専門施設実習				
担当者名	徳田 泰伸・河野 稔				
授業方法	実習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

民間・公共のスポーツ施設、病院・リハビリテーション等の医療施設、各種スポーツクラブ及びチーム、その他、指導教員が認めた施設・クラブ・チーム等において、社会人としての行動を身につけ、指導者としての心構え、指導法及び必要な技術的要策を理解する。

《授業の到達目標》

施設実習において、公共、民間、病院等の各種フィットネス施設における、スポーツ選手から生活習慣病予防改善に至る各種指導を実践することによって、その成果を確認すると共に、指導場面で発生する種々の問題の解決能力を養うことができる。Ⅱ期においては学外での実習を重きを置いて指導力を高めていく。

《テキスト》

授業中に資料を配付する

《参考文献》

ヘルス&フィットネス実務マニュアル「フィットネスクラブ内の秘実務業務の手引書」（現場マニュアル）

《成績評価の方法》

専門実習（60%）、平常点（20%）、小テスト（20%）
 授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

《授業時間外学習》

予習としては、配布資料をよく読み、実習先ごとの注意事項を確認しておくこと。
 復習としては、最後に報告してもらうので、実習内容を記録しまとめておくこと。

《備考》

専門施設実習は1年次のスポーツ実践Ⅰ・Ⅱ、運動の基礎、健康スポーツ科学Ⅰ、2年次の健康・体力づくり実践Ⅰ・Ⅱ、スポーツ医学概論、スポーツ科学演習、3年次の運動処方演習、スポーツ科学演習、健康・体力づくり指導法Ⅰ・Ⅱを十分に復習し予習しておくこと。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション 15週の内容について話し合う。特に実習先の検討。学生の実習先の希望等について打ち合わせる
第2週	実習先でのシミュレーションを行い、実習場面で発生する問題等について議論する
第3週	各施設先（実習先）を想定し、2週目で発生した諸問題について検討し、指導力を養うための講義とする
第4週	学外実習 実習先での授業（第1回目 挨拶、打ち合わせ、仕事の内容等について現場指導者との協議に入る）
第5週	学外実習 実習先での授業（第2回目 仕事の内容について具体的な指示を受ける） 実践を行う
第6週	学外実習 実習先での授業（第3回目 仕事の実践を通して客と対応していく） 対応した内容について反省と明日への対応を検討する
第7週	学外実習 実習先での授業（第4回目 第3回目と同じく仕事の内容に対して反省と自分らしさの指導力を発揮していく）
第8週	学外実習 実習先での授業（第5回目 第4回目の内容をふまえ、自分の指導力が客に対していかに反応があるか否か反省し、明日への計画に生かしていく）
第9週	学外実習 実習先での授業（第6回目 第5回目と同じく指導力を発揮し、その内容をふまえ、何が足りないか常に客との繋がりを重視していく）
第10週	学外実習 実習先での授業（第7回目 第6回目の内容をふまえ、実習後半の指導力を反省し、理論と実践を身につけていく）
第11週	学外実習 実習先での授業（第8回目 第7回目をふまえ、理論と実践が片寄りのない指導になっているかを検討する）
第12週	学外実習 実習先での授業（第9回目 第8回目をふまえ、各自の指導力が客に対して、評価がどのようなものか確かめる）
第13週	本学での授業の中で実習先での諸問題等について報告し反省会を開く
第14週	実習先での実習録を作成し、全員でまとめる（各施設ごと）
第15週	各自の報告を発表形式で行う

《I群（運動・体育に関連する科目）》

科目名	レクリエーション（野外活動を含む）				
担当者名	樽本 つぐみ				
授業方法	実習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

レクリエーションの果たす役割について理解し、活動（イベント）を通して参加者の意欲を引き出し、魅力のある活動や運営の仕方を学びます。また学外でのキャンプ実習では、日常生活から離れて、自然の中で相互に協力し、自然に親しむ力を身につけ、指導者として野外活動の企画・立案・運営ができることを目指します。

本講義は、保健体育免許必修科目です。また4時間のうち3時間を学外実習で行います。

《授業の到達目標》

レクリエーション支援が、子どもから高齢者までさまざまな人々に多様な活動の機会を提供するための働きかけであることを理解した上で、オリジナリティのある活動を作成し、実践することを学びます。また、学外でのキャンプ実習では、自然の中での行動の仕方、共同生活を行うための必要な知識と技能、自然に親しむ心を養うことの重要性について学びます。

《テキスト》

テキストは使用しません。必要に応じて資料を配付します。

《参考文献》

「やさしいレクリエーション実践」川村皓章（日本レクリエーション協会）
 「野外活動テキスト」（日本野外教育研究会）

《成績評価の方法》

「評価の方法」・・・レポート、キャンプ実習の様子、発表
 「評価の割合」・・・レポート（30%）、キャンプ実習（50%）、発表（20%）
 ただし、授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の時は評価対象外とします。

《授業時間外学習》

15回の授業とは別に、学外でキャンプ実習（1泊2日）と集中講義でのレクリエーション指導を行います。詳細は第1週の授業時に説明しますので、必ず出席してください。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション
第2週	レクリエーションの基礎理論と支援の理論
第3週	レクリエーション組織の経営論とサービス論
第4週	ホスピタリティトレーニングとアイスブレイキング
第5週	キャンプ実習：事前指導（実施計画作成、グループ分け、役割分担など）
第6週	キャンプ実習：開講式、テント設営
第7週	キャンプ実習：オリエンテーリングまたは登山
第8週	キャンプ実習：食料調達（例）魚釣り、野草など
第9週	キャンプ実習：野外調理
第10週	キャンプ実習：自然観測
第11週	キャンプ実習：キャンプファイヤー
第12週	キャンプ実習：フォークダンスおよびキャンプソング
第13週	キャンプ実習：野外レクリエーション
第14週	キャンプ実習：テント撤去、閉講式
第15週	キャンプ実習：発表および事後指導

《卒業研究》

科目名	卒業研究 I				
担当者名	三宅 一郎				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

- (1)卒業研究は毎週、パソコンを使用して統計資料の入力と統計分析をおこなう。
- (2)インターネットを利用し、統計資料の収集をおこなう。
- (3)個別指導をおこなう。

《授業の到達目標》

自分で考える力を養う。電算機を使う仕事に自信を持てる技術を身につける。
統計分析の基礎が身につく。

《テキスト》

未定

《参考文献》

- 「健康・スポーツ科学のための研究方法」出村慎一（杏林書院）
- 「手ざわい科学論文の仕上げ方」田中 潔（共立出版株式会社）
- 「Excelによる健康・スポーツ科学のためのデータ解析入門」（出村慎一他）

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。

研究態度・分析力等（60%）

中間発表・中間報告書（40%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

与えられたテーマを文献研究等を通してまとめる能力を付けて欲しい。

<復習方法>

学んだ内容のみならずその意味を理解し今後の研究活動を実践する能力を付けて欲しい。

《備考》

出席は重視します。一年を通し、自分で研究したい統計資料を集め、統計的な分析を行います。

各自の研究は時間割に組まれている時間だけでなく、積極的に研究室に向き電算機を使い研究を進めてください。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	イントロダクション、卒業研究の進め方
第 2 週	テーマと研究計画について話し合う。
第 3 週	各自が決めた研究テーマについて、指導教官と具体的な計画を話しあう。
第 4 週	各自で研究を進める
第 5 週	各自で研究を進める
第 6 週	各自で研究を進める
第 7 週	各自で研究を進める
第 8 週	研究の途中経過発表（1）
第 9 週	各自で研究を進める
第 10 週	各自で研究を進める
第 11 週	各自で研究を進める
第 12 週	各自で研究を進める
第 13 週	各自で研究を進める
第 14 週	各自で研究を進める
第 15 週	研究の途中経過発表（2）

《卒業研究》

科目名	卒業研究 I				
担当者名	大平 曜子				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

健康科学の基礎理論をもとに、これまで学んだ諸科学の知識や技法を参考に、研究という視点で見直し、明らかにしたいことは何かを考えます。主に、人間を対象とする実証的研究をおこなうこととなりますが、基本的な方法や取り組み方は心理学の研究手法を参考にし、一般的な研究の進め方を学んでいきます。

受講者は、卒業研究を健康科学を修めるための集大成と位置づけ、これまでの学習内容を丁寧に見直すとともに、研究テーマや課題への接近方法には独自性も加えて、主体的に取り組むことが求められます。

《授業の到達目標》

- 研究テーマにそって、研究計画を立てることができる。また、それを実行できる。
- 研究方法を学び、文献検索や科学的な調査・実験等の実施、情報やデータの分析ができる。
- 研究の目的や研究方法を説明できる。
- 中間報告のためのレジュメを作成することができる。

《テキスト》

研究進度に応じて、適宜プリントを配布する。

《参考文献》

適宜参考となる文献や資料を紹介する。

《成績評価の方法》

研究状況を 4 週目～10 週目にかけて毎回レポートにして報告（60%）

I 期終了時に研究の中間発表（40%）

100 点満点で 60 点以上を合格とする。

《授業時間外学習》

自分の興味関心の対象を明確にするため、関連図書や論文の検索をし、読んでおく。

研究内容をノートに整理し、ゼミで発表するための研究状況の報告書を作成する。

《備考》

研究室を有効に活用し、各自で研究を進めていく。研究手法によって進行が異なるが、できるだけ早く取り掛かることを勧める。指示を待つのではなく、主体的に取り組むこと。そこには、積極的に相談することも含まれる。欠席等の連絡は必須。担当者の研究室メールアドレス yohira@hyougo-dai.ac.jp

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション 研究の進め方、メンバーの紹介。
第 2 週	問題意識の発生と研究方法について、基本的知識と研究のスキルを学ぶ。 文献検索、先行研究の検索について学ぶ。
第 3 週	問題意識から研究課題へ、研究計画の作成。
第 4 週	①各自の研究を計画的に進める。1 週間の研究内容の報告。
第 5 週	②各自の研究を計画的に進める。1 週間の研究内容の報告。
第 6 週	③各自の研究を計画的に進める。1 週間の研究内容の報告。
第 7 週	④各自の研究を計画的に進める。1 週間の研究内容の報告。
第 8 週	⑤各自の研究を計画的に進める。1 週間の研究内容の報告。
第 9 週	⑥各自の研究を計画的に進める。1 週間の研究内容の報告。
第 10 週	⑦各自の研究を計画的に進める。1 週間の研究内容の報告。
第 11 週	レジュメの作成。
第 12 週	発表方法について検討し、準備する。
第 13 週	研究成果の中間発表（1） レジュメに基づく発表。
第 14 週	研究成果の中間発表（2） レジュメに基づく発表。
第 15 週	前半の研究をふりかえり、後半に向けて研究計画を作成する。

《卒業研究》

科目名	卒業研究 I				
担当者名	廣岡 義之				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

教育人間学的手法の基礎を学ぶために、教育学の文献を解説する。さらに各人のテーマをゼミで発表することを通じて、卒業論文の準備の一環とする。

《授業の到達目標》

幅広い教育学的テーマあるいは焦眉の教育問題のなかから、各人が興味・関心をひく題材を選び、主として文献研究を進めつつ、自ら探究し問題を解決することができる。

《テキスト》

適宜指示する。

《参考文献》

授業で紹介する。

《成績評価の方法》

口頭発表 (50%)。
中間報告のレポート (50%)。

《授業時間外学習》

毎時間、授業内容の復習と予習を必要とする。

《備考》

研究テーマの決定や研究の進捗については日常的に打ち合わせをおこなう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション 研究の進め方、メンバーの紹介。
第 2 週	論文の書き方、文献の検索の仕方についての指導。
第 3 週	研究課題の設定、研究計画の作成。
第 4 週	各自の研究を計画的に進めて、ゼミで報告する。
第 5 週	各自の研究を計画的に進めて、ゼミで報告する。
第 6 週	各自の研究を計画的に進めて、ゼミで報告する。
第 7 週	各自の研究を計画的に進めて、ゼミで報告する。
第 8 週	各自の研究を計画的に進めて、ゼミで報告する。
第 9 週	各自の研究を計画的に進めて、ゼミで報告する。
第 10 週	各自の研究を計画的に進めて、ゼミで報告する。
第 11 週	各自の研究を計画的に進めて、ゼミで報告する。
第 12 週	研究成果の中間発表。
第 13 週	研究成果の中間発表。
第 14 週	今後の研究計画の作成。
第 15 週	今後の研究計画の作成。

《卒業研究》

科目名	卒業研究 I				
担当者名	森田 義宏				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

これまで学んできた専門領域の知識をもとに、自ら興味関心あるテーマを決め、必要な文献・資料を収集し、読み解き、必要に応じて調査もおこない、データを分析し、それらを総合して卒業論文の中間発表ができるまでの力を養う。
テーマを設定するため、アイデアの整理を行う。次に、各自テーマを絞り込む。絞り込んだテーマに近い内容の論文を読み、自分の研究計画を立案する。その間、論文の書き方、まとめ方を学び、論文作成に必要な文献資料やデータの収集を行う。データ整理に必要な統計知識、統計パッケージ SPSS の使い方を学ぶ。担当教員の指導のもと卒業論文の作成をめざす。

《授業の到達目標》

興味・関心を持った事柄について、正確な文章で表現できる。
興味・関心を持った内容について、専門的な用語で表すことができる。
キーワードに基づいて文献検索システムを操作し、必要な情報を収集することができる。
調べた内容について整理し、テーマに沿ってプレゼンテーションできる。

《テキスト》

使用しない

《参考文献》

論文のまとめ方

《成績評価の方法》

中間レポート30点、最終レポート40点、プレゼンテーション30点

《授業時間外学習》

授業中に指摘された点に留意し、文献や情報を集める。
授業中に指摘された点に留意し、ポートを見直し、推敲する。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション
第 2 週	論文の書き方 1
第 3 週	論文の書き方 2
第 4 週	研究テーマの絞り込み 1 図書館で文献・資料を探す
第 5 週	研究テーマの絞り込み 2 web で文献・資料を探す
第 6 週	研究テーマの絞り込み 3 文献検索サイトで文献・資料を探す
第 7 週	調べたことのまとめと研究計画 1
第 8 週	調べたことのまとめと研究計画 2
第 9 週	調べたことのまとめと研究計画 中間発表準備
第 10 週	調べたことのまとめと研究計画 中間発表会
第 11 週	研究計画に沿った資料収集と解読 1
第 12 週	研究計画に沿った資料収集と解読 2
第 13 週	研究計画に沿った資料収集と解読 3
第 14 週	研究計画に沿った資料収集と解読 4
第 15 週	前期のまとめ

《卒業研究》

科目名	卒業研究 I				
担当者名	徳田 泰伸				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

- (1) 卒業研究は毎週、パソコンを使用して統計資料の入力と統計分析をおこなう。
- (2) インターネットを利用し、統計資料の収集をおこなう。
- (3) 個別指導をおこなう。

《授業の到達目標》

自分で考える力を養う。電算機を使う仕事に自信を持てる技術を身につける。
統計分析の基礎が身につく。

《テキスト》

その都度指示する

《参考文献》

授業で紹介する

《成績評価の方法》

研究態度・分析力等（60%）、中間発表・中間報告書（40%）
授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

《授業時間外学習》

話し合った課題・問題等について文献資料等十分に収集し読み分析し次回までにまとめておく

《備考》**《授業計画》**

週	授 業 計 画
第 1 週	イントロダクション、卒業研究の進め方
第 2 週	テーマと研究計画について話し合う
第 3 週	各自が決めた研究テーマについて、指導教官と具体的な計画を話し合う
第 4 週	各自で研究を進める
第 5 週	各自で研究を進める
第 6 週	各自で研究を進める
第 7 週	各自で研究を進める
第 8 週	研究の途中経過発表（1）
第 9 週	各自で研究を進める
第 10 週	各自で研究を進める
第 11 週	各自で研究を進める
第 12 週	各自で研究を進める
第 13 週	各自で研究を進める
第 14 週	各自で研究を進める
第 15 週	研究の途中経過発表（2）

《卒業研究》

科目名	卒業研究 I				
担当者名	木下 幸文				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

研究実施計画・方法等の立案
 研究実施準備（課題に関連する分野の文献調査・予備研究等）
 予備実験の実施
 研究の中間報告

《授業の到達目標》

卒業研究では、これまで学んできた知識をもとに、運動科学に関する研究活動を通じて、より専門的な知識を深める。また、自ら問題を発見してその解決法を思考し、実際にその効果を確認するために実験を行いながら基本的な研究能力と問題解決能力を培うことが出来る。

《テキスト》

特に指定しない

《参考文献》

その都度、適宜紹介する

《成績評価の方法》

日々の研究に望む姿勢(50%)と中間報告会の内容(50%)から総合的に判断する。

《授業時間外学習》

研究内容について日々精査すること。

《備考》

研究の内容や進捗状況によっては、時間割外に行うこともありうる。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	卒業研究の進め方について（オリエンテーション）
第 2 週	研究テーマの設定
第 3 週	研究内容の構築
第 4 週	研究内容の構築
第 5 週	各自で研究を進める
第 6 週	各自で研究を進める
第 7 週	各自で研究を進める
第 8 週	各自で研究を進める
第 9 週	各自で研究を進める
第 10 週	各自で研究を進める
第 11 週	各自で研究を進める
第 12 週	各自で研究を進める
第 13 週	各自で研究を進める
第 14 週	各自で研究を進める
第 15 週	中間報告会

《卒業研究》

科目名	卒業研究 I				
担当者名	加藤 和代				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

ストレスの多い現代社会にあっては、子どもも大人も多くの人々が心や体に課題を抱えていると言われている。社会情勢や学校教育の諸問題も心や体の健康に関するものは多い。これまでに学んだ心とからだの健康科学の基礎理論をもとに、自分が関心を持つ社会や教育の事象に目を向け、テーマに沿った基本的な研究方法を学び、計画的に自ら探求していく態度を養うことをめざします。毎回意見交換しながら学びあうことも重視していきます。

《授業の到達目標》

- 研究に関する資料を収集し、研究計画を立てることができる。
- 問題意識に基づいて、明らかにしたいことを明確に表現できる。
- テーマに関する参考文献、先行研究、統計資料などから意味や問題を読みとることができる。

《テキスト》

使用しない

《参考文献》

各自の研究テーマに合わせて、必要な文献をその都度紹介する。

《成績評価の方法》

平常点（進捗状況、意欲・態度）50%、研究成果（中間発表）50%から総合的に評価する。

《授業時間外学習》

計画的に、積極的に研究室、図書館を活用すること。
研究の進捗状況を報告書で毎授業日に提出すること。
準備学習については、事前に個別に具体的な指示を出す。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション 卒業研究の進め方
第 2 週	研究動向、先行研究、文献等の検索方法について
第 3 週	各自で計画的に研究を進める（文献調査等により問題点を探索）
第 4 週	経過報告とその検討（研究領域の設定）
第 5 週	経過報告とその検討（研究領域の設定）
第 6 週	経過報告とその検討（仮テーマの決定）
第 7 週	経過報告とその検討（研究目的明確化）
第 8 週	経過報告とその検討
第 9 週	経過報告とその検討（研究の枠組みの検討）
第 10 週	経過報告とその検討
第 11 週	経過報告とその検討
第 12 週	研究成果の中間発表（1）
第 13 週	研究成果の中間発表（2）
第 14 週	今後の研究計画作成
第 15 週	まとめ

《卒業研究》

科目名	卒業研究 I				
担当者名	本多 久夫				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・I期

《授業のねらい及び概要》

これまでの授業ではすべき事がきまっでいて、それを教えられた通りに正確に速くできるかどうかの評価された。卒業研究では何を行ったらいかがを自分で考える。こんなおもしろいテーマがあることを4年生が見つけて研究したのか！とまわりを驚かすようなテーマを見つけてほしい。このテーマ発掘能力はこれからの人生で大いに役立つ。

《授業の到達目標》

自分が関心をもつ現象を深く分析して、そこにひそむ機構を考え、その機構に基づいたモデルをつくる。次にモデルを使ってシミュレーションをコンピューターを用いて行う。この結果を見て、自分の考えた機構の当否を議論する。これを繰り返しモデルを洗練していく。こうして物事を鋭く見る経験を積む。

研究対象は、モデルがつくれてコンピューターで扱えるものなら、広い範囲から選んでかまわない。スポーツ関連、身体の動き、心理学、栄養学など。スポーツで扱うボール、円盤、槍などの動き、バット、クラブ、棒高跳びのポールなどの変形、グラウンド、コート、スロープ、プールなどの形、モデル化が可能なら歩く、走る、泳ぐ、飛ぶなどの身体の形、筋肉の形、骨の配置なども研究の対象になるだろう。心理学での錯視(イリュージョン)の研究も可能かも知れない。栄養の摂取、消化、吸収などを化学反応などの組み合わせで表現するモデルもあるだろう。

《テキスト》

なし。研究の経過を記録するノートをつくること

《参考文献》

必要に応じて探索する。

シミュレーションに使う数学ソフト Mathematica 関係のものは下記のを挙げておく。

- 『Mathematica Second Edition』 S. ウルフラム著 アジソン・ウエスレイ パブリッシャーズ・ジャパン 1992
(図書館または情報科学センターから借用できる)
- 『Mathematica ビギナーズガイド』 T.W.グレイ, J.グリーン著 トップラン 1998
- 『Mathematica 実践的アプローチ』 ブラックマン著 トップラン 1992
- 『Mathematica で数学を一入門編一』 守谷良二著 海文堂 1993

《成績評価の方法》

研究テーマの決定や研究進捗について日常的に打ち合わせを行う。この時の様子(5割)および中間レポート(5割)によって評価する。

(受講する者は数学を使うことや数理的考えに意欲があるか、少なくとも使うことに耐えられる者であること。)

《授業時間外学習》

研究という行為には、時間内・時間外の区別はない。散歩したり、人との会話・・・あらゆるときに研究のヒントは生じてくる。これを大切に研究に生かすこと。授業時間は、この一週間の思いつきを整理したりまとめたり、指導教員との議論に使う。

《備考》

これからの世の中で求められることは、与えられた問題をどれだけ正確に、どれだけ速くできるかよりも、それは程々でもよいから、解くべき問題は何かを自分で見つけることである。考えようによれば楽しい時代になってきた。卒研でこれを体験してみたら？

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	テーマについての調査・打ち合わせ
第 2 週	テーマについての調査・打ち合わせ
第 3 週	テーマについての調査・打ち合わせ
第 4 週	テーマについての調査・打ち合わせ
第 5 週	プログラム言語など必要なものの学習
第 6 週	プログラム言語など必要なものの学習
第 7 週	プログラム言語など必要なものの学習
第 8 週	プログラム言語など必要なものの学習
第 9 週	プログラム言語など必要なものの学習
第 10 週	シミュレーションのプログラム作りおよび実行
第 11 週	シミュレーションのプログラム作りおよび実行
第 12 週	シミュレーションのプログラム作りおよび実行
第 13 週	シミュレーションの実行および改良
第 14 週	シミュレーションの実行および改良
第 15 週	中間レポート作製・提出

《卒業研究》

科目名	卒業研究Ⅱ				
担当者名	三宅 一郎				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

- (1)卒業研究は毎週、パソコンを使用して統計資料の入力と統計分析を行う。
- (2)論文の書き方について学ぶ。
- (3)インターネットを利用し、統計資料の収集をおこなう。
- (4)個人指導をおこなう。

《授業の到達目標》

自分で考える力を養う。電算機を使う仕事に自信を持てる技術を身につける。
統計分析の基礎が身につく。発表能力を身につける。報告書作成方法を習得する。

《テキスト》

未定

《参考文献》

- 「健康・スポーツ科学のための研究方法」出村慎一（杏林書院）
 「手ぎわよい科学論文の仕上げ方」田中 潔（共立出版株式会社）
 「Excelによる健康・スポーツ科学のためのデータ解析入門」（出村慎一他）

《成績評価の方法》

評価の基準は以下の通りである。毎時間積極的かつ真面目に授業に参加することを望む。
 研究態度・分析力等（60%）
 論文作成・プレゼンテーション能力（40%）

《授業時間外学習》

<予習方法>

与えられたテーマを文献研究等を通してまとめ、自己の研究活動と有効に結びつける能力を付けて欲しい。

<復習方法>

学んだ内容や指摘されたことのみならず、その意味を理解し今後の研究活動を実践する能力を付けて欲しい。

《備考》

一年を通し、自分で研究したい統計資料を集め、統計的な分析を行います。卒業する頃には統計分析に関して自信が持てるように努力してください。各自の研究は時間割に組まれている時間だけでなく、積極的に研究室に向き電算機を使い研究を進めてください。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	卒業研究の問題点について話し合い
第 2 週	各自で研究を進める
第 3 週	各自で研究を進める
第 4 週	各自で研究を進める
第 5 週	各自で研究を進める
第 6 週	中間発表(1)、各自で研究を進める
第 7 週	各自で研究を進める
第 8 週	各自で研究を進める
第 9 週	各自で研究を進める
第 10 週	中間発表(2)、各自で卒論の作成をおこなう
第 11 週	卒論の作成
第 12 週	卒論の作成
第 13 週	卒論の作成
第 14 週	卒業研究発表会の準備と事前発表会
第 15 週	卒業研究の発表会

《卒業研究》

科目名	卒業研究Ⅱ				
担当者名	大平 曜子				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

研究が進むにつれて研究上の課題も変化してきます。これまで収集した文献や資料を有効に利用し、仮説・分析・考察といった研究の流れの中で、論理的に考察していきます。研究活動において、ゼミ生同士の意見交換は重要な要素です。相互に刺激し合い、ゼミを通じて学び合うことができます。

実証科学としての心理学では研究方法に統計的な分析・解析が必要になる場合があります。さまざまな方法を積極的に取り入れ、研究の公共性、科学性、倫理性など、研究として成立するために備えておくべき諸条件を理解したうえで、論文を完成させていきます。

《授業の到達目標》

- 研究計画にそって、研究を進めることができる。
- 科学的な研究方法をとり、調査・実験等の結果を有効に利用できる。
- 論文形式で、研究成果をまとめ上げることができる。
- 研究の目的や研究方法を説明できる。
- 最終報告のレジュメを作成できる。

《テキスト》

研究進度に応じて、適宜プリントを配布する。

《参考文献》

適宜参考となる文献や資料を紹介する。

《成績評価の方法》

研究状況をレポートにして報告（20%）、論文の提出（40%）、最終の卒業研究発表会で発表（40%）
100点満点で60点以上を合格とする。

《授業時間外学習》

文献検索や調査・実験など、各自の研究方法に基づく研究の推進。
研究内容をノートに整理し、ゼミで研究状況を報告するためのレポートを作成する。

《備考》

研究室を有効に活用し、自己の研究を進めていく。すべてにおいて、できるだけ早く取りかかることを勧める。自己研鑽と持続性が求められるが、ゼミ生同士協力し、発想の柔軟性と積極性で楽しみながら進めるとよい。

欠席等の連絡は必須。担当者の研究室メールアドレス yohira@hyogo-dai.ac.jp

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	研究経過の報告 オリエンテーション、研究経過の報告
第 2 週	各自の研究計画の作成
第 3 週	論文のまとめ方について
第 4 週	各自の研究を計画的に進める。研究内容の報告と論文の作成。
第 5 週	各自の研究を計画的に進める。研究内容の報告と論文の作成。
第 6 週	各自の研究を計画的に進める。研究内容の報告と論文の作成。
第 7 週	論文の作成と添削。
第 8 週	論文の作成と添削。
第 9 週	論文の作成と添削。
第 10 週	論文の作成と添削。
第 11 週	卒業論文の提出
第 12 週	研究成果の発表の準備 レジュメの作成
第 13 週	研究成果の発表の準備 スライドの作成（パワーポイントを使用）
第 14 週	卒業研究の発表会
第 15 週	論文の修正。発表の振り返り。

《卒業研究》

科目名	卒業研究Ⅱ				
担当者名	廣岡 義之				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

教育人間学的手法の基礎を学ぶために、教育学の文献を解説する。さらに各人のテーマをゼミで発表することを通じて、卒業論文の準備の一環とする。また学びあうために、他者との意見交換を頻繁におこなう。

《授業の到達目標》

幅広い教育学的テーマあるいは焦眉の教育問題のなかから、各人が興味・関心をひく題材を選び、主として文献研究を進めつつ、自ら探究し問題を解決することができるようにする。

《テキスト》

適宜指示する。

《参考文献》

適宜指示する。

《成績評価の方法》

口頭発表 (50%)。
論文の完成 (50%)。

《授業時間外学習》

自分で取り組むテーマについて毎週、ゼミで報告するための学習が求められる。

《備考》

自己研鑽と持続性が要求される。研究テーマの決定や研究の進捗については日常的に打ち合わせをおこなう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	研究経過の報告 およびオリエンテーション
第 2 週	各自の研究計画の作成
第 3 週	各自の研究を計画的に進める
第 4 週	各自の研究を計画的に進める
第 5 週	各自の研究を計画的に進める
第 6 週	各自の研究を計画的に進める
第 7 週	各自の研究を計画的に進める
第 8 週	各自の研究を計画的に進める
第 9 週	論文の作成
第 10 週	論文の作成
第 11 週	論文の作成
第 12 週	研究成果の発表の準備
第 13 週	研究成果の発表の準備
第 14 週	卒業研究の発表会
第 15 週	卒業論文の提出と反省会

《卒業研究》

科目名	卒業研究Ⅱ				
担当者名	森田 義宏				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

自らが決めたテーマに沿って、必要な文献・資料を収集し、読み解き、必要に応じて調査もおこない、資料・データを分析し、それらを総合して卒業論文へとまとめ上げる。

授業では、研究計画に沿って、必要な文献や資料やデータを収集し、それらを分析し、関連づけ、論文としてまとめあげる。調査をする場合には、統計学の知識を学び、担当教員の指導のもと統計パッケージ SPSS を駆使し、統計解析を行う。

《授業の到達目標》

自分のテーマに必要な資料・データを収集できる。

テーマにそって集めた資料を取捨選択し、必要な情報を取り出すことができる。

自分の考えや理論の正しさについて、データや資料を使って証明していくことができる。そのようにして調べたことを論文としてまとめることができる。

《テキスト》

使用しない

《参考文献》

授業中随時紹介する

《成績評価の方法》

卒業論文評価 70%、発表（含プレゼンテーション、レジュメ）30%

《授業時間外学習》

授業中に指摘された点に留意し、文献や情報を集める。

授業中に指摘された点に留意し、ポートを見直し、推敲する。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	Ⅱ期開始までの進捗状況報告
第 2 週	研究の推進と指導 1
第 3 週	研究の推進と指導 2
第 4 週	研究の推進と指導 3
第 5 週	研究の推進と指導 4
第 6 週	中間報告会
第 7 週	卒論の作成 1
第 8 週	卒論の作成 1
第 9 週	卒論の作成 1
第 10 週	卒論の作成 1
第 11 週	卒論の作成 1
第 12 週	卒論発表会の準備
第 13 週	卒論発表会の準備
第 14 週	卒論発表会の準備
第 15 週	卒論発表会リハーサル

《卒業研究》

科目名	卒業研究Ⅱ				
担当者名	徳田 泰伸				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

- (1) 卒業研究は毎週、パソコンを使用して統計資料の入力と統計分析を行う。
- (2) 論文の書き方について学ぶ。
- (3) インターネットを利用し、統計資料の収集を行う。
- (4) 個人指導を行う。

《授業の到達目標》

自分で考える力を養う。電算機を使う仕事に自身を持てる技術を身につける。
統計分析の基礎が身につく。発表能力を身につける。報告書作成方法を習得できる。

《テキスト》

その都度指示する

《参考文献》

授業で紹介する

《成績評価の方法》

研究態度・分析力等（20%）、卒業研究論文（20%）、研究発表（60%）
授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

《授業時間外学習》

話し合った課題・問題等について文献資料等十分に収集し読み分析し次回までにまとめておく

《備考》**《授業計画》**

週	授 業 計 画
第 1 週	卒業研究の問題点について話し合い
第 2 週	各自で研究を進める
第 3 週	各自で研究を進める
第 4 週	各自で研究を進める
第 5 週	各自で研究を進める
第 6 週	中間発表（1）、各自で研究を進める
第 7 週	各自で研究を進める
第 8 週	各自で研究を進める
第 9 週	各自で研究を進める
第 10 週	中間発表（2）、各自で研究を進める
第 11 週	卒論の作成
第 12 週	卒論の作成
第 13 週	卒論の作成
第 14 週	卒業研究発表会の準備と事前発表会
第 15 週	卒業研究の発表会

《卒業研究》

科目名	卒業研究Ⅱ				
担当者名	木下 幸文				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

実験の実施と各指標の測定及び分析
卒業論文の作成
最終成果報告として卒業論文発表会の実施

《授業の到達目標》

卒業研究では、これまで学んできた知識をもとに、運動科学に関する研究活動を通じて、より専門的な知識を深める。また、自ら問題を発見してその解決法を思考し、実際にその効果を確認するために実験を行いながら基本的な研究能力と問題解決能力を培うことが出来る。

《テキスト》

特に指定しない

《参考文献》

その都度、適宜紹介する

《成績評価の方法》

日々の研究に望む姿勢(50%)、卒業論文と卒業論文発表会(50%)から総合的に判断する。

《授業時間外学習》

研究内容について日々精査すること。

《備考》

研究の内容や進捗状況によっては、時間割外に行うこともありうる。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	現在の研究状況の報告
第 2 週	各自で研究を進める
第 3 週	各自で研究を進める
第 4 週	各自で研究を進める
第 5 週	各自で研究を進める
第 6 週	各自で研究を進める
第 7 週	各自で研究を進める
第 8 週	各自で研究を進める
第 9 週	各自で研究を進める
第 10 週	各自で研究を進める
第 11 週	各自で研究を進める
第 12 週	各自で研究を進める
第 13 週	各自で研究を進める
第 14 週	各自で研究を進める
第 15 週	卒業論文発表会

《卒業研究》

科目名	卒業研究Ⅱ				
担当者名	加藤 和代				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

自らテーマを設定し、取り組み方を見出し、検証していくなどの研究過程は、柔軟な発想と積極性があればおもしろみも生まれます。研究発表を行い研究論文を書き上げることは、大学4年間の集大成であり、最も自分を成長させる場とすることもできます。論文執筆、研究発表を通して卒業後社会に貢献できる多面的な応用能力の養成をもめざします。

《授業の到達目標》

- 研究の成果を、論理的多面的に「卒業論文」としてまとめることができる。
- 研究の成果を、「研究発表会」でわかりやすく適切に表現し伝えることができる。

《テキスト》

使用しない

《参考文献》

各自の研究テーマに合わせて、必要な文献をその都度紹介する。

《成績評価の方法》

平常点（進捗状況、意欲・態度）50%、研究成果（研究発表、研究論文）50%から総合的に評価する。

《授業時間外学習》

計画的に、積極的に研究室、図書館を活用してすすめること。
研究の進捗状況を報告書で毎授業日に提出すること。
準備学習については、事前に個別に具体的な指示を出します。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	研究計画の確認 研究状況の報告
第2週	各自で研究を進める
第3週	各自で研究を進める
第4週	各自で研究を進める
第5週	中間発表（1）
第6週	中間発表（2）
第7週	各自で研究を進める
第8週	各自で研究を進める
第9週	各自で研究を進める
第10週	論文の書き方
第11週	論文作成
第12週	論文作成
第13週	研究発表の仕方 発表準備
第14週	論文要約の作成 発表準備
第15週	卒業研究発表会

《卒業研究》

科目名	卒業研究Ⅱ				
担当者名	本多 久夫				
授業方法	演習	単位・必選	3・必	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

モデルに基づくシミュレーションをコンピューターを用いて行う。この結果を見て、自分の考えた機構の当否を議論する。こうして物事を鋭く見る経験を積む。得た結果を魅力的に正確にわかりよく口頭でプレゼンテーションするとともに、レポートを執筆する。

(1) コンピューターシミュレーションの実施と結果の検討

いったんもっともらしいモデルができれば、これにより対象を理解できるばかりでなく、対象をよりよくデザインする事もできる。

(2) プレゼンテーション

口頭のプレゼンテーションを行い、レポートを執筆する。

《授業の到達目標》

自分の考えたテーマがどれだけ魅力的であるかを他人に説得する。研究を遂行した経過と結果をわかりよく正確に表現する。レポートと口頭によるこのようなプレゼンテーション能力を身につける。

《テキスト》

なし。研究の経過を記録するノートをつくること。

《参考文献》

必要に応じて探索する。

《成績評価の方法》

研究テーマの進捗についての日常的な打ち合わせの様子（1割）、口頭によるプレゼンテーション（2割）および卒業研究レポート（7割）。

《授業時間外学習》

研究という行為には、時間内・時間外の区別はないことはすでに述べたが、自分の行っている研究を他人にアピールするやり方や研究の意味づけも、散歩したり、人との会話・・・あらゆるときによい思いつきが生じてくる。これを大切にして研究に生かすこと。授業時間は、この一週間の思いつきを整理したりまとめたり、指導教員との議論に使う。

《備考》

自分を表現する心得を身につけること。何が好きで、何がしくて、どんな人間であるかを機会ある毎にいつでも表現(プレゼンテーション)できる様に。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	シミュレーションのプログラムの改良および実行
第 2 週	シミュレーションのプログラムの改良および実行
第 3 週	シミュレーションのプログラムの改良および実行
第 4 週	シミュレーションのプログラムの改良および実行
第 5 週	シミュレーションのプログラムの改良および実行
第 6 週	研究中間結果の図表を提出
第 7 週	結果の改良
第 8 週	結果の改良
第 9 週	結果の改良
第 10 週	結果の改良
第 11 週	卒業研究レポートドラフト提出
第 12 週	ドラフト改良
第 13 週	ドラフト改良
第 14 週	卒業研究レポート提出
第 15 週	口頭によるプレゼンテーション

《教職に関する科目》

科目名	中学校教育実習（事前事後指導を含む）				
担当者名	三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文				
授業方法	実習	単位・必選	5・選	開講年次・開講期	4年・I期分

《授業のねらい及び概要》

教育実習は、大学で学んだ知識や理論、あるいは技術を実践の場で具体的に展開させうる能力を養う場である。実際の授業や生徒指導を行うことを通じて、今まで学んだ理論や知識を結びつけて、生き生きとした教育を展開することが期待される。教育現場実習における事前指導では、実習にできるだけ抵抗感なく臨めるようにするとともに、教育実習に際して求められる必要不可欠な基礎的な事柄を確実に身につける。教育実習の事後における指導では、教育実習を通して学んだことを、教育実習前の自己の教育観、学校観、生徒観等と対比しつつ整理しながら、各自が適正な自己評価と反省を踏まえて、今後の学校教育や教師の課題を認識し、その後の学部における教育、研究に十分役立つようにすることを目的としている。

《授業の到達目標》

本実習科目は、教育実習とそれにかかわる事前事後の指導を含めたものである。実際の教育現場での教育指導にあたり、教育実習の事前と事後に行う指導を通して、授業技術や生徒理解の方法について直接的、体験的な学習を深めるとともに、教育実習の目的の達成をより確かなものにする。

《テキスト》

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」
その他、適宜紹介する。

《参考文献》

文部科学省『中学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『高等学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『(各教科等の)学習指導要領解説編』東山書房

《成績評価の方法》

基本的に欠席は認めない。ただし止むを得ない事情の時は必ず事前に連絡すること
教育現場実習校による評価(教育実習成績報告書)における「総合評価」(20%)
教育実習記録(実習ノート) (40%)
事前事後指導での活動 (40%)

《授業時間外学習》

<予習方法>

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」を熟読し、内容の理解する。内容時によってはその時の対応や 対処方法を考えまとめておく。

<復習方法>

学んだ内容のみならずその意味を理解し実習に備える能力を付けることを望む。

《備考》

中学校・高等学校の教育実習は学外実習であることを認識して、教職免許取得の意志を明確にし、主体的に実習に取り組むこと。教諭を目指す学生としてまた、生徒の範となる自覚と誇りをもって臨みたい。

教育実習を受講しようとするものは、兵庫大学教職課程の履修等に関する規定第4条を満たさなければならない。満たしていない場合、教育実習への参加を認めない。また、教育実習を行うに当たり、介護等体験を必ず済ませておくこと。

本科目は教育現場実習のほか、それに関わる事前事後指導も含んでおり、開講期は3年Ⅱ期から4年Ⅱ期までの3期となっている。また、必要に応じて時間外に補講を行う場合もある。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション (実習の心得・注意)
第 2 週	教育実習の意義と目的
第 3 週	教育実習への取り組み方 (教育実習校への挨拶、面接、実習上の諸注意など)
第 4 週	学習指導案の作成演習 (実習課題の明確化と方法について)
第 5 週	授業の教材研究・学習指導案の作成等 (模擬授業)
第 6 週	教育実習校でのオリエンテーション(指導方針等の確認、指導教員との打ち合せ等)
第 7 週	教育現場実習 1
第 8 週	教育現場実習 2
第 9 週	教育現場実習 3
第 10 週	教育現場実習 4
第 11 週	事後指導 (実習終了後の処理、礼状の作成)
第 12 週	事後研究 1 (自己評価と反省)
第 13 週	事後研究 2 (自己評価と課題の確認)
第 14 週	実習成果報告
第 15 週	教育実習のまとめと反省

《教職に関する科目》

科目名	中学校教育実習（事前事後指導を含む）				
担当者名	三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文				
授業方法	実習	単位・必選	5・選	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期分

《授業のねらい及び概要》

教育実習は、大学で学んだ知識や理論、あるいは技術を実践の場で具体的に展開させうる能力を養う場である。実際の授業や生徒指導を行うことを通じて、今まで学んだ理論や知識を結びつけて、生き生きとした教育を展開することが期待される。教育現場実習における事前指導では、実習にできるだけ抵抗感なく臨めるようにするとともに、教育実習に際して求められる必要不可欠な基礎的な事柄を確実に身につける。教育実習の事後における指導では、教育実習を通して学んだことを、教育実習前の自己の教育観、学校観、生徒観等と対比しつつ整理しながら、各自が適正な自己評価と反省を踏まえて、今後の学校教育や教師の課題を認識し、その後の学部における教育、研究に十分役立つようにすることを目的としている。

《授業の到達目標》

本実習科目は、教育実習とそれにかかわる事前事後の指導を含めたものである。実際の教育現場での教育指導にあたり、教育実習の事前と事後に行う指導を通して、授業技術や生徒理解の方法について直接的、体験的な学習を深めるとともに、教育実習の目的の達成をより確かなものにする。

《テキスト》

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」
その他、適宜紹介する。

《参考文献》

文部科学省『中学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『高等学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『(各教科等の)学習指導要領解説編』東山書房

《成績評価の方法》

基本的に欠席は認めない。ただし止むを得ない事情の時は必ず事前に連絡すること
教育現場実習校による評価(教育実習成績報告書)における「総合評価」(20%)
教育実習記録(実習ノート) (40%)
事前事後指導での活動 (40%)

《授業時間外学習》

<予習方法>

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」を熟読し、内容の理解する。内容時によってはその時の対応や 対処方法を考えまとめておく。

<復習方法>

学んだ内容のみならずその意味を理解し実習に備える能力を付けることを望む。

《備考》

中学校・高等学校の教育実習は学外実習であることを認識して、教職免許取得の意志を明確にし、主体的に実習に取り組むこと。教諭を目指す学生としてまた、生徒の範となる自覚と誇りをもって臨みたい。

教育実習を受講しようとするものは、兵庫大学教職課程の履修等に関する規定第4条を満たさなければならない。満たしていない場合、教育実習への参加を認めない。また、教育実習を行うに当たり、介護等体験を必ず済ませておくこと。

本科目は教育現場実習のほか、それに関わる事前事後指導も含んでおり、開講期は3年Ⅱ期から4年Ⅱ期までの3期となっている。また、必要に応じて時間外に補講を行う場合もある。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション (実習の心得・注意)
第 2 週	教育実習の意義と目的
第 3 週	教育実習への取り組み方 (教育実習校への挨拶、面接、実習上の諸注意など)
第 4 週	学習指導案の作成演習 (実習課題の明確化と方法について)
第 5 週	授業の教材研究・学習指導案の作成等 (模擬授業)
第 6 週	教育実習校でのオリエンテーション(指導方針等の確認、指導教員との打ち合せ等)
第 7 週	教育現場実習 1
第 8 週	教育現場実習 2
第 9 週	教育現場実習 3
第 10 週	教育現場実習 4
第 11 週	事後指導 (実習終了後の処理、礼状の作成)
第 12 週	事後研究 1 (自己評価と反省)
第 13 週	事後研究 2 (自己評価と課題の確認)
第 14 週	実習成果報告
第 15 週	教育実習のまとめと反省

《教職に関する科目》

科目名	高等学校教育実習（事前事後指導を含む）				
担当者名	三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文				
授業方法	実習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	4年・I期分

《授業のねらい及び概要》

教育実習は、大学で学んだ知識や理論、あるいは技術を実践の場で具体的に展開させうる能力を養う場である。実際の授業や生徒指導を行うことを通じて、今まで学んだ理論や知識を結びつけて、生き生きとした教育を展開することが期待される。教育現場実習における事前指導では、実習にできるだけ抵抗感なく臨めるようにするとともに、教育実習に際して求められる必要不可欠な基礎的な事柄を確実に身につける。教育実習の事後における指導では、教育実習を通して学んだことを、教育実習前の自己の教育観、学校観、生徒観等と対比しつつ整理しながら、各自が適正な自己評価と反省を踏まえて、今後の学校教育や教師の課題を認識し、その後の学部における教育、研究に十分役立つようにすることを目的としている。

《授業の到達目標》

本実習科目は、教育実習とそれにかかわる事前事後の指導を含めたものである。実際の教育現場での教育指導にあたり、教育実習の事前と事後に行う指導を通して、授業技術や生徒理解の方法について直接的、体験的な学習を深めるとともに、教育実習の目的の達成をより確かなものにする。

《テキスト》

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」
その他、適宜紹介する。

《参考文献》

文部科学省『中学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『高等学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『(各教科等の)学習指導要領解説編』東山書房

《成績評価の方法》

基本的に欠席は認めない。ただし止む得ない事情の時は必ず事前に連絡すること
教育現場実習校による評価(教育実習成績報告書)における「総合評価」(20%)
教育実習記録(実習ノート) (40%)
事前事後指導での活動 (40%)

《授業時間外学習》

<予習方法>

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」を熟読し、内容の理解する。内容時によってはその時の対応や 対処方法を考えまとめておく。

<復習方法>

学んだ内容のみならずその意味を理解し実習に備える能力を付けることを望む。

《備考》

中学校・高等学校の教育実習は学外実習であることを認識して、教職免許取得の意志を明確にし、主体的に実習に取り組むこと。教諭を目指す学生としてまた、生徒の範となる自覚と誇りをもって臨みたい。

教育実習を受講しようとするものは、兵庫大学教職課程の履修等に関する規定第4条を満たさなければならない。満たしていない場合、教育実習への参加を認めない。また、教育実習を行うに当たり、介護等体験を必ず済ませておくこと。

本科目は教育現場実習のほか、それに関わる事前事後指導も含んでおり、開講期は3年Ⅱ期から4年Ⅱ期までの3期となっている。また、必要に応じて時間外に補講を行う場合もある。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション (実習の心得・注意)
第 2 週	教育実習の意義と目的
第 3 週	教育実習への取り組み方 (教育実習校への挨拶、面接、実習上の諸注意など)
第 4 週	学習指導案の作成演習 (実習課題の明確化と方法について)
第 5 週	授業の教材研究・学習指導案の作成等 (模擬授業)
第 6 週	教育実習校でのオリエンテーション(指導方針等の確認、指導教員との打ち合せ等)
第 7 週	教育現場実習 1
第 8 週	教育現場実習 2
第 9 週	教育現場実習 3
第 10 週	教育現場実習 4
第 11 週	事後指導 (実習終了後の処理、礼状の作成)
第 12 週	事後研究 1 (自己評価と反省)
第 13 週	事後研究 2 (自己評価と課題の確認)
第 14 週	実習成果報告
第 15 週	教育実習のまとめと反省

《教職に関する科目》

科目名	高等学校教育実習（事前事後指導を含む）				
担当者名	三宅 一郎・大平 曜子・木下 幸文				
授業方法	実習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期分

《授業のねらい及び概要》

教育実習は、大学で学んだ知識や理論、あるいは技術を実践の場で具体的に展開させうる能力を養う場である。実際の授業や生徒指導を行うことを通じて、今まで学んだ理論や知識を結びつけて、生き生きとした教育を展開することが期待される。教育現場実習における事前指導では、実習にできるだけ抵抗感なく臨めるようにするとともに、教育実習に際して求められる必要不可欠な基礎的な事柄を確実に身につける。教育実習の事後における指導では、教育実習を通して学んだことを、教育実習前の自己の教育観、学校観、生徒観等と対比しつつ整理しながら、各自が適正な自己評価と反省を踏まえて、今後の学校教育や教師の課題を認識し、その後の学部における教育、研究に十分役立つようにすることを目的としている。

《授業の到達目標》

本実習科目は、教育実習とそれにかかわる事前事後の指導を含めたものである。実際の教育現場での教育指導にあたり、教育実習の事前と事後に行う指導を通して、授業技術や生徒理解の方法について直接的、体験的な学習を深めるとともに、教育実習の目的の達成をより確かなものにする。

《テキスト》

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」
その他、適宜紹介する。

《参考文献》

文部科学省『中学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『高等学校学習指導要領』国立印刷局
文部科学省『(各教科等の)学習指導要領解説編』東山書房

《成績評価の方法》

基本的に欠席は認めない。ただし止むを得ない事情の時は必ず事前に連絡すること
教育現場実習校による評価(教育実習成績報告書)における「総合評価」(20%)
教育実習記録(実習ノート) (40%)
事前事後指導での活動 (40%)

《授業時間外学習》

<予習方法>

兵庫大学健康システム学科「教育実習の手引き」を熟読し、内容の理解する。内容時によってはその時の対応や 対処方法を考えまとめておく。

<復習方法>

学んだ内容のみならずその意味を理解し実習に備える能力を付けることを望む。

《備考》

中学校・高等学校の教育実習は学外実習であることを認識して、教職免許取得の意志を明確にし、主体的に実習に取り組むこと。教諭を目指す学生としてまた、生徒の範となる自覚と誇りをもって臨みたい。
教育実習を受講しようとするものは、兵庫大学教職課程の履修等に関する規定第4条を満たさなければならない。満たしていない場合、教育実習への参加を認めない。また、教育実習を行うに当たり、介護等体験を必ず済ませておくこと。

本科目は教育現場実習のほか、それに関わる事前事後指導も含んでおり、開講期は3年Ⅱ期から4年Ⅱ期までの3期となっている。また、必要に応じて時間外に補講を行う場合もある。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション (実習の心得・注意)
第 2 週	教育実習の意義と目的
第 3 週	教育実習への取り組み方 (教育実習校への挨拶、面接、実習上の諸注意など)
第 4 週	学習指導案の作成演習 (実習課題の明確化と方法について)
第 5 週	授業の教材研究・学習指導案の作成等 (模擬授業)
第 6 週	教育実習校でのオリエンテーション(指導方針等の確認、指導教員との打ち合せ等)
第 7 週	教育現場実習 1
第 8 週	教育現場実習 2
第 9 週	教育現場実習 3
第 10 週	教育現場実習 4
第 11 週	事後指導 (実習終了後の処理、礼状の作成)
第 12 週	事後研究 1 (自己評価と反省)
第 13 週	事後研究 2 (自己評価と課題の確認)
第 14 週	実習成果報告
第 15 週	教育実習のまとめと反省

《教職に関する科目》

科目名	養護実習（事前事後指導を含む）				
担当者名	大平 曜子・加藤 和代				
授業方法	実習	単位・必選	5・選	開講年次・開講期	4年・I期分

《授業のねらい及び概要》

養護実習はこれまで大学で学んできた専門知識や理論、技術や感性を実践の場で展開し、実践する能力を養い、評価する機会です。4年次I期ないしII期に実施される小・中・高等学校での養護実習には、養護教諭の専門的職務内容、実習に必要とされる技術や知識など、学校現場に出ていくために不可欠な事柄を確実に身につけて臨んでいただきたい。受講者は、学校における養護教諭の役割と意義について再確認し、教師としての能力も同時に高め、実際の教育現場で教育実践に携わることで、机上の学習では得られない学びを経験することができます。教職への強い決意と意欲を持って、実習に取り組まれることを期待しています。

実習の事後指導では、実習での学びを確認し、実習以前の教育観、生徒観との比較や実習評価から、自らの課題を明らかにし、真の教育者として育つための対策を講じていきます。

《授業の到達目標》

養護実習の手引きにある実習目標を本講座の目標とする。

教育現場での実践を通じて、養護の専門的知識を深め、技術を磨き、実習目標の達成を確かなものにする。

自らの実習目標を定め、実習全般を通じて達成に努める。

《テキスト》

兵庫大学健康システム学科「養護実習の手引き」

『新学校保健実務必携』（第一法規）

《参考文献》

『児童・生徒の健康診断マニュアル』日本学校保健会（第一法規）

その他、適宜紹介する。

《成績評価の方法》

実習校評価（20%）、養護実習日誌の記録（40%）、事前事後指導での活動（実習報告会を含む）（40%）とし、100点満点で、60点以上を合格とする。

《授業時間外学習》

実習に向けて、文献等を参考に、知識の確認と定着をはかる。

実習室の空き時間を利用して、基礎的技術の確認をおこなう。

実習期間中の生活時間を想定し、規則正しい生活習慣を確立しておく。

《備考》

養護教諭の免許取得の意志を明確にし、主体的に実習に臨むこと。

実習中は、実習生ではあるが、学生気分を廃止、児童・生徒の範となる言動をこころがけたい。

養護実習終了後、事後指導である実習報告会を終えた後に、最終評価を行なう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	オリエンテーション 養護実習直前指導
第2週	保健指導と保健学習の模擬授業と相互評価
第3週	保健室における対応の仕方及び記録の仕方、日常の学校環境衛生検査
第4週	定期健康診断の考え方・進め方、保健指導案作成
第5週	目標に沿った事前準備
第6週	各学校の直前指導 及び 準備
第7週	養護実習（3週間～4週間）：この間に、訪問指導
第8週	養護実習（3週間～4週間）：この間に、訪問指導
第9週	養護実習（3週間～4週間）：この間に、訪問指導
第10週	養護実習（3週間～4週間）：この間に、訪問指導
第11週	実習終了後の処理、礼状作成
第12週	実習成果のまとめ 技術の確認
第13週	実習成果のまとめ 法的根拠の確認
第14週	実習成果のまとめ（グループ討議）
第15週	実習成果のまとめ（グループ討議）

《教職に関する科目》

科目名	養護実習（事前事後指導を含む）				
担当者名	大平 曜子・加藤 和代				
授業方法	実習	単位・必選	5・選	開講年次・開講期	4年・Ⅱ期分

《授業のねらい及び概要》

養護実習はこれまで大学で学んできた専門知識や理論、技術や感性を実践の場で展開し、実践する能力を養い、評価する機会です。4年次Ⅰ期ないしⅡ期に実施される小・中・高等学校での養護実習には、養護教諭の専門的知識、教育に必要とされる技術や知識など、学校現場に出ていくために不可欠な事柄を確実に身につけて臨んでいただきたい。受講者は、学校における養護教諭の役割と意義について再確認し、教師としての能力も同時に高め、実際の教育現場で教育実践に携わることで、机上の学習では得られない学びを経験することができます。教職への強い決意と意欲を持って、実習に取り組まれることを期待しています。実習の事後指導では、実習での学びを確認し、実習以前の教育観、生徒観との比較や実習評価から、自らの課題を明らかにし、真の教育者として育つための対策を講じていきます。

《授業の到達目標》

養護実習の手引きにある実習目標を本講座の目標とする。
教育現場での実践を通じて、養護の専門的知識を深め、技術を磨き、実習目標の達成を確かなものにする。
自らの実習目標を定め、実習全般を通じて達成に努める。
実習終了後は、自ら振り返るとともに、指導者からの評価を受け止め、今後の課題を明確にしました、対策を講じることができる。

《テキスト》

兵庫大学健康システム学科「養護実習の手引き」
『新学校保健実務必携』（第一法規）

《参考文献》

『児童・生徒の健康診断マニュアル』日本学校保健会（第一法規）
その他、適宜紹介する。

《成績評価の方法》

実習校評価（20%）、養護実習日誌の記録（40%）、事前事後指導での活動（実習報告会を含む）（40%）とし、100点満点で、60点以上を合格とする。

《授業時間外学習》

実習に向けて、文献等を参考に、知識の確認と定着をはかる。
実習室の空き時間を利用して、基礎的技術の確認をおこなう。
実習期間中の生活時間を想定し、規則正しい生活習慣を確立しておく。

《備考》

養護教諭の免許取得の意志を明確にし、主体的に実習に臨むこと。
実習中は、実習生ではあるが、学生気分を廃止、児童・生徒の範となる言動をこころがけたい。
養護実習終了後、事後指導である実習報告会を終えた後に、最終評価を行なう。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	実習終了後の処理、礼状作成
第 2 週	実習成果のまとめ（グループ討議）
第 3 週	実習成果のまとめ（グループ討議）
第 4 週	実習報告会の準備 スライド作成 レジュメの作成 運営についてグループ協議
第 5 週	実習報告会の準備 スライド作成 レジュメの作成
第 6 週	実習報告会での発表
第 7 週	実習成果のまとめ
第 8 週	
第 9 週	
第 10 週	
第 11 週	
第 12 週	
第 13 週	
第 14 週	
第 15 週	